

高崎町文化財調査報告書

第 1 集

はら むら うえ
原村上地下式横穴墓群

高崎町出土の古墳時代人骨

昭 和 62 年 度

宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会

正誤表

行	誤	正	行	誤	正
25	第7回左上(CとCの間の)Ⅲ	II	39	上から 9	下北矢陣地下式 下北矢陣地下式
26	下から 9	10	40	下から 12	義延
27	下から 4	權亂	41	下から 11	推進
28	上から 7	難	42	上から 12	難
29	上から 3	難	43	上から 15	難
30	上から 4	難見されていゆ 難見されていゆ	44	上から 13	いたことから、
			45	上から 11	いたことから、
			46	上から 2	難
			47	上から 10	この難がひどい
			48	上から 8	この難がひどい
			49	上から 9	難
			50	上から 12	難
			51	上から 7	難
			52	上から 9	難
			53	上から 11	難
			54	上から 12	難
			55	上から 8	難
			56	上から 9	難
			57	上から 6	難
			58	上から 7	難
			59	上から 8	難
			60	上から 9	難
			61	上から 10	難
			62	上から 11	難
			63	上から 12	難
			64	上から 13	難
			65	上から 14	難
			66	上から 15	難
			67	上から 16	難
			68	上から 17	難
			69	上から 18	難
			70	上から 19	難
			71	上から 20	難
			72	上から 21	難
			73	上から 22	難
			74	上から 23	難
			75	上から 24	難
			76	上から 25	難
			77	上から 26	難
			78	上から 27	難
			79	上から 28	難
			80	上から 29	難
			81	上から 30	難
			82	上から 31	難
			83	上から 32	難
			84	上から 33	難
			85	上から 34	難
			86	上から 35	難
			87	上から 36	難
			88	上から 37	難
			89	上から 38	難
			90	上から 39	難
			91	上から 40	難
			92	上から 41	難
			93	上から 42	難
			94	上から 43	難
			95	上から 44	難
			96	上から 45	難
			97	上から 46	難
			98	上から 47	難
			99	上から 48	難
			100	上から 49	難
			101	上から 50	難
			102	上から 51	難
			103	上から 52	難
			104	上から 53	難
			105	上から 54	難
			106	上から 55	難
			107	上から 56	難
			108	上から 57	難
			109	上から 58	難
			110	上から 59	難
			111	上から 60	難
			112	上から 61	難
			113	上から 62	難
			114	上から 63	難
			115	上から 64	難
			116	上から 65	難
			117	上から 66	難
			118	上から 67	難
			119	上から 68	難
			120	上から 69	難
			121	上から 70	難
			122	上から 71	難
			123	上から 72	難
			124	上から 73	難
			125	上から 74	難
			126	上から 75	難
			127	上から 76	難
			128	上から 77	難
			129	上から 78	難
			130	上から 79	難
			131	上から 80	難
			132	上から 81	難
			133	上から 82	難
			134	上から 83	難
			135	上から 84	難
			136	上から 85	難
			137	上から 86	難
			138	上から 87	難
			139	上から 88	難
			140	上から 89	難
			141	上から 90	難
			142	上から 91	難
			143	上から 92	難
			144	上から 93	難
			145	上から 94	難
			146	上から 95	難
			147	上から 96	難
			148	上から 97	難
			149	上から 98	難
			150	上から 99	難
			151	上から 100	難
			152	上から 101	難
			153	上から 102	難
			154	上から 103	難
			155	上から 104	難
			156	上から 105	難
			157	上から 106	難
			158	上から 107	難
			159	上から 108	難
			160	上から 109	難
			161	上から 110	難
			162	上から 111	難
			163	上から 112	難
			164	上から 113	難
			165	上から 114	難
			166	上から 115	難
			167	上から 116	難
			168	上から 117	難
			169	上から 118	難
			170	上から 119	難
			171	上から 120	難
			172	上から 121	難
			173	上から 122	難
			174	上から 123	難
			175	上から 124	難
			176	上から 125	難
			177	上から 126	難
			178	上から 127	難
			179	上から 128	難
			180	上から 129	難
			181	上から 130	難
			182	上から 131	難
			183	上から 132	難
			184	上から 133	難
			185	上から 134	難
			186	上から 135	難
			187	上から 136	難
			188	上から 137	難
			189	上から 138	難
			190	上から 139	難
			191	上から 140	難
			192	上から 141	難
			193	上から 142	難
			194	上から 143	難
			195	上から 144	難
			196	上から 145	難
			197	上から 146	難
			198	上から 147	難
			199	上から 148	難
			200	上から 149	難
			201	上から 150	難
			202	上から 151	難
			203	上から 152	難
			204	上から 153	難
			205	上から 154	難
			206	上から 155	難
			207	上から 156	難
			208	上から 157	難
			209	上から 158	難
			210	上から 159	難
			211	上から 160	難
			212	上から 161	難
			213	上から 162	難
			214	上から 163	難
			215	上から 164	難
			216	上から 165	難
			217	上から 166	難
			218	上から 167	難
			219	上から 168	難
			220	上から 169	難
			221	上から 170	難
			222	上から 171	難
			223	上から 172	難
			224	上から 173	難
			225	上から 174	難
			226	上から 175	難
			227	上から 176	難
			228	上から 177	難
			229	上から 178	難
			230	上から 179	難
			231	上から 180	難
			232	上から 181	難
			233	上から 182	難
			234	上から 183	難
			235	上から 184	難
			236	上から 185	難
			237	上から 186	難
			238	上から 187	難
			239	上から 188	難
			240	上から 189	難
			241	上から 190	難
			242	上から 191	難
			243	上から 192	難
			244	上から 193	難
			245	上から 194	難
			246	上から 195	難
			247	上から 196	難
			248	上から 197	難
			249	上から 198	難
			250	上から 199	難
			251	上から 200	難
			252	上から 201	難
			253	上から 202	難
			254	上から 203	難
			255	上から 204	難
			256	上から 205	難
			257	上から 206	難
			258	上から 207	難
			259	上から 208	難
			260	上から 209	難
			261	上から 210	難
			262	上から 211	難
			263	上から 212	難
			264	上から 213	難
			265	上から 214	難
			266	上から 215	難
			267	上から 216	難
			268	上から 217	難
			269	上から 218	難
			270	上から 219	難
			271	上から 220	難
			272	上から 221	難
			273	上から 222	難
			274	上から 223	難
			275	上から 224	難
			276	上から 225	難
			277	上から 226	難
			278	上から 227	難
			279	上から 228	難
			280	上から 229	難
			281	上から 230	難
			282	上から 231	難
			283	上から 232	難
			284	上から 233	難
			285	上から 234	難
			286	上から 235	難
			287	上から 236	難
			288	上から 237	難
			289	上から 238	難
			290	上から 239	難
			291	上から 240	難
			292	上から 241	難
			293	上から 242	難
			294	上から 243	難
			295	上から 244	難
			296	上から 245	難
			297	上から 246	難
			298	上から 247	難
			299	上から 248	難
			300	上から 249	難
			301	上から 250	難
			302	上から 251	難
			303	上から 252	難
			304	上から 253	難
			305	上から 254	難
			306	上から 255	難
			307	上から 256	難
			308	上から 257	難
			309	上から 258	難
			310	上から 259	難
			311	上から 260	難
			312	上から 261	難
			313	上から 262	難
			314	上から 263	難
			315	上から 264	難
			316	上から 265	難
			317	上から 266	難
			318	上から 267	難
			319	上から 268	難
			320	上から 269	難
			321	上から 270	難
			322	上から 271	難
			323	上から 272	難
			324	上から 273	難
			325	上から 274	難
			326	上から 275	難
			327	上から 276	難
			328	上から 277	難
			329	上から 278	難
			330	上から 279	難
			331	上から 280	難
			332	上から 281	難
			333	上から 282	難

序

この報告書は高崎町内の大字前田字仮屋尾、大字繩瀬字原村上、大字繩瀬字横尾、大字繩瀬繩瀬小学校校庭、大字繩瀬字塚原、大字江平字字野原等の地下式横穴墓の緊急調査を昭和38年以降続けてきたが、この時の人骨を一括して長崎大学医学部解剖学第二教室に調査依頼をしたものであります。

また、昭和57年8月の大字繩瀬字原村上の地下式横穴墓一基、更に昭和61年11月及び12月に同地より2基の地下式横穴墓を、それぞれ緊急調査したものをお載したものです。

この調査で古墳時代の遺構遺物の多数が検出されており、これらは宮崎県における貴重な研究資料となることでしょう。したがって本報告書が広く活用されることを願う次第であります。

終わりに、発掘調査から報告書刊行にいたるまで終始熱心に御指導下さいました、諸先生方をはじめ調査に深い御理解をいただきました関係機関、地元町民各位に心から感謝申し上げます。

昭和63年3月31日

高崎町教育委員会

教育長 向田 一男

例　　言

1. 本書は、高崎町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 掲載しているのは、高崎町の歴史的環境ほか古墳時代の報告2件である。
3. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体 宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会

教　育　長	瀬之口　宗　寿	(昭和57年度)
	向　田　一　男	(昭和61年度)
社会教育課長	長谷川　政　和	(昭和57年度)
	海老原　孝　幸	(昭和61年度)

(調査担当)

社会教育課主幹	黒　木　昭　三	(昭和57年度)
社会教育課非常勤特別職	黒　木　昭　三	(昭和61年度)
社会教育課長補佐	山　崎　博　伸	(昭和61年度)

調　　査　員

宮崎県総合博物館

埋蔵文化財センター主事　　菅　付　和　樹　(昭和57・61年度)

宮崎県教育庁文化課主任主事　面　高　哲　郎　(昭和61年度)
長崎大学医学部解剖学第二教室

助　教　授　松　下　孝　幸　(昭和61年度)
講　　師　分　部　哲　秋　(昭和61年度)

4. 本書の編集は宮崎県教育庁文化課が行った。また、「高崎町の歴史的環境」は宮崎県教育庁文化課主任主事　長津宗重が、そのほかは、各調査員がそれぞれ執筆した。

総 目 次

I. 高崎町の歴史的環境	1
II. 原村上地下式横穴墓群	9
— 5号～7号地下式横穴墓 —	
III. 高崎町出土の古墳時代人骨	55
1. 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨	57
2. 宮崎県高崎町出土の古墳時代幼小児骨	159

I . 高崎町の歴史的環境

長 津 宗 重



I. 高崎町の歴史的環境

高崎町は宮崎県の南西部に位置し、諸県山地北西支脈と都城盆地中・北部台地群に属し⁽¹⁾、東側を大淀川、西側をその支流である高崎川が流れている。地形区分では山地が31%、シラス台地が27%と高く、標高は100~200mが74.2%と高い。

町内の遺跡は、昭和58年に公表された遺跡分布図によれば62ヶ所であり、その多くは町教育委員会の黒木昭三氏の精力的な調査によるところが大である（第1図）。それによれば町内の遺跡は7グループに分かれる。

縄文時代の遺跡は、大淀川の支流の炭床川中流域、木下川上流域、荒場川中・上流域、高崎川中流域の5グループに16ヶ所分布している。早期の遺跡としては横円押型文土器が出土した砂子田遺跡⁽⁴⁾があるが、前期・中期の遺跡は知られていない。前期の曾畠式土器は東勝の高城町城ヶ尾遺跡⁽⁵⁾で御池ボラの下層の黑色土から出土しており、今後町内で発見される可能性は大である。日向においては中期遺跡は稀薄であるので、今後町内でも発見される可能性は少ない。後期になると遺跡が増大し、後期前半の沈線文（指宿式系）土器を出土した椎現ケ宇都遺跡・柏ノ木遺跡⁽⁶⁾・下原遺跡⁽⁷⁾、後期後半の黑色磨研土器を出土した宇都口遺跡、後期後半（西平式系土器）・晚期前半（黒色磨研土器）の北迫遺跡、晚期前半の栗巣上原遺跡が知られている。特に柏ノ木遺跡では286cm×270cmの方形プランの竪穴住居跡が検出され、また北迫遺跡でも竪穴住居跡の一部が検出されている。県内の後期の竪穴住居跡としては平塚遺跡（宮崎市）・丸野第2遺跡（田野町）・下弓田遺跡（串間市）のみであり、注目される。

弥生時代の遺跡は、高崎川左岸・荒場川中流域、木下川中・下流域、炭床川下流域に12ヶ所分布している。発掘調査が行なわれた今村遺跡⁽⁸⁾では中期前葉～中葉の亀の甲式壙を出土した。朴木遺跡⁽⁹⁾は、炭床川を西に臨む標高150~160mの丘陵先端部に位置し、石蓋土壙墓が11基検出された。土壙の石蓋はすべて1枚の扁平な板石である。特に1号石蓋土壙墓の床面全体から無茎磨製石鏡が24本も出土したのは特筆される。当石蓋土壙墓群は周辺から出土した鋤先口縁の須玖式の高壙から中期後半に比定される。県内では弥生時代の石蓋土壙墓は初例であるので、墓制の変遷・地域性を知る上で注目されると共に、1号石蓋土壙墓の磨製石鏡の多数副葬は共同体の構造・発展段階を推定する上で貴重である。

古墳時代の遺跡は15ヶ所知られている。塚原古墳群は大淀川左岸の砂礫台地面（成層シラス台地面）の縄瀬台地群の標高154m（比高28m）に位置し、前方後円墳1基・円墳19基・方墳1基・地下式横穴墓6基で構成されている。1号墳は全長67.6m、後円部径33.4m、同高さ6.0m、前方部長さ30.0m、同幅22.0m、同高さ4.5mの前方後円墳である。地下式横穴墓の構造は平入り不定形プランで、1・3・4号地下式横穴墓は羨道部が長い片袖型である。1号地下式横穴墓は棚状施設に鉄鎌を副葬している。県南の山間部において前方後円墳を有する古墳群はここと南々

東8.9kmの牧ノ原古墳群〔前方後円墳3基（全長50.4m・45.4m・38.6m）・円墳10基・地下式横穴墓1基〕と南6.3kmの志和池古墳群〔前方後円墳1基（後円部径31.0m）・円墳11基・地下式横穴墓6基〕だけであり注目されるが、塚原古墳群の首長墓の系譜が前方後円墳としては1代で断続しているので、都城盆地を経済基盤として、3古墳群の中で首長権の交替というような動的なあり方で首長墓の系譜を追う必要があるのか、或いは前方後円墳から地下式横穴墓へといふ因式で把握するのかという問題がある。当地域の地下式横穴墓の副葬品を見る限りでは前者の考え方⁽⁸⁾が支持される。当古墳群は5世紀後半～6世紀に比定される。横谷原村古墳群は高崎川左岸の砂礫台地面の標高154m（比高21m）に位置し、円墳8基・地下式横穴墓7基で構成されている。地下式横穴墓の構造は平入り片袖型長方形プランである。特に2号地下式横穴墓から鉄劍・イモガイ製貝輪が出土している。⁽⁹⁾ 6世紀前半の地下式横穴墓群である。横尾、鶴ノ原、仮屋屋にも地下式横穴墓群が分布している。副葬品から見る限りにおいては宮崎平野部やえびの地区に見られる甲冑・鏡に代表されるような階層の突出はないばかりか、馬具の副葬も見られない。⁽¹⁰⁾

古墳時代初頭の集落である上示野原遺跡は、大淀川の支流である荒場川に開拓された標高150～180m（比高約20m）のシラス台地上に位置し、円形プランを基調とする日向型間仕切り住居1軒、方形プランの堅穴住居4軒が発掘調査された。⁽¹¹⁾ 日向型間仕切り住居である2号住居は約80m²と大型であるのに対して、方形プランの1号住居は41.3m²、3・4・5号住居は20m²代と小型である。集落の一部しか発掘調査されていないが、当地域の当時期における集落構造・構成を考える上で示唆的な様相を示している。

歴史時代の遺跡としては、平安時代前半（10世紀前半）の越州窯青磁碗を出土した政所第2遺跡⁽¹²⁾（東霧島神社）、平安時代～中世の掘立柱建物3棟を検出した下原遺跡がある。⁽¹³⁾

当地域は縄文時代後期と古墳時代初頭に大きな画期が見られ、特に弥生時代の石蓋土壙墓のあり方、或いは古墳時代における前方後円墳と地下式横穴墓の共存のあり方、そしてその両時代の狭間での日向型間仕切り住居のあり方に山間部という地域での文化・政治といううねりに如何に対応していくかを謹びながらも読み取ることができる。各時代の具体的な描写は今後の発掘調査に期待したい。

註

(1) 経済企画庁総合開発局「土地分類図（宮崎県）」 1974

(2) (1)と同じ

(3) 面高哲郎 「北迫遺跡発掘調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第26集 1983

(4) 石川恒太郎 「高崎町炭床出土の縄文土器について」『宮崎県文化財調査報告書』 第16集 1972

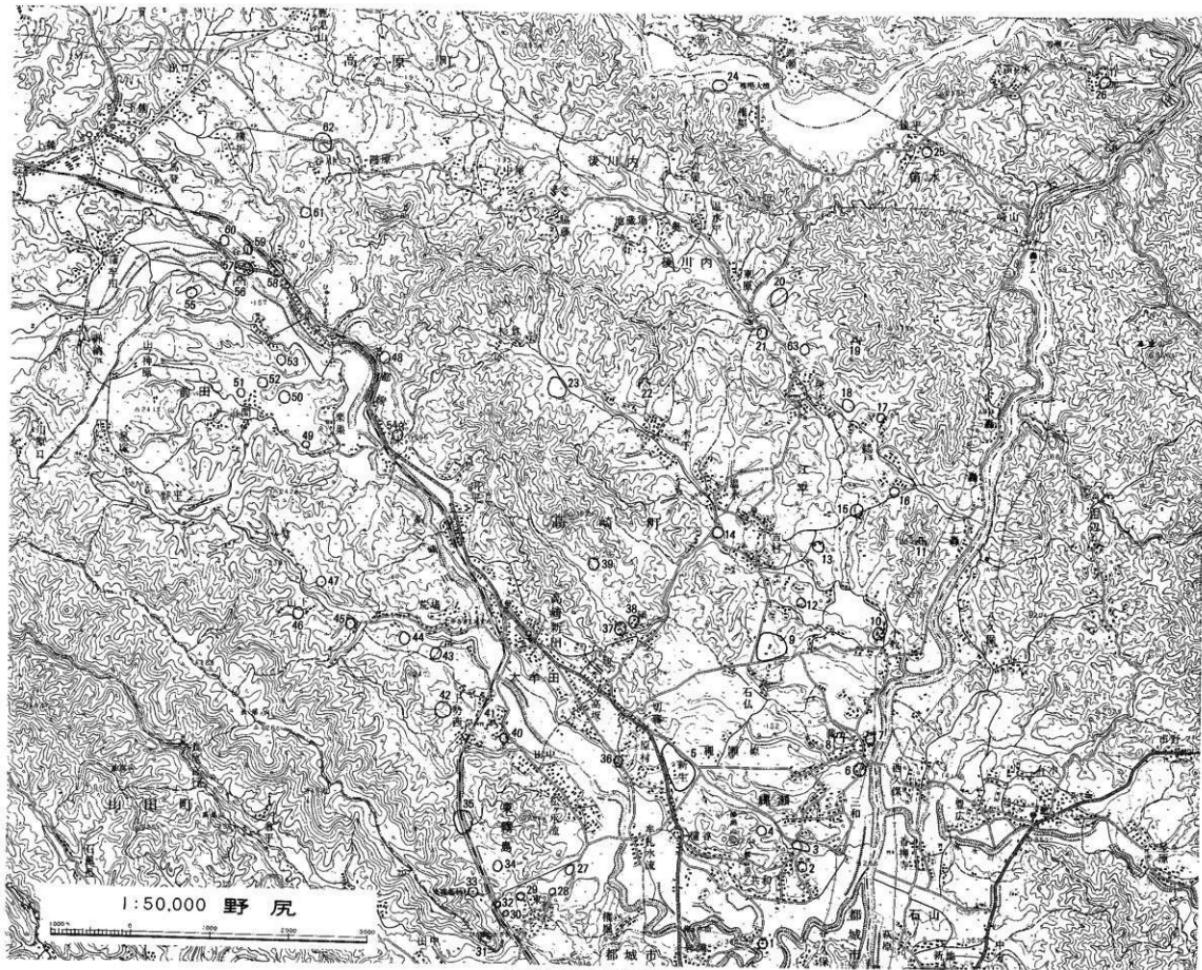
(5) 昭和62年3月～7月に高城町教育委員会が発掘調査を行なっているが、未報告。

(6) (3)と同じ

- (7) 岩永哲夫 「柏ノ木遺跡発掘調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第16集 1972
- (8) 茂山 譲 「下原遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(3)』 1980
- (9) (3)と同じ
- (10) (3)と同じ
- (11) 茂山 譲 「栗原上原遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(3)』 1980
- (12) 昭和60年に宮崎大学が発掘調査したが、未報告。
- (13) 長津宗重 「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第4集 1976
- (14) 石川恒太郎他 「下弓田遺跡」『日向遺跡総合調査報告書』 第1輯 1961
- (15) 茂山 譲 「今村遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告(3)』 1979
- (16) 昭和60年3月に高崎町教育委員会が発掘調査を行なっているが、未報告。
- (17) 石川恒太郎 「高崎町塚原地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第14集 1969
石川恒太郎 「高崎町塚原地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第15集 1970
- (18) 岩永哲夫 「高崎町原村上地下式横穴調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第18集 1976
日高正晴 「横谷原村地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』 第19集 1977
- (19) 栗原文藏 「宮崎県北諸県郡高崎町繩瀬小学校庭の地下式横穴」『九州考古学』 41~44 1971
石川恒太郎 「高崎町繩瀬小学校校庭の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第16集
1972
- 石川恒太郎 「高崎町横尾地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第16集 1972
- (20) (3)と同じ
- (21) 石川恒太郎 「高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』 第15集 1970
茂山 譲他 「日守地下式横穴54-1~4号」『宮崎県文化財調査報告書』 第22集 1980
- (22) 茂山 譲 「上示野原遺跡発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』 第22集 1980
- (23) 長津宗重 「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』 第2集 1985
- (24) 面高哲郎 「高崎町東霧島出土の輸入陶磁器」『宮崎考古』 第6号 1980
- (25) (8)と同じ

表1 高崎町内の遺跡

番号	遺跡名	所在地(大字・字)	時代	番号	遺跡名	所在地(大字・字)	時代
1	通之口	绳 漬・通之口	古 墳	33	東霧島神社	東霧島・鳩園	中世
2	横尾地下式 横穴墓群	"・横尾	古 墳	34	下 原	"・下原	中世
3	横 尾	"・"	不詳	35	豆 付	豆付追	弥~古
4	山 尻	"・山 尻	弥 生	36	高 板	坂前	古 墳
5	原村上地下式 横穴墓群	"・原村上	古 墳	37	鍋 前 第 1	"・鍋 前	弥 生
6	鳩 越 第 1	"・鳩 越	"	38	" 第 2	"・"	"
7	" 第 2	"・"	繩 文	39	鍋 上	"・鍋 上	不詳文
8	柳 の 城	"・藏 元	中 世	40	一 向	"・一 向	繩 文
9	塙 原 古 墳 群	"・塙 原	古 墳	41	浮 城	"・西村前	中 世
10	小 牧	"・小 牧	不詳	42	北 追	"・北 追	繩 文
11	木 場 城	"・宮 谷	中 世	43	上 示 野 原	"・上示野原	古 墳
12	池 / 友	江 平・池/友	弥 生	44	黒 勢 戸	"・黒勢戸	"
13	大 砂	"・大 砂	不詳	45	永 追 第 1	"・永 追	繩 文
14	佐 渡	"・坂 元	弥 生	46	山 下	"・大 坪	"
15	鶴ノ原地下式 横穴墓群	"・西 原	古 墳	47	永 追 第 2	"・"	弥 生
16	鶴 戸	"・鶴 戸	弥 生	48	柏 木	"・柏 木	繩 文
17	大 川 毛 A	"・大川毛	繩 文	49	栗 須 前 田	木・栗須上原	古 墳
18	" B	"・"	弥生?	50	栗 須 第 2	"・"	弥 生
19	すかしの城	"・柳 田	中 世	51	源 太	"・源 太	繩 文
20	鶴 戸 口	"・鶴戸口	繩 文	52	上 所 追	"・上所追	古 墳
21	砂 子 田	"・砂子田	"	53	下 朝 倉	"・下朝倉	繩 文
22	城 の 岡	"・木 下	中 世	54	青 木	"・下 原	古 墳
23	権現ケ宇都	"・権現ケ宇都	繩 文	55	池 山 口	"・池山口	旧石器?
24	上 原	笛 水・上 原	"	56	高 峰 城	"・丸 回	中 世
25	池 田	"・池 田	弥 生	57	様 屋 敷	"・谷 川	弥 生
26	竹 元	"・笛水東原	繩 文	58	鳥 越 前	"・鳥 越	"
27	政 所 第 1	東霧島・政 所	古 墳	59	鳥 越	"・鳥 越	繩 文
28	政 所 第 2	"・"	平安	60	鳥 井 原	"・鳥井原	"
29	今 村	"・今 村	弥 生	61	饭 屋 尾	"・饭屋尾	弥~古
30	中 野 第 1	"・中 野	古 墳	62	日 守 地 下 式 横 穴 墓 群	"・饭屋尾	古 墳
31	陣 の 端	"・中 野	中 世	63	朴 木	江 平・朴 木	繩~弥
32	中 野 第 2	東霧島・中 野	弥~古				



第1図 高崎町遺跡分布図

II. 原村上地下式横穴墓群

— 5号～7号地下式横穴墓 —

例　　言

1. 本報告は、高崎町教育委員会が県文化課の協力を得て実施した原村上地下式横穴墓群の発掘調査報告である。
2. 調査年月日および調査担当者は本文中に明記してある。
3. 本報告の執筆、作図、製図等は各調査担当者が分担して行い、文責は目次に明記している。また、特に用語の統一はしなかったが、地下式横穴墓と地下式横穴、堅坑と堅穴などはそれぞれ同じ形態の遺構について用いられている。
4. 6・7号地下式横穴墓出土人骨の計測・取り上げ及び5～7号地下式横穴墓出土人骨の形質人類学的調査については、長崎大学医学部解剖学第二教室に依頼し、本書「原村上地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨」の中に報告していただいた。
5. 出土遺物のうち5号地下式横穴墓出土の刀子、6号地下式横穴墓出土の刀子と貝輪については、本報告書刊行の時点で保存処理を終えている。7号地下式横穴墓出土の鉄器についても保存処理を行う予定である。なお、鉄器には奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの指導による合成樹脂を含浸させ、貝輪はバラロイドB-72の15%溶液に浸した。出土遺物はすべて高崎町教育委員会で保管する予定である。
6. 調査にあたって次の各氏に協力していただいた。記して謝意を表する。
上原勇生氏（土地所有者）、茂山宏美氏（当時、熊本大学学生）、竹元　守氏（高崎町耕地課）ほか耕地課職員、地元町民の方々
7. 本報告の編集は菅付が行った。

本文目次

I. はじめに	(著付)	13
(1) 調査の経緯と経過	13	
(2) 遺跡の立地	14	
II. 調査の結果	16	
(1) 5号地下式横穴墓	(著付)	16
1. 概要	16	
2. 遺構	16	
3. 遺物	19	
4. 小結	20	
(2) 6号地下式横穴墓	(著付)	22
1. 概要	22	
2. 遺構	22	
3. 遺物	25	
4. 小結	29	
(3) 7号地下式横穴	(面高)	32
1. 調査の方法と概要	32	
2. 遺構	37	
3. 遺物	37	
4. 小結	37	
III. おわりに	(面高)	39

挿図目次

第1図 原村上地下式横穴墓群位置図	15
第2図 原村上5号～7号地下式横穴墓遺構分布図	15
第3図 原村上5号地下式横穴墓遺構実測図	17～18
第4図 原村上5号地下式横穴墓堅坑横断面土層図	19
第5図 原村上5号地下式横穴墓出土遺物実測図	20
第6図 原村上6号地下式横穴墓遺構実測図	23～24
第7図 原村上6号地下式横穴墓堅坑縦断面土層図	25
第8図 原村上6号地下式横穴墓出土遺物実測図(1)	26

第9図	原村上6号地下式横穴墓出土遺物実測図(2)	27
第10図	原村上6号地下式横穴墓及び周辺出土遺物実測図	28
第11図	原村上7号地下式横穴土層図	33～34
第12図	原村上7号地下式横穴遺構及び土層実測図	35～36
第13図	原村上7号地下式横穴出土遺物実測図	37

表 目 次

表1	6号地下式横穴墓出土貝輪計測表	28
表2	貝輪を出土する地下式横穴墓一覧表	30

図 版 目 次

図版1	5号地下式横穴墓堅坑埋土半截状況、同堅坑及び羨門	41
図版2	5号地下式横穴墓羨道及び玄室、同人骨出土状況	42
図版3	5号地下式横穴墓人骨及び刀子出土状況、同出土遺物	43
図版4	6号地下式横穴墓堅坑検出状況、同堅坑閉塞石上部高杯出土状況	44
図版5	6号地下式横穴墓羨門閉塞状況、同閉塞状況（羨道側から）	45
図版6	6号地下式横穴墓人骨出土状況、同2号人骨貝輪装着状況	46
図版7	6号地下式横穴墓完掘状況（堅坑側から）、同出土貝輪	47
図版8	6号地下式横穴墓出土土師器・刀子、同周辺出土土師器	48
図版9	7号地下式横穴発見状況、同堅穴周辺土層	49
図版10	7号地下式横穴堅穴右土層、同堅穴周辺土層	50
図版11	7号地下式横穴堅穴上部土層、同玄室上部付近土層	51
図版12	7号地下式横穴堅穴・羨道、同閉塞状況	52
図版13	7号地下式横穴埋葬状況、同出土遺物	53

I. はじめに

(1) 調査の経緯と経過

高崎町原村地区では、これまでにも数多くの地下式横穴墓が陥没している。今回報告する3基の地下式横穴墓は、大字繩淮字原村上1702-1 において発見、調査されたものである。

横谷原村57-1号地下式横穴墓は、昭和57年8月10日、鶏舎新築の際の造成工事中に玄室が陥没、横谷原村61-1号地下式横穴墓は、昭和45年に行われた耕地の水田化事業の際に陥没を免れていたものが、昭和61年11月16日、鶏舎新築に伴う基礎床掘り中に玄室が陥没、原村上61-2号地下式横穴墓は、同年12月1日、その関連工事中に堅坑部を掘削し発見、陥没の危険性があるために調査したものである。

なお、昭和45年の水田化事業の際に発見された地下式横穴墓は、57-1号と61-1号との間にあって「地下式A号墳、地下式B号墳」として既に報告済みである。⁽¹⁾

さて、この原村地区ではこれら5基の地下式横穴墓のほかにこれまでに2基の地下式横穴墓が調査されている。そこで、昭和39年、石川恒太郎氏が調査された1基（5基確認した中の）を1号地下式横穴墓として通じて遺構番号を付けると、昭和45年に日高正晴氏が調査された地下式A号墳・B号墳はそれぞれ2・3号、昭和49年に岩永哲夫氏が調査されたものが4号、そして、今回の横谷原村57-1号地下式横穴墓は5号、同61-1号地下式横穴墓は6号、原村上61-2号地下式横穴墓は7号地下式横穴墓ということになる。また、当遺跡の正式な字名は原村上であるため、ここではこれまでの横谷あるいは横谷原村などの通称を改めて、原村上5・6・7号地下式横穴墓として報告したい。

調査期間および調査者は次のとおりである。

5号地下式横穴墓 昭和57年 8月12日～14日

宮崎県総合博物館

菅付和樹

6号地下式横穴墓 昭和61年 11月18日～20日

埋蔵文化財センター主事

面高哲郎

7号地下式横穴墓 昭和61年 12月9日～12日

宮崎県教育庁文化課

6・7号地下式横穴墓出土人骨

埋蔵文化財係主任主事

松下孝幸

長崎大学医学部解剖学第二教室 助教授

分部哲秋

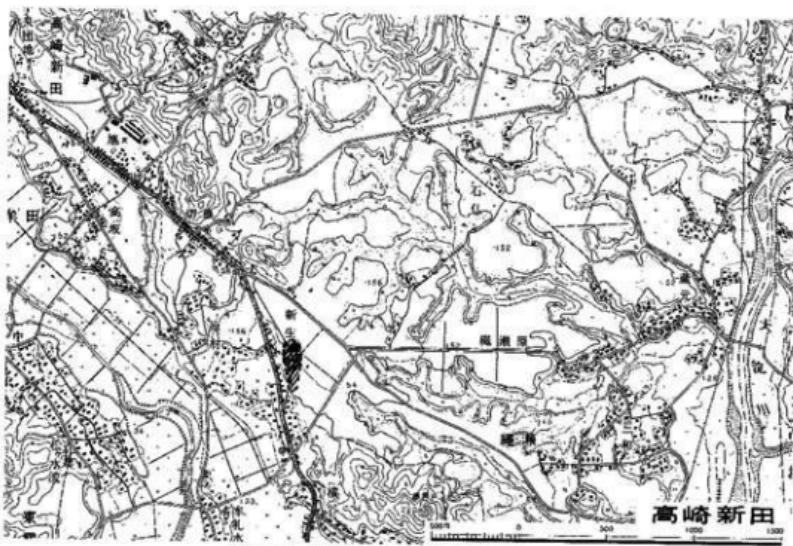
講 師

註 (1) 日高正晴「横谷原村地下式墳発掘調査(A・B号)」『宮崎県文化財調査報告書』第19集

- (2) 町社会教育課の黒木昭三氏によると、昭和46年11月、町建設業協会のプラント工場予定地で土取りのため破壊発見された地下式横穴墓が1基あるという。このときは、県教育委員会の調査が行われなかっただめ、町の方で人骨を取りあげたといわれる。人骨は頭骨のみ1体分で、その他遺物等は確認できなかったようである。これを含めると3基になるが、正式に発掘調査報告がなされていないため今回は削除する。人骨編においては、便宜上、46-1号地下式横穴墓出土人骨として報告されている。地下式横穴墓発見の経緯など詳細は町史に掲載される予定である。
- (3) 石川恒太郎「北諸県郡高崎町横谷の地下式古墳」『宮崎県の考古学』吉川弘文館 1968年
石川恒太郎「高崎町横谷の地下式古墳」「増補 地下式古墳の研究」佛ぎょうせい 1979年
- (4) 「地下式横穴墓から見た古墳時代」(宮崎考古学会・鹿児島県考古学会合同学会資料 1986年)において既に通し番号に置き換えられている。
- (5) 岩永哲夫「高崎町原村上地下式横穴調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第18集 宮崎県教育委員会 1976年
- (6) (1)、(4)の文献では横谷原村地下式墳、横谷原村地下式横穴墓、(3)の後者の文献では横谷地下式古墳として報告されている。なお、(5)の文献では字名のとおり原村上地下式横穴として報告されているが、黒木氏によると地番が違っているそうである。

(2) 遺跡の立地（第1図）

高崎町は宮崎県の南部、都城盆地の北の出口に位置している。県内最大の河川大淀川は都城盆地を北流し、ここでその支流高崎川と合流している。その北西岸台地の南西端近くに当遺跡は立地する。このあたりは、標高150m前後の開拓されたシラス台地が広がっており、地下式横穴墓と高塚古墳とが共存して見られる地帯である。当遺跡においても東西方向に各1基、既に滅失した古墳の存在が伝えられており、現在でも今回調査した地下式横穴墓の北東方向に円墳が1基見られる。内部主体は不明である。また、当遺跡の北東、塚原の台地では前方後円墳1基を含む古墳群と地下式横穴墓との共存が知られている。



第1図 原村上地下式横穴墓群位置図



第2図 原村上 5号～7号地下式横穴墓遺構分布図

II. 調査の結果

(1) 5号地下式横穴墓

1. 概要

当地はもともと傾斜した畠地であったが、昭和45年に水田化された際、土地が削平され低くなっていた。そのため、既設鶏舎と新築鶏舎との高さを合わせるために土砂を搬入していたところ、突然玄室天井部が陥没し発見された。現地は、玄室中央部が約50cm×30cmほどの梢円形に開口、調査は危険防止のためこの開口部を安定した状態まで広げた後、玄室崩土の除去を行った。また、それと並行して竪坑部方向を確認し、その平面プランの検出も行った。玄室崩土下からは押し潰れた人骨と鉄器が出土し、竪坑埋土下からは土器片が出土した。閉塞石は見られなかった。

遺跡の基本的な層序は、表土、黒色シルト質土層、ボラ混黒色シルト質土層（漸移層）、黄褐色石層（御池ボラ）の順に観察された。このボラ層の厚さは130cm以上あると思われるが不明であり、その下層についても確認していない。

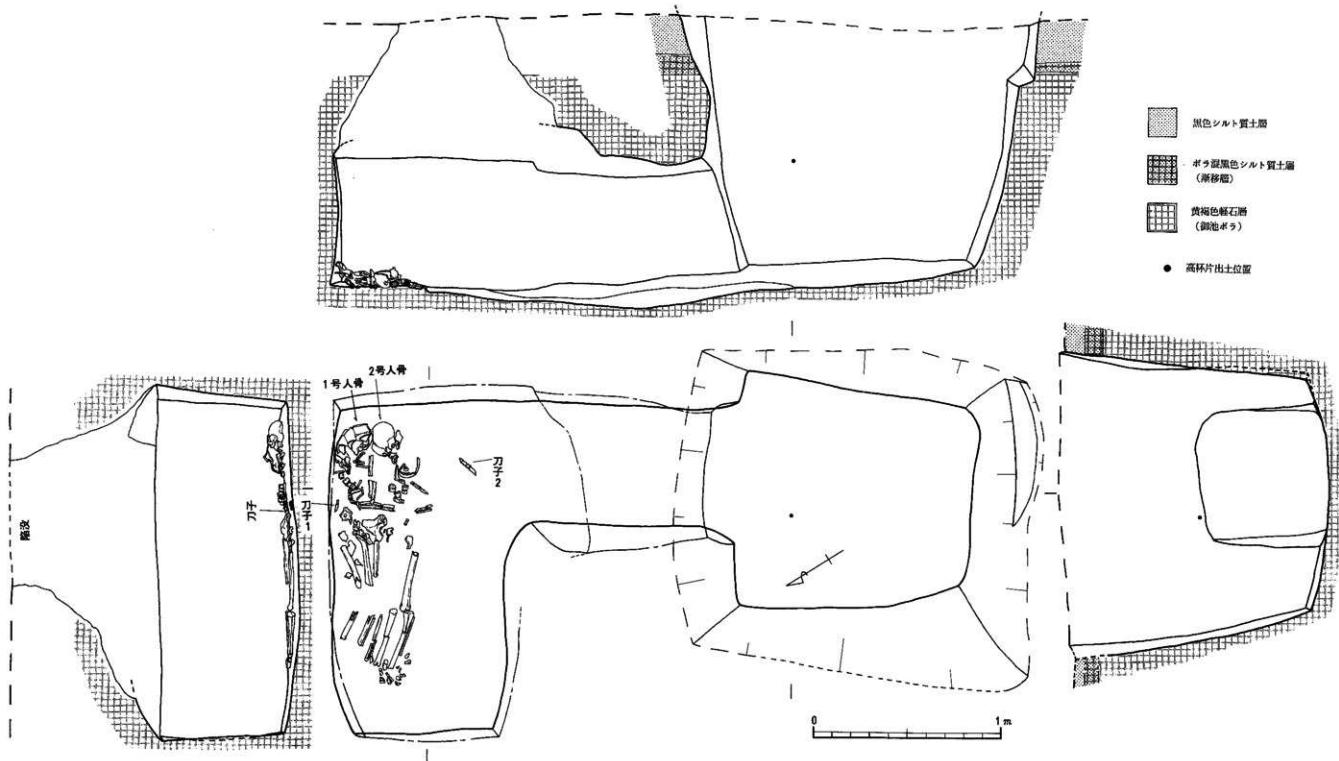
2. 遺構（第3図）

遺構は竪坑、羨道、玄室からなる。

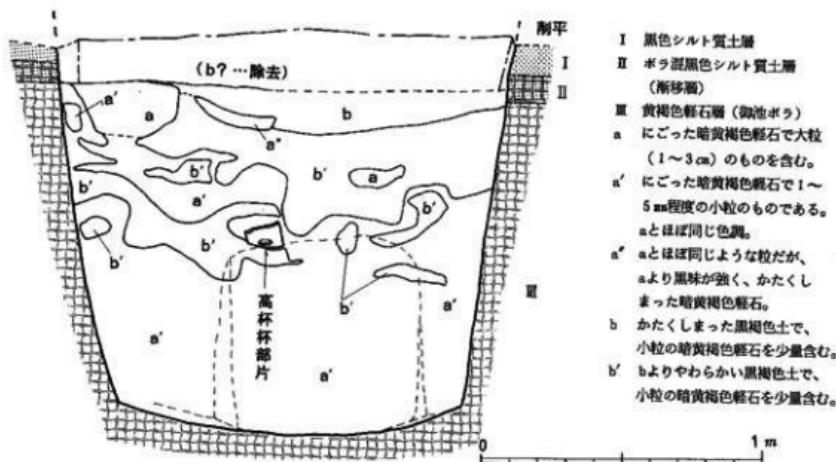
竪坑は黒色シルト質土層から掘り込まれ、黄褐色軽石層に床面および羨道、玄室が掘り込んである。竪坑の埋土の状態は上部が主に黒色シルト質土を埋め戻したもので、中位以下は主に黄褐色軽石（御池ボラ）を埋め戻したものである。また、竪坑縦断面の観察では羨門に近いほうに黒色シルト質土を多く含む埋土がみられた。この埋土除去作業中、羨門中央より左へ約25cm、床面約70cm、羨門上部外壁面から竪坑中心部方向へ約50cmの位置で土師器高杯片が出土した（第4図）。

竪坑の規模は、上部確認面で約190cm×170cm、床面で約125cm×115cm、中央部での深さ約140cmを測る。やや南北方向に長めの長方形プランである。竪坑～羨道の主軸は磁北から東へ約35°。羨道は幅約65cm、高さ約70cm、長さ約1m前後と長い。玄室の主軸は羨道の主軸より北へ約95°に折れ、磁北から西へ約60°である。平面プランは逆P字形といわれる片袖長方形を呈するもので、長軸約175cm、短軸約90cmを測る。天井部は陥没の際に円錐台形状に土砂が剥落しており形態は不明である。わずかに残っている天井部には寄棟等をあらわす稜線は見られない。軒先線までの高さは約70cmを測る。

羨道、玄室の掘り込まれた黄褐色軽石層はその性質上触れると脆く剥落するが、掘り込んだ当時の壁面は割合良好な状態で残っている。ところが、羨道から玄室に至る左袖の角の部分は、羨門下部の壁面の角と比べても剥落が著しく当時の状態は不明である。天井部崩壊に伴う剥落である可能性は崩土の状況をみると限り少ない。人骨の出土状況との関連から遺体搬入時に触れて角が剥落した可能性も考えられよう。



第3図 原村上5号地下式横穴墓遺構実測図



第4図 原村上5号地下式横穴墓竪坑横断面土層図

羨門部には閉塞石その他の閉塞の痕跡は見られなかったが、竪坑が完全に埋め戻されているにもかかわらず羨道内に土砂の流入はわずかしかなかった。腐朽しやすい板などによる閉塞も考えられる。

3. 遺物（第5図）

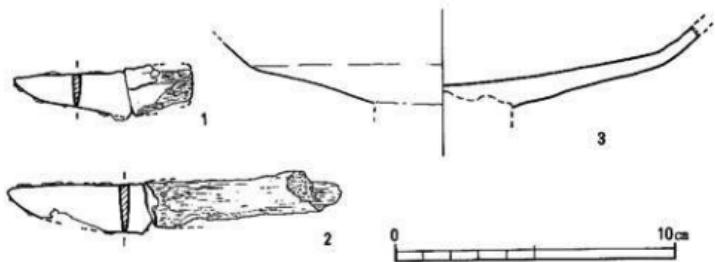
人骨

玄室奥壁寄りに2体出土した。脚部を左袖に頭部を東側にした伸展葬である。奥壁側から1号・2号として取り上げた。取り上げに際して形質人類学の専門家に依頼する時間的余裕がなかったため、崩壊した土砂による人骨の移動（飛散）や追葬による人骨の乱れなど個々の人骨の識別によってわかる微妙な相異に関しては確認できなかった。人骨は崩土の土圧によって1号の頭骨が潰れていたのをはじめ、全体にかなり傷んでいる。

1号人骨の顔面には全面赤色顔料が付着し鮮やかな朱色を呈していた。しかし、ほかの部位には赤色顔料は見られず、壁面などにも顔料やいわゆる朱玉は観察されなかった。また、2号人骨も顔面に赤色顔料がみられるものの、こちらはごく微量である。この赤色顔料の成分分析は行っていない。これら2体ともに壮年女性人骨であるとの観察所見を得ている。

刀子

1は1号人骨の右腹部と思われる奥壁際で出土している。全長6.3cm、身長3.9cm、背幅約0.2cmで角背平造り、両闘と思われる。莖部は樹皮で巻かれた後、鹿角装具に挿入されている。



第5図 原村上5号地下式横穴墓出土遺物実測図

銹化著しい。

2は2号人骨の左肩から約20cm羨道寄りのところに出土している。現存長11.8cmで鹿角装の柄尻は整形面が見られず、折損しているものと考えられる。身長4.7cm、背幅0.3cmで角背平造り、両闘と思われる。背側から見ると身部はやや右に湾曲している。基部は不明。銹化著しい。

土師器

3は高杯杯部片である。脚部と口縁部は欠失している。杯部下位にはあまい稜線が見られる。径での推定径は約14.7cmである。内面は非常に滑らかでミガキ、一部にナデ痕も見られる。外面は脚痕部を中心に回転ナデが見られる。脚痕部推定径約4.9cm。器厚は薄く、焼成も良好で堅い。淡い黄褐色を呈する。

4. 小結

原村上5号地下式横穴墓は、当初横谷原村57—1号地下式横穴墓として調査したものである。この「地下式横穴墓」の名称に関しては、地下式土壙、地下式古墳、地下式墳、地下式横穴など報告者によって様々に使われている。⁽¹⁾ここでは、「地下式」という漢字の意味を「ある規格性をもって地面の下に存在する（構築されている）」という意味あいに解釈し、土を盛り上げた塚（墓）を意味すると考えられる「古墳」や「墳」の名称をこの「地下式」のあとに続けるのは避けた。また、一部には鹿児島県姶良郡栗野町の北方真中馬場1号地下式横穴のように「土壙」と呼んだ方がふさわしい形態のものもあるけれど、この種の殆どの遺構に共通の形態および墓としての機能を表現するには、その起源等様々な課題も解決されていない現時点では、構造上最も良く似た遺構の名称を借りて地下式「横穴墓」と表現する方が良いと考えこの名称を用いる。この場合も、堅坑部をどのように解釈するか、あるいは両者の玄室にあらわれる手抜きの度合いが著しく異なるにもかかわらず最も類似しているといえるのかなどの問題は依然残される。

5号地下式横穴墓は比較的脆い黄褐色輕石層（ボラ土）に振り込まれていた。この原村地区では過去4例の発掘調査が行われているが、これらの地下式横穴墓はいずれも同層に振り込まれて

いる。豎坑埋土埋め戻しの状況としては、豎坑を掘りあげた土を逆の順に埋め戻した状況が観察できた。しかし、豎坑の埋め戻しに用いたボラ土の量は掘りあげた際の量より少なくてすむと考えられるし、また、羨道および玄室を掘りぬいた際のボラ土約2m³はどこへ処理されたのか、豎坑が黒色の土層から掘り込んであるだけに黄色い大量のボラ土の行方は今後の問題としてあげられる。

今回の5号地下式横穴墓は過去の4例同様、玄室長辺側端部に羨道を取り付けるいわゆる平入り片袖タイプのものである。これらのうち3基は、他地域の同タイプの造構に比べて造構規模の割に羨道が長いという特徴を持つ。このような構造はこの綱瀬地区や周辺の都城市菫子野地区などにまま見られるものである。しかし、綱瀬地区では羨道の短いタイプの地下式横穴墓も検出されており、これが地域的な特徴なのか時期差をあらわしているのか問題である。ただ、いずれもが黄褐色軽石層に掘り込まれているなかで、昭和43年、石川恒太郎氏が調査した塚原地下式第1号墳⁽³⁾は、黄褐色軽石層の下のより安定していると考えられる褐色粘質土層に羨道および玄室が掘り込まれていた。そしてこれは寄棟の天井部と棚状施設を持つ構造的には省力化の見られない地下式横穴墓で、これもまた羨道部は比較的長い。このような地下式横穴墓をより古いタイプのものと考えれば、同じボラ層に掘り込まれたものなかで羨道の長短が時期差を表している可能性も考えられる。

人骨の埋葬状況は、周辺地域（同町綱瀬、仮屋尾、高原町日守、旭台、野尻町大荻、都城市菫子野など）の平入り片袖タイプのものと同様、遺体を脚部から玄室へ入れ、頭部を羨道の延長線上に置くという状況が観察できる。また、追葬については、人骨の移動や乱れによる確認が出来なかったうえに、豎坑埋土にも顕著な乱れは認められず、羨道部床面の状況や羨道部への土砂の流入状況にも追葬を実証するような痕跡を確認することはできなかった。

5号地下式横穴墓では、玄室内で2体の壮年女性人骨にそれぞれ1振りの刀子が副葬され、豎坑埋土からは高杯片が1点出土している。5号地下式横穴墓の築造使用年代について遺物のうえで時期を推定する場合にこの高杯片は有力な手掛かりになるが、玄室の掘り込まれた層位や構造などをも考え合わせると、5世紀後葉～6世紀前葉の幅におさまるのではないかと考えられる。

註 (1) 『地下式横穴墓から見た古墳時代』（前掲）はこれまでに調査された地下式横穴墓の集大成資料集であるが、これには「地下式横穴墓」または「地下式横穴」の名称が用いられている。もちろん、これに批判的な意見もある。

(2) (1)の文献の55ページ参照。なお、以下地下式横穴墓の構造に関してはこの文献を参照されたい。

(3) 石川恒太郎「高崎町塚原地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第14集

宮崎県教育委員会 1969年

石川恒太郎「高崎町塚原の地下式古墳」『増補 地下式古墳の研究』（前掲）

(2) 6号地下式横穴墓

1. 概要

当地下式横穴墓は、昭和57年調査の5号地下式横穴墓の南西20数mに位置する。両者の間にあって、昭和45年、水田化の際陥没して調査されたのが2・3号地下式横穴墓（地下式A・B号墳）であり、5号地下式横穴墓および当地下式横穴墓は当時陥没を免れていたものである。

遺構は、水田として利用されていた当地に大型鶴舎を新築することになり、その基礎床掘り中に玄室および羨道の天井部がほぼ完全に陥没して発見された。発見当初、業者によって玄室は埋め戻され、土砂がかなり溜まっていた。玄室崩土下からは押し潰れた人骨と鉄器、腕に装着された貝輪が出土した。また、羨道には崩土の堆積が少なく、羨門部は軽石で閉塞されていた。堅坑埋土を除去する際に、閉塞石の直上と真下で土器片が出土し、周辺でも土器片が採集された。

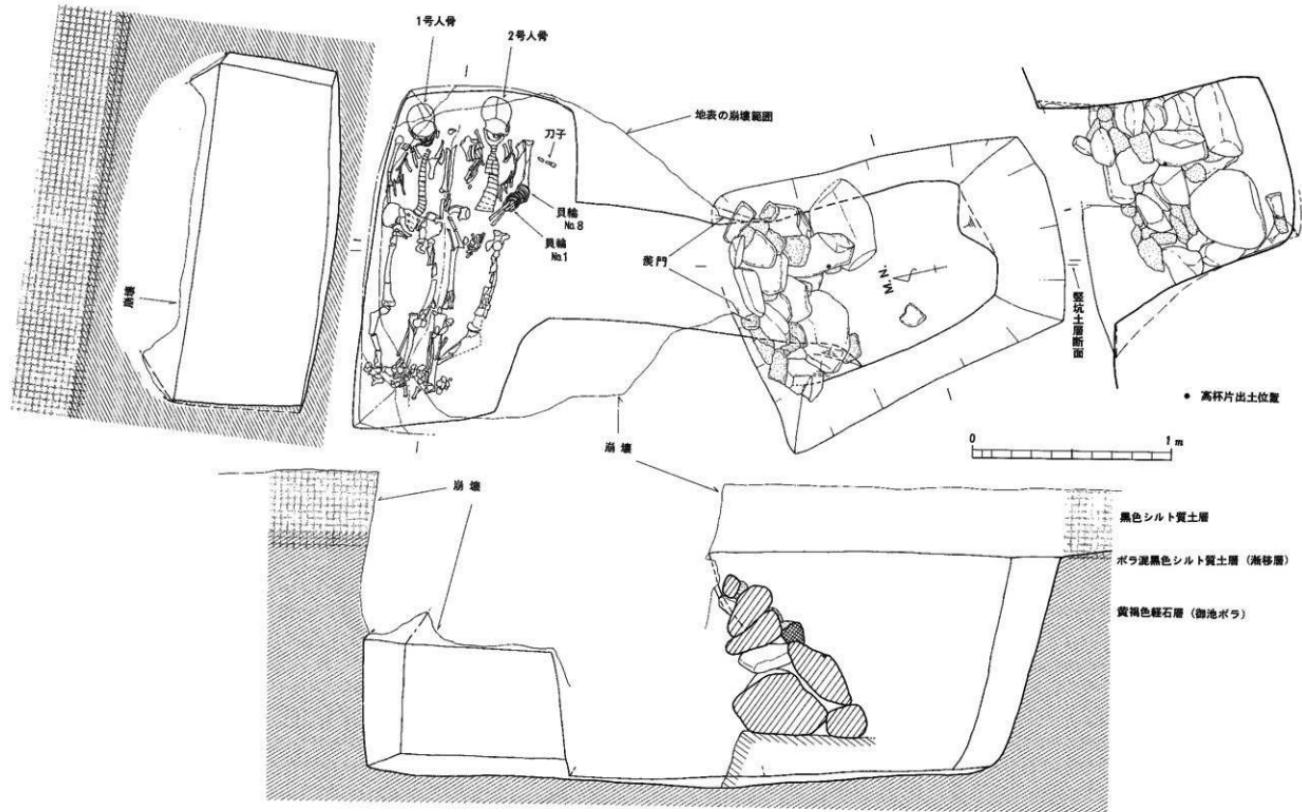
遺跡の基本的な層序は、水田化されていたにもかかわらず表土と黒色シルト質土とが区別出来ず、黒色シルト質土層、ボラ混黒色シルト質土層（漸移層）、黄褐色軽石層（御池ボラ）の順である。その下層については確認していない。

2. 遺構（第6図）

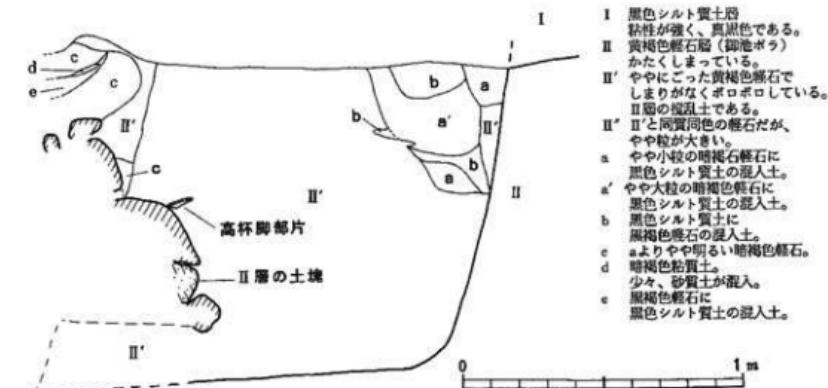
堅坑は床掘りによる破壊をかうじて免れていた。時間の関係上、いっきに漸移層まで掘り下げてプランを確認した。御池ボラの堆積年代からすると、堅坑は黒色シルト質土層から掘り込まれたと考えられる。しかし、埋土は羨門側閉塞石上部とその対面の壁際上部を除いて殆どやや濁った黄褐色軽石で埋め戻されており、黒色シルト質土の混入は後世の攪乱の可能性が考えられるほどわずかである。この埋土除去作業中に、堅坑中央よりやや右よりの羨門正面の閉塞石に接するよう土師器高杯片が出土している（第7図）。また、閉塞石の下に埋め戻されていた黄褐色軽石の中からはやはり羨門正面にあたる位置で土師器壺片が出土している。

堅坑の規模は、上部検出面で約170cm×115cm、床面で約95cm×80cm、中央部での深さ約115cmを測り、南北方向に長い台形ぎみの長方形プランである。羨道は堅坑の北壁右側に掘り込まれ、その主軸は堅坑主軸から東へ約24°（磁北から東へ約17°）とかなり曲がっている。羨道、玄室共に黄褐色軽石層に掘り込まれている。羨道の幅約55~60cm、長さは左右で異なるが約110cm前後と長い。天井部が崩壊しているため、高さは不明である。玄室の主軸は羨道の主軸に約90°で交差し、磁北から西へ約80°である。平面プランは、人骨頭部側の奥行きが広いや平行四辺形ぎみの両袖長方形を呈する。長軸約170cm、短軸90cm前後を測る。羨道から玄室に至る左袖の角の部分は、5号地下式横穴墓同様に剥落が著しいが、床面での壁の作り出しは右袖が直角に近いのに対し左袖は最初からなだらかである。天井部は奥壁ぎわの一部が残っており、あまい稜線（棟線）が見られる。寄棟であった可能性がある。軒先線までの高さは奥壁で約65cmを測る。

羨門部は、堅坑床面から20数cmを黄褐色軽石で埋め戻した後、大小18個の軽石を大きいものから順に積み上げて、さらに隙間をボラ塊でふさいでいる。この埋土の黄褐色軽石はわずかに黒味



第6図 原村上6号地下式横穴墓遺構実測図



第7図 原村上6号地下式横穴墓竪坑縦断面土層図

がかって汚れているが、自然層の黄褐色軽石（御池ボラ）層のものとさほど違わない。ただ、自然層のものと同じく隙間をふさいだガラ塊は堅く締まったものである。なお、羨門は一部を残して崩壊している。

3. 遺物

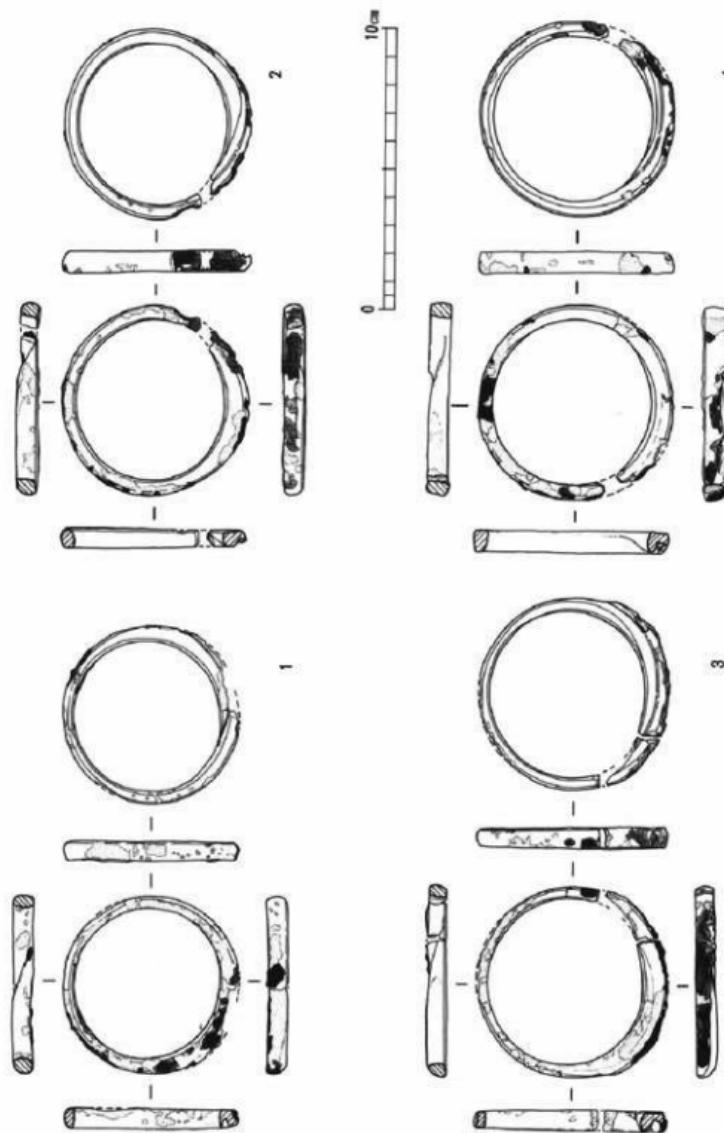
人骨

玄室はほぼいっぱいに2体出土した。脚部を左袖に頭部を右袖側に埋葬してある。奥壁側から1号・2号として取り上げた。人骨は、天井部の崩土や埋め戻された土などの土圧で、頭骨やその他一部を除いて殆ど潰れていたが、飛散したような状況は見られなかった。2体とも乱れは少なく、竪坑の埋土や閉塞の状況でも明確な追葬は確認できなかった。ただ、検出当時、1号の左上腕骨と2号の右上腕骨が接しすぎていることに疑問を感じていたところ、取り上げの指導をしていただいた長崎大学の松下助教授から、1号人骨の左上腕骨は右に比べて体の中心との間隔が不自然であり、やや押されているようである。また、2号人骨の右上腕骨は左に比べて体の中心との間隔がわずかに広いとの観察所見を得た。2号人骨は追葬である可能性が考えられる。1号人骨は壮年女性、2号人骨は熟年男性で、ともに頭骨は赤色顔料が付着しており、額から顔面が特に赤い。赤色顔料は2号人骨左腕の貝輪の一部にも微量付着していたが、壁面その他には見られなかった。

貝輪（第8図～第9図）

2号人骨左腕に8個装着されていた。イモガイ製模型貝輪である。手首側から肘に向かって図1～8の順にすべて溝のない方を正面に、溝のある方を裏側にして装着されている。また、溝の

第8图 原村上6号地下式罐穴墓出土遗物实测图(1)



第9圖 原村上6号地下式横穴墓出土遺物測量圖(2)

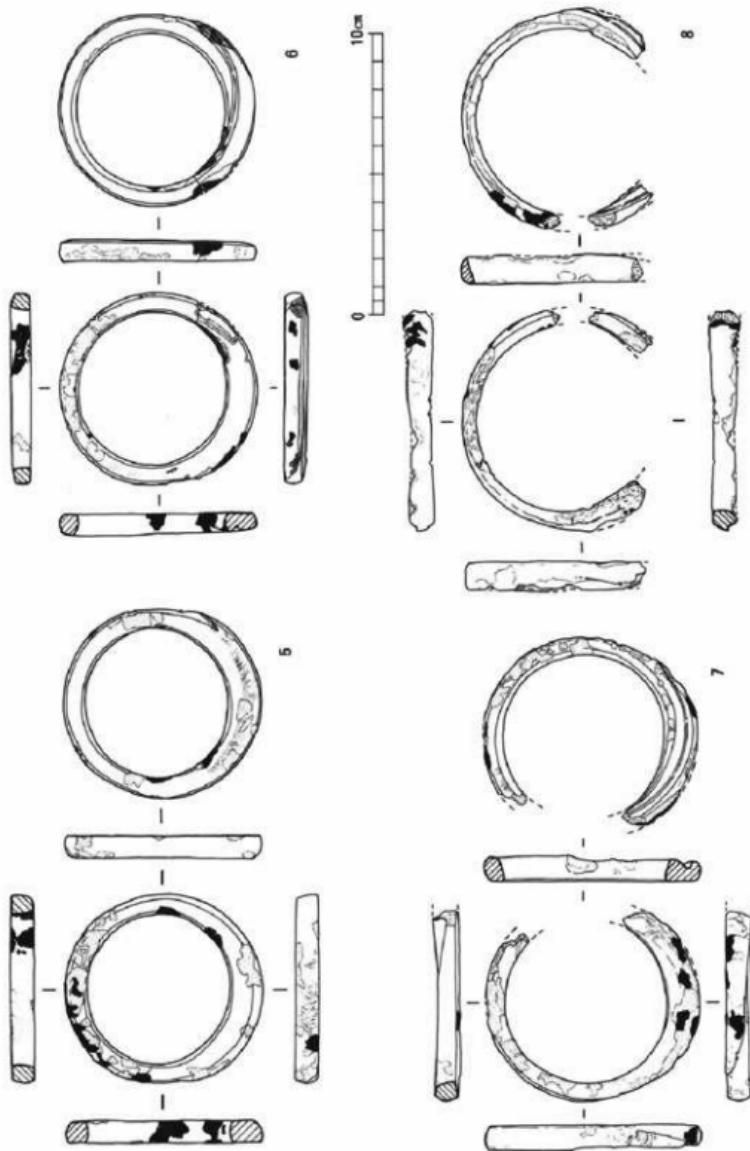


表1 6号地下式横穴墓出土貝輪計測表

単位: cm

番号	外 径	内 径	側面 幅	番号	外 径	内 径	側面 幅
1	6.3~6.4	5.2~5.4	約0.7	5	6.7~7.1	5.1~5.4	約0.8
2	6.5~6.8	5.4~5.7	0.7~0.8	6	6.8~7.0	5.3~5.5	0.7~0.8
3	6.8~7.0	5.6~5.9	0.6~0.7	7	7.4~7.6	5.7~5.9	0.7~0.9
4	6.9~7.0	5.6~5.9	約0.8	8	約7.9	6.4~6.6	0.9~1.0

ある幅の広い方は下側にしてあった。殆どの貝輪は表面の傷みが著しく、茶褐色の付着物も見られる。このうち、1の内側と裏側の一部、2の内側および4の裏側の一部にはごく微量の赤色顔料が付着している。計測値は表1のとおりである。

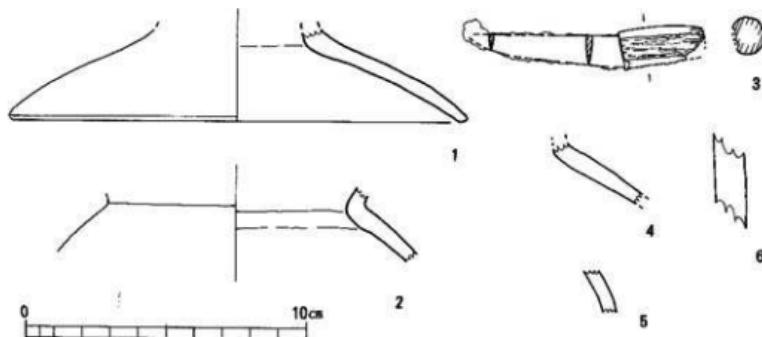
刀子（第10図3）

2号人骨の左上腕骨の南側約4cmの位置に切先を肩の方へ向けて出土している。全長8.6cm、柄長3.0cm、背幅約0.2cmで角背平造りである。茎部は鹿角装具に挿入されており、断面の形状および関節は不明。身部はわずかに湾曲する。切先は特に銹化著しい。

土師器（第10図）

1は堅坑閉塞石に接して埋土中から出土した高杯脚部片である。推定脚部径約16.1cm。脚上部との境に段を有する。内面は上部が丁寧なナデ、下部がナデ痕の明瞭な回転あるいは斜め方向のナデ、外面は非常に丁寧なよこナデと思われる。器厚は薄く、焼成も良好で堅い。淡い黄褐色を呈する。

2は堅坑閉塞石下の埋め土の中から出土している壺頸部片である。頸部推定径約9.1cm。内面口縁部側は丁寧なよこナデ、頸部よこナデ、胴部はよこ方向のケズリと思われる。外面はよこナ



第10図 原村上6号地下式横穴墓及び周辺出土遺物実測図

である。器厚は薄手で焼成も良く堅い。黄褐色を呈する。

4～6は竪坑を検出する際に掘り広げた黒色シルト質土の中から出土した土師器片である。

4は高杯脚部片と思われるが、ややいびつな曲面を有する。内面は擦痕の明瞭な回転方向のナデ、外面は1同様光沢がなく滑らかで、割合丁寧なナデと思われる。器厚は薄手、焼成も良く堅い。

1とは器厚、調整などがわずかに異なり別個体と思われる。外面はやや黒ずんだ淡い黄褐色、内面は淡い黒褐色を呈する。

5は壺胴部片である。内面はよこ方向のケズリ、外面は非常に滑らかでよこミガキと思われる。器厚は薄く、焼成良好で堅い。色調は風化しているせいかも明るく淡い黄褐色を呈している。器厚、焼成、内面の調整など2と良く似ているが、外面の調整が異なっており別個体と思われる。

6は壺胴部片と思われる。1～2、4～5の胎土には粒の大きな砂粒は見られないに対し、6には1ミリ前後の黒色や茶褐色の砂粒や雲母片が見られる。外面はよこナデ、内面もよこナデと思われる。焼成は良好で堅い。外面淡黄褐色、内面淡褐色を呈する。

4. 小結

原村上6号地下式横穴墓は、当初横谷原村61—1号地下式横穴墓として調査したものである。原村地区ではこれまでに過去5回の調査で6基の地下式横穴墓を発掘している。このうち、両袖を有するのは当地下式横穴墓だけである。当地下式横穴墓のアンバランスとも思える羨道の左右の長さ、玄室の左右の奥行き、さらに当初からまるく掘られた左袖角と直角に掘られた右袖角の違いなどは、それなりに硬直した遺体を運び入れる時には合理的な形態なのかもしれない。しかし、構造上は片袖で脚部から遺体を運び入れる方がより合理的であるし、現にそのような構造の地下式横穴墓の方がここでは一般的である。

また、当地区では1号と6号地下式横穴墓が輕石、2号地下式横穴墓が多数の輕石と3個の河原石で閉塞されていたほかは閉塞石がないか不明である。今回の6号地下式横穴墓に用いられた輕石のうち数個は、明らかに人為的な切断面を有していた。これら多数の輕石をどこから運んできたのか疑問が残る。

当地下式横穴墓出土の貝輪は宮崎県内で21例目、鹿児島県の3例を合わせると地下式横穴墓出土の貝輪としては24例目である。この原村地区では昭和45年に2号地下式横穴墓で中央人骨の両腕に合わせて約12個、昭和49年に4号地下式横穴墓で1個の貝輪が出土している。いずれもイモガイ製横型貝輪である。貝輪の出土例は表2のとおり都城盆地の北部、西・北諸県地区に多く見られる。このように古墳時代後半になんでも依然として南海産の貝製品が数多く流入し装着されるのは何故か、また、その出土例の過半数がこの地域にあるのは何故かなどまだ未解決の問題である。

貝輪の装着状況については先に述べたが、人骨の形質人類学的特徴から松下氏によって興味深い報告がなされている。後掲の『原村上地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨』の『6号墳』の項

表2 貝輪を出土する地下式横穴墓一覧表

1987年12月現在

番号	地下式横穴墓名	所 在 地	構 益	閉 来	被葬者数	貝 輪			備 考	文献	
						月	年	個 数			
1	鹿訪	宮崎県 西都市三宅、國分	平入り 方 形	港	不明	不明	6	不明	未報告	1	
2	大坪1号	東京都国宝町 大字八代南保字大坪	垂入り 四袖 長方形 切妻	表道、石	2	ゴホウラ	1	不明	木製漆器	4	
3	市の瀬1号	大字医年字市の瀬	平入り 両袖 長方形	不明	1	イモガイ	2個	不明	櫛	14	
4	〃 5号	〃	垂入り 両袖 長方形 切妻	表門、河原石	2	イモガイ	3	女、右手	河原石製漆器式石棺 櫛	13	
5	大森34-1号	西諸島郡野尻町 大字三ヶ野山。大森	平入り 両袖 台 形 寄棟	表門、河原石	2	イモガイ	2	左手	櫛	2	
6	〃 B-13号	〃	平入り 両袖 台 形	表道、河原石	1	イモガイ	10~12	両手	櫛	10	
7	〃 C-8号	〃	平入り 両袖 長方形 寄棟	不明	1	不明	2	左手	櫛	10	
8	〃 F-3号	〃	平入り 格円形	表門、河原石	2	イモガイ	1	女、左手		11	
9	〃 F-10号	〃	平入り 両袖 台 形 寄棟	表道、河原石	1	イモガイ	1	男、左手	櫛	11	
10	危合 9号	西諸島郡高原町 大字広原、組合	平入り 片袖 台 形 切妻	表門、河原石	3	オオツタ ノハ?	8	不明	櫛、東柱造出し	7	
11	日守 2号	大字後川内、日守	片袖	表門、自然石	3	オオツタ ノハ?	1	不明	櫛、日守 54-2号	8	
12	〃 5号	〃	平入り 片袖 方 形 寄棟	表門か、自然石	3	二枚 目	4	男、左手	櫛、55-1号	9	
13	〃 6号	〃	平入り 片袖 台 形 寄棟	表門、板石	2	二枚 目	16	女、右手	彩色繪文 櫛、55-2号	9	
14	仮屋尾1号	北諸島郡高崎町 大字前田字仮屋尾	平入り 片袖 長方形 寄棟	表門、河原石	不明	不明	2片	不明	櫛、日守と同群	4	
15	原村上2号	大字雄細字原村上	平入り 片袖 長方形	表門、板 石 河原石	4	イモガイ	約12	両手	横谷原村 地下式A号墳	7	
16	〃 4号	〃	平入り 横四形	片袖	不明	2	イモガイ	1	不明	原村上 地下式横穴	6
17	〃 6号	〃	平入り 両袖 長方形 寄棟か	表門、板 石	2	イモガイ	8	男、左手	横谷原村 61-1号	本報 吉著	
18	栗子野57-5号	都城市栗子野町	平入り 両袖 長方形	表門、板 石	3	イモガイ ゴホウラ	8 1	男、左手 男、右手		12	
19	小木原101号	えびの市上江字小木原	平入り 両袖 長方形	表門、板 石	3	イモガイ	6	不明		4	
20	島内 5号	〃 島内宇平松	平入り 両袖 格円形	壁坑、板 石	1	イモガイ	3	不明	平松 43-2号	3	
21	島内 7号	〃	平入り 両袖 長方形 切妻	壁坑、板 石	3~4	イモガイ	4個	櫛 2本分	平松 46-2号	5	
22	巣ノ上9号	鹿児島県 大口市下青木字巣ノ上	平入り 両袖 半円形	壁坑、板 石	不明	不明	1(分)	不明		16	
23	上ノ原9号	肝付郡高山西町 大字前山字上ノ原	垂入り 長方形 切妻	不明	不明	イモガイ	2	不明	輕石製漆器式石棺	15	
24	横 間9号	大字新富字横間	格円形	不明	不明	不明	1	不明		15	

注 文献1の「地下式横穴墓一覧表」および文献12の「貝輪を出土する地下式横穴」の表を参考に作成した。この中で、寄棟・切妻の区別がはっきりしているもの以外は、便宜上、表道が玄室基底部にあるものを平入り、壁設面にあるものを垂入りとしている。また、イモガイ製貝輪は丸と楕円のものである。

の「貝輪着装について」を参照されたい。また、6号地下式横穴墓出土人骨の際立った特異性については、その「要約」の項に述べてある。即ち、被葬者は高顎傾向、玄室構造は両袖タイプという原村上地区の他の地下式横穴墓とは明らかに異なる特徴が指摘されうる。

これまでに原村上地下式横穴墓群では1号・5号・6号の3基の地下式横穴墓から土師器高杯片の出土をみている。当地の地下式横穴墓の築造時期を推定する場合、決め手となる遺物があまりない中で、6号地下式横穴墓出土の高杯片は5号地下式横穴墓出土のそれ同様に時期比定の手掛かりになると思われる。また、5号と6号では片袖と両袖、天井の棟線の有無など構造上の違いは見られるものの全体の形態や掘り込まれた層位などを見ると先後関係は決めがたく、6号地下式横穴墓もやはり5世紀後葉～6世紀前葉の幅におさまるのではないかと考えられる。

註 (1) 昭和62年12月末、西諸県郡高原町で立切地下式横穴墓群が調査された。調査者の面高哲郎氏によると、35号地下式横穴墓の女性人骨左手に貝輪が着装されていたという。その後、昭和63年4月の第2次調査で、60号・64号の2例、計3体の人骨に貝輪の着装が確認されている(長津宗重氏による)。

表2 参考文献

1. 「地下式横穴墓から見た古墳時代」資料 宮崎考古学会・鹿児島県考古学会 1986年
2. 宮崎県文化財調査報告書 第5輯 宮崎県教育委員会 1960年
3. " 第14集 " 1969年
4. " 第15集 " 1970年
5. " 第16集 " 1972年
6. " 第18集 " 1976年
7. " 第19集 " 1977年
8. " 第22集 " 1980年
9. " 第23集 " 1981年
10. " 第27集 " 1983年
11. 「大荻遺跡(1)」 宮崎県教育委員会 1974年
12. 都城市文化財調査報告書 第3集 都城市教育委員会 1983年
13. 国富町文化財調査資料 第4集 国富町教育委員会 1986年
14. 石川恒太郎『増補 地下式古墳の研究』 慶賀ようせい 1979年
15. 『高山町郷土誌』 高山町 1966年
16. 大口市埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 大口市教育委員会 1986年

(3) 7号地下式横穴

1. 調査の方法と概要

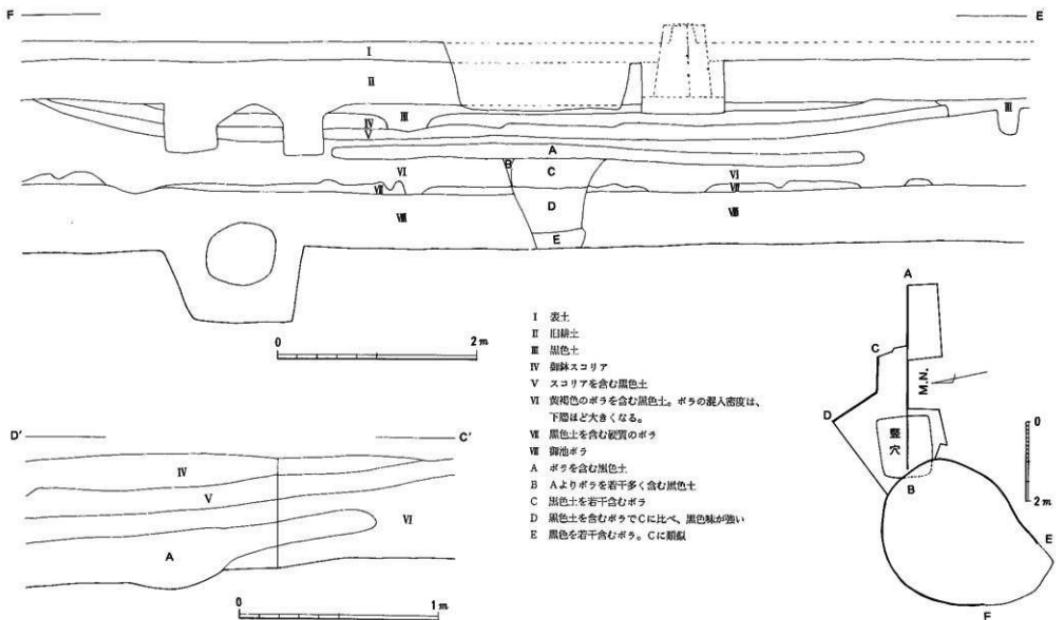
7号地下式横穴は、昭和61年12月1日、貯水槽の基礎を築くため、4.3m×3.3mの略椭円形に深さ2m掘られた堅穴の法面において、御池ボラ層中に逆台形状の擾乱部分が上原勇氏により確認された。上原氏よりその旨町教育委員会へ連絡がなされ、これが地下式横穴の堅穴であることが確認された。

当地の基本層序は、第I層表土、第II層旧耕土、第III層黒色土、第IV層御鉢スコリア、(788年?)、第V層スコリアを含む黒色土、第VI層黄褐色のボラの混入密度が下層ほど大きくなる黒色土、第VII層黒色土を含む硬質のボラ、第VIII層御池ボラ(縄文中期?)となっている。今回発見された地下式横穴の堅穴は、第VI層の中層から第VII層に掘られ、堅穴の上部からその両側にボラを多く含む黒色土の層(A層)が厚さ10cmで延びていた(第11図)。このボラを多く含む層は、地下式横穴が御池ボラ層に掘られていることから地下式横穴構築の際の排土であると判断された。今回の調査地は、奈良時代の火山灰と言われる御鉢スコリアも残存していたことから、現在、県内の研究者間で地下式横穴の墳丘の有無が問題となっていることより、可能な限り地下式横穴上部の土層の把握に努めることにした。そのため、まず、堅穴の範囲と推定される部分上の旧耕土までを除去し、その後堅穴の北半分を掘り下げた。堅穴を確認後、主軸線と推定される方向に幅50cm程のトレンチを設定し、土層の確認を行った。その土層は第12図のとおりである。地下式横穴構築時の排土の一部であるボラを多く含む黒色土(A層)は、玄室方向に盛り上がり途中で切れる。また、土層C-DについてもA層が同様に盛り上がっている。その上のスコリアを含む第IV層・第V層は、A層と同傾斜で盛り上がり、旧耕作により削平されている。また、玄室の真上よりその東においては、第VII層中にボラを若干多く含む部分がブロック状(第A'層)に見られた。この第A'層も、地下式横穴構築時のものと考えられる。その周囲のボラを含む黒色土の一部(下層)は2次堆積と考えられるが、自然層である第VI層は分離しなかった。なお、基礎用堅穴の南東側つまり7号堅穴の後にあたる法面でも御鉢スコリアの盛り上がり、旧耕作により削平されているのが見られた。第VIII層御池ボラは、ほぼ水平に堆積している。

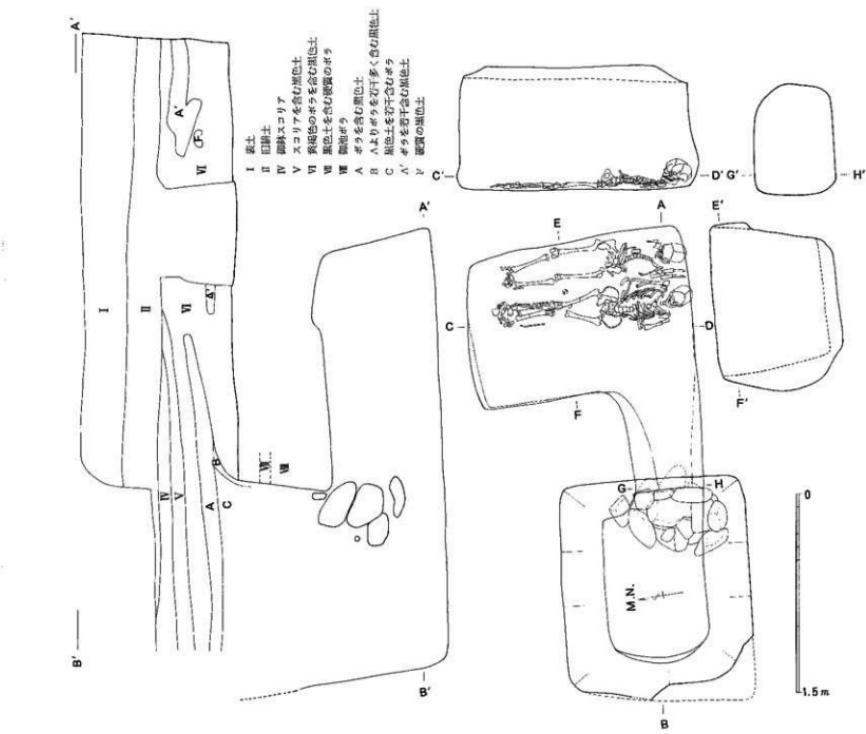
また、基礎用堅穴の北西部において御池ボラ層に径70cm程の空洞が見られ、中に黒色土を若干含むボラが充満していた。これは地下式横穴の玄室と考え、一部黒色土を若干含むボラを奥行1mまで除去したが、床面と思われる部分で何ら遺物等が検出されず、地下式横穴と断定するに至っていない。

今回調査した7号地下式横穴は、片袖で狭道の長い通称「逆P字形」の構造で、軽石で閉塞している。人骨は女性2体が埋葬され、副葬品は刀子2点である。

注 1. 高崎町大字高瀬の堀原古墳群内の全長65.5の前方後円墳の墳丘にも御鉢スコリアが堆積している。



第11図 原村上7号地下式横穴土層図



第12図 原村上7号地下式横穴遺構及び土層実測図

2. 遺構（第12図）

7号地下式横穴は、天井の一部等が剥落しているが、保存状態は良好で人骨2体もほぼ完全に近い状態で残存していた。主軸は約N-95°-Eではほぼ東西方向である。

竪穴は、第VI層ボラを含む黒色土の中程より掘られている。平面形は、隅丸長方形で長軸約1.7m、短軸約1.45m、深さ約1.6mを測る。竪穴の埋土は図版のとおり、上部にボラが多く含む黒色土（第A層）、中層に黒色土を含むボラ、下層に黒色土を若干含むボラの大きく3層に分けられた。羨道は竪穴の右つまり南側に偏り、閉塞は数個が黒色土を含む硬質のボラの土塊の他は、大半は輕石使用である。第12図のとおり輕石は竪穴床面より浮くが、その下部は黒色土を多く含むボラ層となっている。

羨道は、幅0.6m、高さ0.8m、長さ0.95mとわりと長く、玄室南端に至るいわゆる片袖である。

玄室は、平面形が長方形で長軸1.7m、短軸（奥行）1.15m、天井の高さ約0.85mを測る。側壁はやや内傾するが、全体的に箱形に近い。

人骨は、2体埋葬され、いずれも伸展葬である。奥壁より1号人骨、2号人骨と呼称する。1号人骨は、女性壮年末で肋骨はほとんど残存しない。背柱はよく残存するが、東へ彎曲している。2号人骨は、女性壮年で骨の残存状態は良い。左腕は胸部、右腕は腹部付近に置いた状態で埋葬されている。

副葬品は、刀子2点で刃先を東に向か並列した状態で1号人骨と2号人骨の肩部付近に置かれているが、どの人骨に伴うかは不明である。

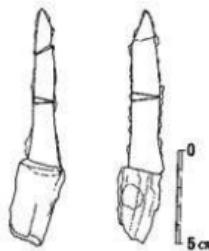
3. 遺物（第13図）

1は、現長12.8cm、刃長8.3cm、元重ね0.3cm、柄は鹿角を使用し、4.5cmが現存する。2は、現長12.4cm、刃長8.6cm、元重ね8.6cm、柄に鹿角を使用し、3.8cmが現存する。

1・2とも刃先約2cmあたりで折れ曲っている。

4. 小結

地下式横穴の墳丘については、石川恒太郎氏、田中茂氏の
論考があるが、近年、中村耕治氏も鹿児島県内の調査例より
封土をもっていた可能性を指摘している。現在まで県内で調
査された例の中で、墳丘を伴っているあるいは墳丘を意識し
ていると推定される地下式横穴は、国富町六野原地下式2・
10号、西都市西都原東立野無号墳下の地下式横穴、同西都原
古墳群102号墳下の地下式横穴、同111号墳下の西都原地下
式4号、えびの市小木原地下式A号、野尻町大荻地下式B一
（注4）
2号（旧3号）、宮崎市下北方古墳群7号下の下北方地下式4・5号、同8号墳下の下北方地下



第13図 岩村上7号地下式横穴出土遺物実物図

式9号、同8号墳下の下北方地下式7号等がある。こうした調査例は決して多くはなく、玄室天井部等が陥没して発見される例が多いため、一般に墳丘等はもたないと考えられている。

今回、7号は竪穴の一部より確認され、また、奈良時代の噴出と言われる御鉢スコリアが残存していたため、主軸線上等の土層が一部ではあるが把握された。その土層に見られる2次堆積のボラを含む黒色土（第A層）及び御鉢スコリアの玄室方向への盛り上がり、玄室上のブロック状のボラを若干多く含む部分の存在をどう解釈するか問題となる。調査時に墳丘様のものはないが、土層に御鉢スコリア、2次堆積土等の盛り上がりが確認されている例が数例ある。昭和43年石川恒太郎氏により調査された繩瀬地下式1号の場合、竪穴は、水平に堆積する御池ボラ層上の黒色土より掘られ、その上部に火山灰（御鉢スコリアか）の盛り上がりが見られる。昭和57年調査された菓子野地下式57—5号では、竪穴の右1mの位置で、原村上7号と同様の2次堆積のボラを多く含む黒色土が玄室方向に盛り上がり、その途中で耕作により削平されている。こうした調査例は現在3例であるが、えびの市真幸でも法面で同様な例が見られる。竪穴上の火山灰及び2次堆積の盛り上がりは、下層の御池ボラがほぼ水平に堆積していることから、地下式横穴が墳丘をもつあるいは墳丘様の施設をもっていたとも考えられる。しかしながら、盛り上がりの確認が竪穴周辺に限られ、その反対側では確認してされていないので、原村上7号が墳丘をもっていた可能性を指摘するにとどめ、今後の調査例の増加を待ちたい。

7号の構造は、玄室が箱形に近く、羨道が片袖でわりに長い通称「逆P形」と称するタイプである。また片袖のタイプは、新富町蔵園地下式横穴を除くと小林市、野尻町、高原町、高崎町、都城市のみで検出されている。こうした片袖のタイプは、この地域の1つの特徴となっている。

築造時期は、遺物が時期を特定しにくい刀子2点のみであるが、構造から6世紀前後の所産と考えられる。

注 1. 石川恒太郎 「地下式古墳の研究」帝国地方行政学会 1973

注 2. 田中 茂 「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について—地下式横穴と墳丘—」『研究紀要第2輯』宮崎県総合博物館 1973

注 3. 中村 耕治 「大隈地区の地下式横穴（地下式横穴と高塚墳の関係について）」『地下式横穴墓から見た古墳時代』宮崎考古学会・鹿児島県考古学会 1986

注 4. 六野原2・10号、東立野無号墳下、西都原102号墳下、同111号墳下、小木原地下式A号、大森地下式B-2号（旧3号）については、注2にまとめられている。

注 5. 石川恒太郎外、「下北方地下式横穴第5号」『宮崎市文化財調査報告書第3集』宮崎市教育委員会 1977

注 6. 野間 重幸 「宮崎市下北方古墳群をめぐって—古墳周辺調査を中心として—」『宮崎考古第8号』宮崎考古学会 1982

注 7. 石川恒太郎 「高崎町塚原地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書第14集』宮崎

注 8. 面高 哲郎 「菴子野地下式横穴第57—4号・5号発掘調査」『都城市文化財調査報告書第3集』都城市教育委員会 1983

注 9. 昭和56年(1981)発見されていが未調査である。

注 10. 地下式横穴が墳丘をもつか否かは、単にこの点だけに限定される問題だけでないと考える。

地下式横穴が群として調査された高原町旭台地下式横穴群、須木村上ノ原地下式横穴群、えびの市馬頭地下式横穴群、同市久見追地下式横穴群などでは、その群内で主軸方位が一定方向を示す中で、数基これに反するものがある。この場合、反する地下式横穴は、一定方向の地下式横穴と径10m前後の円形の中心部に主軸方向が向う例が多い。下北方第8地下式横穴4号と5号は、下北方古墳7号墳の裾に堅穴が位置し、主軸が墳丘の中心に向っており、あたかも1墳丘を共有した様相を呈している。これらの例より、地下式横穴は1墳丘を共有する場合もあると仮定すると、主軸方向が一定方向に反する地下式横穴の主軸方位が説明できることとなり、地下式横穴の群構成の過程の理解がしやすいという利点がある。

III. おわりに

本報告では、3基の地下横穴の調査について報告しているが、その結果をまとめると次のとおりである。

1. 今回報告した地下式横穴は、羨道がわりに長い片袖のタイプ2基、両袖のタイプ1基である。片袖のタイプは、小林、野尻、高原、高崎、都城など内陸部で多く見られる特徴的なものである。また、片袖で羨道がわりに長いものは、現在のところ高崎、都城のみで発見されているが、当地域に厚く推積する御池ボラ層中に構築されている例が多い。
2. 出土した人骨は、5号地下式横穴が壮年女性人骨2体、6号地下式横穴が壮年女性人骨、老年男性人骨各1体、7号地下式横穴が壮年末女性人骨、壮年女性人骨各1体の合計6体である。
3. 3基の地下式の築造時期は、遺物より推定するのは困難であるが、構造より5世紀後葉から6世紀前葉の幅におさまると考えられる。
4. 7号地下式では、奈良時代の噴出と言われる御鉢スコリアの残りが良好で、その下の御池ボラの堆積状況がほぼ水平のなかで、玄室方向への盛り上がりが2ヶ所で確認された。また、地下式横穴構築時の排土・擾乱土も同様な盛り上がりが認められたが、これは、当地下式が墳丘をもっていた可能性を示すものと考えられる。
5. 6号地下式からイモガイ製横型貝輪が出土したが、地下式横穴からの貝輪出土の25例目である。25例のうち、ゴホウラ製貝輪2例、二枚貝製貝輪2例、オオツタノハ(?)製貝輪2例、

不明 2 例を除くと他は全てイモガイ製貝輪である。貝輪の出土地の多くが日向内陸部にあたる都城盆地、小林盆地、加久藤盆地及び周辺である。何故、地下式横穴の場合、古墳時代後半になってしまって依然として南海産貝輪が数多く流入し、着装されるのか、また、内陸部に多いのかは未解決の問題である。

6. 貝輪は、6号地下式2号人骨男性の左上腕骨に着装されていた。貝輪を着装した場合その腕の使用は不自由となることから「右手の不使用」という考え方も提示されているが、2号人骨の場合、左右の前腕に著しい差は見られない。かわって、2号人骨より先に葬られた1号人骨の女性の左尺骨が右側に比較して著しく細くなっている。このことから、本来、この貝輪は、1号人骨が生前使用していたものを、死後2号人骨が着装し、それほど長い時間を経過しないうちに死亡したものと人骨の所見から推定される。



5号地下式横穴墓 壴坑埋土半截状况



同 壴坑及び羨門



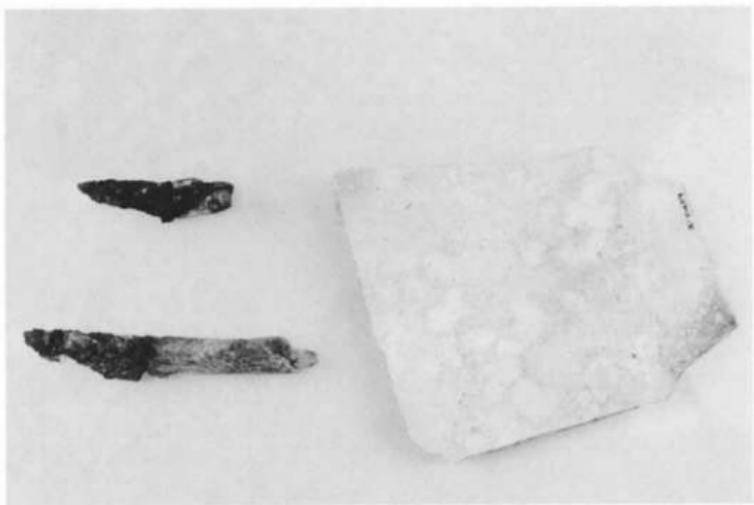
5号地下式横穴墓 羨道及び玄室



同 人骨出土状況



5号地下式横穴墓 人骨及び刀子出土状況



同 出土遺物



6号地下式横穴墓 竖坑检出状况



同 竖坑闭塞石上部 高杯出土状况



6号地下式横穴墓 羨門閉塞状況



同 閉塞状況（羨道側から）



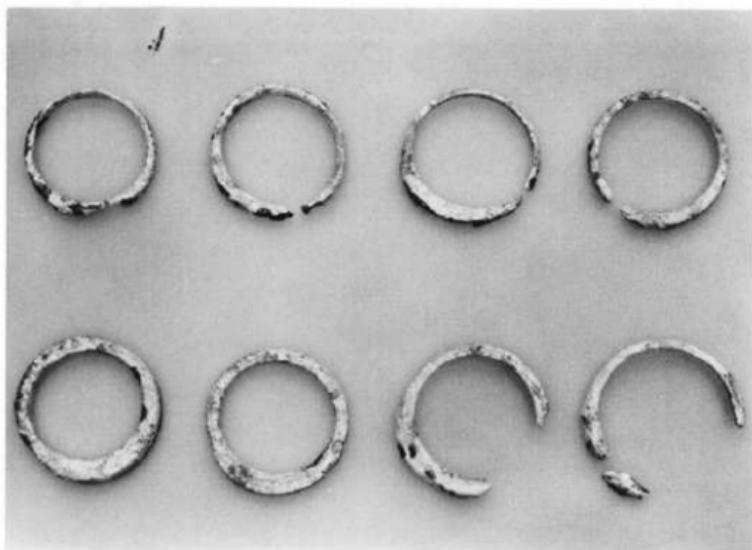
6号地下式横穴墓 人骨出土状况



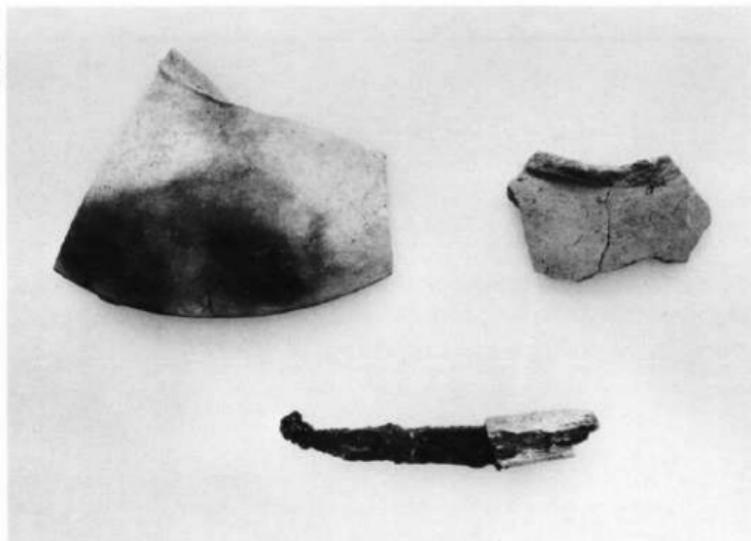
同 2号人骨貝輪装着状况



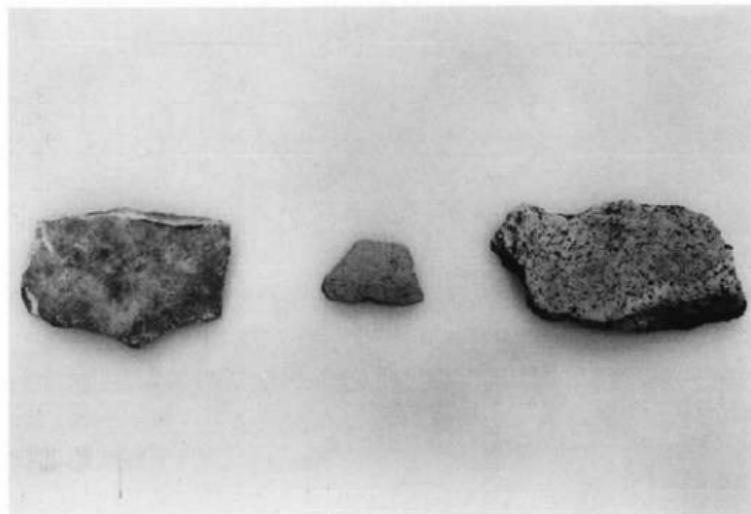
6号地下式横穴墓 完掘状況（堅坑側から）



同 出土貝輪 $\left[\begin{matrix} 1 \sim 4 \\ 5 \sim 8 \end{matrix} \right]$



6号地下式横穴墓 出土土師器・刀子



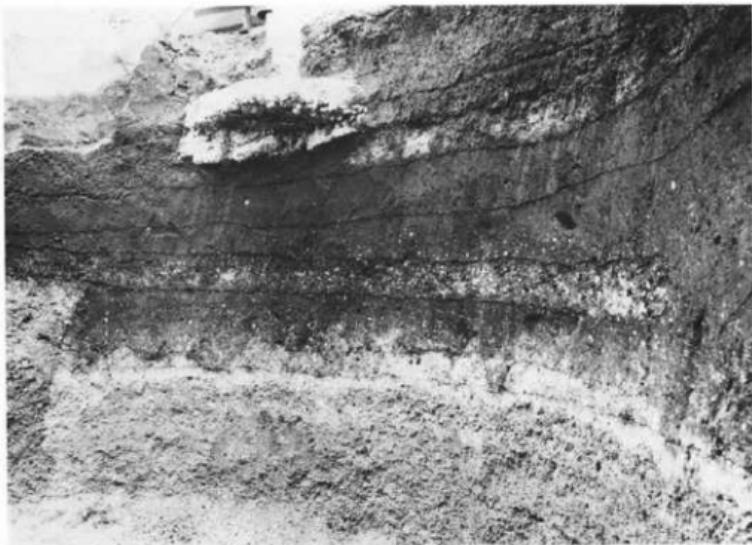
同 周辺出土土師器



7号地下式横穴 発見状況



同 壓穴周辺土層



7号地下式横穴 壓穴右土層



同 壓穴周辺土層



7号地下式横穴 壁穴上部土層



同 玄室上部付近土層



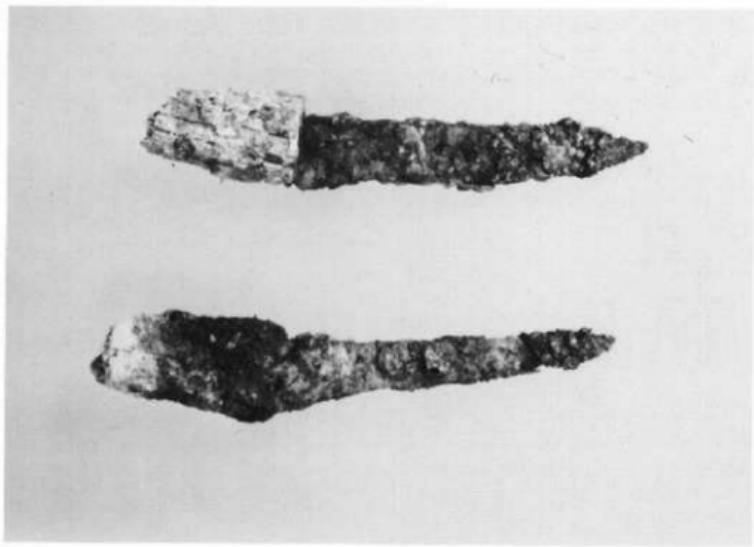
7号地下式横穴 壓穴・羨道



同 閉塞狀況



7号地下式横穴 埋葬状况



同 出土遗物

III．高崎町出土の古墳時代人骨

- 1．宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨**
- 2．宮崎県高崎町出土の古墳時代幼小児骨**

目 次

1. 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨	57
(1) 原村上地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨	57
(2) 繩瀬小学校地下式横穴墓出土の古墳時代人骨	116
(3) 横尾地下式横穴墓出土の古墳時代人骨	129
(4) 宇野原地下式横穴墓出土の古墳時代人骨	135
(5) 仮屋尾地下式横穴墓出土の古墳時代人骨	138
(6) 塚原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨	142
2. 宮崎県高崎町出土の古墳時代幼小児骨	159
(1) 原村上地下式横穴墓群出土の古墳時代小児骨	159
(2) 繩瀬小学校地下式横穴墓出土の古墳時代小児骨	166
(3) 塚原地下式横穴墓出土の古墳時代幼児骨	168

1. 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨

* 松下孝幸

地下式横穴墓は、宮崎県や鹿児島県の一部にその分布範囲をもつ特異的な古墳時代の墳墓であるが、長崎大学医学部解剖学第二教室では南九州地域の古墳時代人の人類学的研究を行なうため、この地下式横穴墓から出土する古墳時代人骨を収集するとともに、その研究を続けている。これらの研究によって、この地下式横穴墓から出土する古墳時代人骨の特徴が次第に明らかになりつつある。しかし、人骨資料は現在でも宮崎県内の一帯に偏っており、宮崎県内における地域差を含めた全面的な解明にまでには至っていないのが現状である。

宮崎県北諸県郡高崎町でもかなりの数の地下式横穴墓が発見され、調査も行なわれ、人骨も出土しているが、これまで、人骨の報告はなかった。これらの人骨は宮崎県の古墳時代人骨の研究にとってきわめて貴重な資料となるものである。今回、高崎町教育委員会のご協力を得て、これまで町に保管されていた人骨について人類学的研究を行なうことができたので、その結果を報告したい。なお、幼小児骨に関しては、別稿で分部が詳述しているので、本稿では成人骨についてのみ報告する。

1. 原村上地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨

資料

高崎町大字純瀬字原村上で、昭和38年以降に発見され、調査が行なわれた地下式横穴墓は、同町の黒木昭三氏によれば、表1のとおりであるが、町で保管されていた人骨はこのうちの、昭和45年、46年、49年、57年に出土した人骨のみである。

昭和45年2月に、日高正晴氏によって、A号墳（2号墳）とB号墳（3号墳）の2基の地下式横穴墓が調査されている（日高、1977）。報告書ではA号墳には4体の人骨が存在したと記載されているが、保管されていた人骨は5体分であり、B号墳から出土したと思われる人骨は1体分の人骨であった。また、昭和46年には黒木昭三氏によって調査が行なわれ、1体の人骨が、昭和49年の岩永哲夫氏の調査では2体の人骨が（岩永、1976）、さらに昭和57年の菅谷和樹氏の調査で2体の人骨が発掘されている。各出土人骨の番号と性別、年令などは表2に示した。また、出土人骨の男女の内訳は表3に示すとおりである。

* Takayuki MATSUSHITA

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）〕



図1 遺跡の位置

表1 原村上地下式横穴墓調査一覧

調査年月日	所在地	墓数	人骨数	文献
1. 昭和38年10月9日	大字繩瀬字原村上550	1	3	
2. 昭和39年5月16日	大字繩瀬字原村上	1	1	
3. 昭和45年2月3日	大字繩瀬字原村上	2	5	2
4. 昭和46年10月10日	大字繩瀬字原村上	1	1	
5. 昭和49年6月26日	大字繩瀬字原村上1661-1	1	2	1
6. 昭和57年8月15日	大字繩瀬字原村上	1	2	
7. 昭和61年11月	大字繩瀬字原村上	1	2	
8. 昭和61年12月	大字繩瀬字原村上	1	2	

表2 人骨一覧

人骨番号	出土年	性別	年令	備考
2号墳1号人骨	昭和45年	男性	壯年	頭蓋朱
2号墳2号人骨	同上	女性	壯年	顔面朱
2号墳3号人骨	同上	女性	壯年	前頭部朱、微量
2号墳4号人骨	同上	—	小兒(1)	6才
2号墳5号人骨	同上	—	小兒(1)	10才
3号墳1号人骨	同上	男性	壯年	
4号墳1号人骨	昭和46年	女性	熟年	
4号墳1号人骨	昭和49年	男性	壯年	
4号墳2号人骨	同上	女性	壯年	
5号墳1号人骨	昭和57年	女性	壯年	顔面朱
5号墳2号人骨	同上	女性	壯年	顔面朱、微量
6号墳1号人骨	昭和61年	女性	壯年	頭蓋朱
6号墳2号人骨	同上	男性	熟年	頭蓋朱
7号墳1号人骨	同上	女性	壯年末	頭蓋朱
7号墳2号人骨	同上	女性	壯年	

表3 資料数

遺構番号	男性	女性	小児	合計
2号墳	1	2	2	5
3号墳	1	0	0	1
46—1号墳	0	1	0	1
4号墳	1	1	0	2
5号墳	0	2	0	2
6号墳	1	1	0	2
7号墳	0	2	0	2
合 計	4	9	2	15

所 見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

< 2号墳 >

人骨は頭蓋から5体分である。取り上げられていた四肢骨は、鎖骨が3体分、上腕骨は2体分、桡骨は1~2体分、尺骨は1体分、大脛骨は1~2体分、胫骨は1体分、寛骨は3体分で、そのうち女性寛骨が2体分存在する。各四肢骨は各個体ごとに分けることは不可能で、また、計測できたものも少ない。

I. 頭 蓋

2号墳1号人骨（男性、壮年）

1. 頭 蓋

(1) 脳頭蓋

後頭部が欠損している。乳様突起は小さい。外耳道は両側とも観察できたが、右側には著明な骨謹が認められる。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の前半部が観察できた。冠状縫合は内外両板とも開離しているが、矢状縫合の一部は内外両板とも癒合している部分が認められる。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大幅が148mm、バジオン・ブレグマ高は129mmであるが、頭蓋最大長は計測できない。示数値は、頭蓋幅高示数が87.16となり、頭型はtapeinokran（平頭）に属している。また、横弧長は320mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は頬骨弓が欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓は強く隆起し、鼻骨の隆起も

やや強い。鼻骨はやや幅広く、鼻根部はやや広い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が95mm、中顎幅は103mm、顎高は117mm、上顎高は64mmである。頬骨弓幅は計測できないが、左側の頬骨弓がほぼ完全に残っているので、左側半を2倍することによって、頬骨弓幅の推定値を算出してみると、〔 $69\text{mm} \times 2 = 138\text{mm}$ 〕となる。この推定値を用いて示数値を算出してみると、顎示数は〔84.78 (K)〕、113.59 (V)、上顎示数は〔46.38 (K)〕、62.14 (V)となり、顔面には低・広顎傾向が認められる。

眼窩幅は42mm (右、左)、眼窩高は33mm (右、左)で、眼窩示数は78.57 (右、左)となり、両側ともmesokonch (中眼窩)に属している。

鼻幅は24mm、鼻高は50mmで、鼻示数は48.00となり、mesorrhine (中鼻)に属している。鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が19mm、鼻根横弧長は22mm、鼻根弯曲示数は86.36となり、鼻根部は比較的扁平である。両眼窩幅は97mmで、眼窩間示数は19.59である。また、前頭突起水平傾斜角は65度で、前頭突起の向きは矢状方向である。

側面角は、全側面角が90度、鼻側面角が93度、歯槽側面角は67度で、歯槽性の突顎傾向が認められる。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

●	●	M ₁	○	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	○	P ₁	P ₂	M ₁	○	M ₂
●	●	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		○	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	●	●

下顎の両側のM₂およびM₃の歯槽は閉鎖しており、稜を形成している。咬耗度はBrocaの2度で、風習的抜歯の痕跡は認められない。

また、歯の咬合形式は鉗子状咬合に近い鍛状咬合である。

3. 性別・年令

眉上弓の隆起が強いことから、男性と推定した。年令は冠状縫合が内外両板とも開離していることおよび矢状縫合の一部が内外両板とも密合していることから、壮年の後半頃と推定した。

2号墳2号人骨 (女性、壮年)

1. 頭蓋

残存していたのは前頭骨、右側頸骨、上顎骨、下顎骨などである。前頭結節はよく発達している。縫合は冠状縫合が観察できたが、おそらくこの縫合は内外両板とも開離していたものと考えられる。外耳道は左側が観察できたが、骨腫は存在しない。その他の部分は観察も計測もできない。

2. 齒

上顎骨と下顎骨には歯が釘植していた。その残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

M ₃	M ₂	M ₁	○	○	○	○	I ₁	I ₁	I ₂	○	P ₁	P ₂	M ₁	○
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	○	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	○

なお、左側M₃は未萌出であり、萌出可能なスペースが存在しないことから、これは先天的欠損と考えられる。また、咬耗度は Broca の 1 度で、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 性別・年令

性別は、前頭結節の発達が良好なことから女性と推定し、年令は冠状縫合が内外両板とも開離していたものと考えられることから、壮年と推定した。

2号墳3号人骨（女性、壮年）

1. 頭蓋

残存していたのは前頭骨、頭頂骨、側頭骨、上顎骨および下顎骨などである。眉上弓の隆起はきわめて弱く、前頭結節の発達は良い。縫合は、冠状縫合と矢状縫合が観察できたが、いずれも内外両板とも開離している。外耳道は両側とも観察できた。右側の前壁には骨腫が認められたが、左側には存在しない。

2. 齒

歯が残存していた。これを歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	M ₁	P ₂	P ₁	C	/	/	I ₁	/	/	P ₁	/	M ₁	/	M ₃
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	C	P ₁	P ₂	/	/

咬耗度は Broca の 1~2 度である。

3. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱いことから女性と推定し、年令は冠状縫合と矢状縫合が内外両板とも開離していることから、壮年と推定した。

II. 四肢骨

計測が可能で、性別が判別できたのは、次の上腕骨と大腿骨のみである。

1. 上腕骨（男性）

右側が残存していた。三角筋粗面の発達は良くなく、骨体はやや細い。

計測値は、中央最大径が 21mm（右）、中央最小径は 15mm（右）で、骨体断面示数は 71.43（右）

となり、骨体は扁平である。中央周は58mmで、骨体は細い。

径は小さいが、他の男性上腕骨と比較して、男性上腕骨と推定した。

2. 大腿骨 1 (男性)

遠位部を欠損した右側が残存していた。緻密質が剥落しており、骨体は計測できないが、骨頭は計測可能である。その径は大きい。のことから、男性大腿骨と推定した。

3. 大腿骨 2 (女性)

右側骨体が残存していた。粗線の発達は悪く、骨体は著しく細い。

計測値は、骨体中央矢状径が21mm(右)、横径は23mm(右)で、骨体中央断面示数は91.30(右)となり、骨体の断面形は横広ろの橢円形を呈している。骨体中央周は68mm(右)で、骨体はきわめて細い。

径が著しく細いことから、女性大腿骨と推定した。

『3号墳』

3号墳1号人骨 (男性、壮年)

残存量はきわめて少なく、頭蓋の一部と、大腿骨と脛骨のごく一部が残存していたにすぎない。

1. 頭蓋

残存していたのは左側側頭骨、左側頭頂骨、下顎骨片などで、観察も計測もできない。左側外耳道の観察が可能であったが、骨腫は存在しない。

2. 齒

歯が残存していた。これを歯式で示すと次のとおりである。

/	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	/	/	/		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	/	/	/	[/ : 不明 (破損)]
	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	/	/	/		I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	

咬耗度はBrocaの2度である。なお、下顎の両側M₁は3根である。

3. 四肢骨

① 大腿骨

両側の骨体が残存していた。緻密質の剥落が著しく、計測はできないが、粗線の発達は良好で、また骨体両側面は後方へ発達している。

4. 性別・年令

性別は、大腿骨体の形状から男性と推定し、年令は歯の咬耗程度だけから推定すれば、壮年の可能性が強い。

『昭和46年出土人骨』

46-1 号人骨（女性、熟年）

残存していたのは上腕骨、右側桡骨、大腿骨および右側寛骨である。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

右側1/3が欠損している以外はほぼ完全である。外後頭隆起部はやや突出しているが、乳様突起は小さい。外耳道は左側が観察できたが、骨腫は認められない。三主縫合の内板はすべて癒合しており、冠状縫合と矢状縫合は外板も大部分が癒合しており、ラムダ縫合の外板も癒合が進んでいる。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が179mm、頭蓋最大幅は142mm、バジオン・ブレグマ高は125mmである。頭蓋最大長は計測できないが、左側半が完全に残存しているので、左側半を2倍することによって頭蓋最大幅を推定してみると、 $[65\text{mm} \times 2 = 130\text{mm}]$ となる。この推定値を用いて、示数値を算出してみると、頭蓋長幅示数は[72.63]、頭蓋長高示数は69.83、頭蓋幅高示数は[96.15]となり、頭型は dolicho-, chamae-, metriokran (長、低、中頭)に属している。また、正中矢状弧長は362mmである。

(2) 顔面頭蓋

右側の頬骨弓を欠損している。眉上弓の隆起はきわめて弱く、また鼻骨の隆起もきわめて弱く、鼻根部は著しく扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、顎長が99mm、顎高は104mm、上顎高は64mmで、頬骨弓幅と中顎幅は計測できないが、左側半が完全なので、左側半を2倍することによってこの両計測値を推定してみた。その推定値は頬骨弓幅が $[65\text{mm} \times 2 = 130\text{mm}]$ 、中顎幅は $[50\text{mm} \times 2 = 100\text{mm}]$ となり、この推定値を用いて示数値を算出してみると、顎示数は[80.00 (K)]、[104.00 (V)]、上顎示数は[49.23 (K)]、[64.00 (V)]となり、顔面には著しい低・広顎傾向が認められる。

眼窩幅は40mm(右、左)、眼窩高は32mm(右、左)で、眼窩示数は80.00(右、左)となり、両側とも mesokonch (中眼窩)に属している。

鼻幅は28mm、鼻高は46mmで、鼻示数は60.87となり、hyperchamaerrhin (過低鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が19mm、鼻根横弧長は20mm、鼻根弯曲示数は95.00となり、鼻根部はきわめて扁平である。両眼窓幅は95mmで、眼窓間示数は20.00である。前頭突起水平傾斜角は計測できないが、観察したところではこの角度はかなり大きい。

側面角は、全側面角が81度、鼻側面角が89度、歯槽側面角は52度で、歯槽性の突顎傾向が著しい。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

●	●	○	●	●	●	○		○	○	C	P ₁	P ₂	●	○	〔 / : 不明（破損） ○ : 歯槽開存 ● : 歯槽閉鎖 〕
/	○	M ₁	○	P ₁	C	I ₂	○		○	○	○	●	○	○	
							○		○	○			○	M ₂	

上顎のM₃は両側とも萌出していなかった可能性が強い。咬耗度は Broca の3~4度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

① 上腕骨

左右の骨体が残存していた。骨体は著しく扁平である。

計測値は、中央最大径が21mm（右、左）、中央最小径は15mm（右）、14mm（左）で、骨体断面示数は71.43（右）、66.67（左）となり、骨体は扁平である。中央周は60mm（右）、59mm（左）で、骨体は細い。

② 下肢骨

① 大腿骨

左右の骨体が残存していたが、計測ができたのは左側のみである。粗線は女性としてはやや発達している。

計測値は、骨体中央矢状径が26mm（左）、横径は25mm（左）で、骨体中央断面示数は104.00（左）となり、骨体両側面は後方へやや発達している。骨体中央周は81mm（右）で、骨体はやや大きい。また上骨体断面示数は89.66（左）で、骨体上部の扁平性は認められない。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱いことから女性と推定した。年令は三主縫合の内板がすべて癒合していることから、熟年と考えられる。

<4号墳>

4号墳1号人骨（男性、壮年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨の大部分を欠損しているが、それ以外の保存状態は良好である。乳様突起はやや大きい。外耳道は右側の観察ができたが、骨腫は認められない。三主縫合はすべて内外両板とも開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が178mm、頭蓋最大幅は137mm、バジョン・ブレグマ高は133mmである。頭蓋長幅示数は76.97、頭蓋長高示数は74.72、頭蓋幅高示数は97.08となり、頭型はmeso-, orth-, metriokran（中、中、中頭）に属している。また頭蓋水平周は506mm、横弧長は297mmである。

(2) 顔面頭蓋

左側の上顎骨と左側頬骨を欠損している。眉上弓から眉間にかけて強く隆起している。顔面頭蓋の計測値は、上顎高が(57mm)で、頬骨弓幅、中顎幅、顎高は計測できないが、中顎幅は右側半を2倍することによって推定値を算出することが可能である。その中顎幅の推定値は〔50mm×2=100mm〕となり、この推定値を用いて上顎示数を算出してみると、上顎示数は〔57.00〕となり、顎面は低顎傾向が著しい。

眼窩幅は42mm(右)、眼窓高は30mm(右)で、眼窓示数は71.43(右)となり、chamaekonch(低眼窓)に属している。

鼻幅は29mm、鼻高は44mmで、鼻示数は65.91となりhyperchamaerrhin(過低鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が21mmで、前頭突起水平傾斜角は89度を示し、前頭突起の向きはやや矢状方向である。

側面角は、全側面角が87度、鼻側面角が93度、歯槽側面角は64度で、歯槽性の突顎の傾向が強い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

M ₃	●	M ₁	P ₂	P ₁	○	○	○		○	○	○	○	P ₂	/	●	●
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₂	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	/

〔/ : 不明(破損)
○ : 歯槽開存
● : 歯槽閉鎖〕

咬耗度はBrocaの2~3度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨、上腕骨が残存していた。

(2) 上腕骨

右側の骨体が残存していた。三角筋粗面の状態は不明であるが、骨体はそれほど大きくはない。

計測値は、中央最大径が21mm（左）、中央最小径は16mm（左）で、骨体断面示数は76.19（左）となり、骨体の扁平性は弱い。骨体最小周は60mm（左）、中央周は63mm（左）である。

(2) 下肢骨

大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

(1) 大腿骨

左側が残存していた。粗線の発達は良好であり、骨体両側面もやや後方へ伸びており、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が29mm（左）、横径は27mm（左）で、骨体中央断面示数は107.41（左）となり、骨体両側面は後方へやや発達している。骨体中央周は88mm（左）で、また、上骨体断面示数は66.67（左）となり、骨体上部はきわめて扁平である。

(2) 脛骨

ヒラメ筋線の発達は悪いが、骨体は著しく扁平である。また、骨体の断面形は両側ともヘリカのV型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が349mm（左）とやや長く、骨体周は80mm（右）、83mm（左）、最小周は71mm（右）、73mm（左）である。中央最大径は32mm（右）、33mm（左）、中央横径は18mm（右）、19mm（左）で、中央断面示数は56.25（右）、57.58（左）となり、骨体は古墳人としては著しく扁平である。

4. 推定身長値

左侧脛骨の最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ161.59cm（Pearson）、159.91cm（藤井）となり、Pearson の式から算出した値は160cmを越え、身長は高い。

5. 性別・年令

性別は、眉間から眉上弓にかけての隆起が強いことや四肢骨の径が大きいことから男性と推定した。年令は、三主縫合がすべて内外両板とも開離していることから壮年と考えられる。

4号墳2号人骨（女性、壮年）

1. 頭蓋

頭蓋冠が残存していた。径は小さい。前頭部は丸く、乳様突起も小さい。外耳道は右側の観察が可能であったが、骨腫は認められない。三主縫合のうち矢状縫合とラムダ縫合は内板が癒合しており、冠状縫合の内板も大部分が癒合している。外板は三主縫合ともまだ開離しているが、部分的には癒合が認められる。

計測値はバジオン・ブレグマ高が126mmである。その他の計測はほとんど不可能であるが、頭型は観察によって推測が可能で、観察によれば、頭型は短頭か短頭に近い中頭と考えられる。

2. 四肢骨

大腿骨と脛骨が残存していた。

① 大腿骨

右側は骨体の一部が、左側は骨体が残存していたが、左側骨体の表面は剥落しており、計測はできない。観察したところでは径は小さい。

② 脣骨

両側の骨体が残存していた。ヒラメ筋線の発達は良好で、骨体は扁平である。また、骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。

計測値は、中央最大径が28mm（右）、29mm（左）、中央横径は19mm（右、左）で、中央断面示数は67.86（右）、65.52（左）となり、骨体は古墳人女性としては扁平である。また骨体周は77mm（右）、76mm（左）である。

3. 性別・年令

性別は、前頭部が膨隆しており、径も小さいことから女性と推定した。年令は、三主縫合の内板がすべて癒合していることから熟年と考えられる。

《5号墳》

5号墳1号人骨（女性、壮年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

右側半を欠損している。外後頭隆起部はやや隆起しているが、上項線は明瞭ではない。外耳道は左側の観察が可能で左側後壁には小さな骨腫が認められる。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合の左側半が観察できたが、これらは内外両板とも開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が186mm、バジオン・ブレグマ高は133mmである。頭蓋最大幅

は計測できないが、左側半を2倍することによって、頭蓋最大幅を推定してみると、 $[70\text{mm} \times 2 = 140\text{mm}]$ となる。この推定値を用いて示数値を算出してみると、頭蓋長幅示数は〔75.27〕、頭蓋長高示数は71.51、頭蓋幅高示数は〔95.00〕となり、頭型は meso-, orth-, metriokran (中、中、中頭)に属している。また、正中矢状弧長は387mmである。

(2) 顔面頭蓋

右側蝶骨が欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓はわずかに隆起しているが、強いものではない。鼻根部は狭いが、鼻骨の隆起は弱い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が102mm、上顎高は66mmで、頬骨弓幅、中顎幅、顎高は計測できないが、頬骨弓幅と中顎幅は左側半を2倍することによって、頬骨弓幅は〔68mm $\times 2 = 136\text{mm}$]、中顎幅は〔51mm $\times 2 = 102\text{mm}$ 〕と推定することができた。これらの推定値を用いて示数値を算出してみると、上顎示数は〔48.53 (K)〕、〔64.71 (V)〕となり、顔面には低・広顎傾向が認められる。

眼窩幅は44mm (左)、眼窩高は36mm (左)で、眼窩示数は81.82 (左)となり、左側は mesok onch (中眼窩)に属している。

鼻幅は28mm、鼻高は51mmで、鼻示数は54.90となり、chamaerrhin (低鼻)に属している。鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が16mm、鼻根横弧長は19mm、鼻根弯曲示数は84.21である。前頭突起水平斜傾角は計測できないが、観察したところでは、やや矢状方向をしている。

側面角は、全側面角が80度、鼻側面角が86度、歯槽側面角は61度で、歯槽性の突顎傾向が強い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

●	●	M ₁	P ₂	○	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	○
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	/	/		I ₁	I ₂	/	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

(／:不明(破損)
○:歯槽開存
●:歯槽閉鎖)

咬耗度は Broca の2度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

右側上腕骨が残存していた。

① 上腕骨

右側のみが残存していた。骨体は著しく細く、三角筋粗面の発達も悪い。

計測値は、中央最大径が17mm (右)、中央最小径は13mm (右)で、骨体断面示数は76.47 (右)となり、骨体の扁平性は弱い。骨体最小周は50mm (右)、中央周は52mm (右)で、骨体は著しく

細い。

(2) 下肢骨

大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

① 大腿骨

左右の骨体が残存していた。粗線の発達は悪く、骨体は著しく細い。また骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が23mm（右、左）、横径は25mm（右）、24mm（左）で、骨体中央断面示数は92.00（右）、95.83（左）となり、骨体は横径が矢状径よりも大きい。骨体中央周は76mm（右）、75mm（左）で、骨体はさわめて細い。また、上骨体断面示数は71.43（右）となり、骨体上部は著しく扁平である。

② 脛骨

左側の骨体が残存していた。骨体は細く、扁平で、骨体の断面形はヘリチカのII型を呈している。

計測値は、中央最大径が27mm（左）、中央横径は16mm（左）で、中央断面示数は59.26（左）となり、骨体は扁平である。骨体周は69mm（左）で、骨体は細い。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓はやや隆起しているが、四肢骨の径が著しく小さいことから、女性と推定した。年令は、三主縫合の内板がほとんど開離していることから壮年と考えられる。

5号墳2号人骨（女性、壮年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

左側頭頂骨、左側側頭骨などが残存していたにすぎない。乳様突起は小さい。外耳道は左側の観察が可能であったが、骨腫は認められない。縫合は、三主縫合のうち矢状縫合と冠状縫合、ラムダ縫合のそれぞれ左側半が観察できたが、これらはいずれも内外両板とも開離している。脳頭蓋の計測は不可能で、頭型は観察によっても推測することはできない。

(2) 脣面頭蓋

一部が残存していた。眉上弓の隆起は弱い。鼻根部は狭いが、鼻骨は広い。また、前頭突起は矢状方向を向いている。

計測値は、眼窩幅が39mm（左）、眼窩高は34mm（左）で、眼窩示数は87.18（左）となり、左側は hypsikonch（高眼窩）に属しており、眼窩の高径は高い。また、中顎幅の推定値は〔43mm × 2 = 86mm〕と、幅径は狭いようである。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

/ M ₂ M ₁ P ₂ / C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ ● M ₂ /	[/ : 不明（破損） ○ : 歯槽開存 ● : 歯槽閉鎖]
/ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C ○ ○	I ₁ I ₂ / P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ /	

咬耗度は Broca の 1~2 度である。なお、風呂的抜歯の痕跡は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

鎖骨、右側の橈骨、尺骨が残存していた。骨体はいずれも著しく細く、小さい。

(2) 下肢骨

右側寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

① 寛骨

右側の腸骨、坐骨が残存していた。大坐骨切痕の角度は大きく、耳状面前溝が認められる。

② 大腿骨

右側は遠位部を、左側は近位部を欠損している。粗線の発達は悪く、骨体両側面の後方への発達も悪い。

計測値は、骨体中央矢状径が 21mm (右、左)、横径は 23mm (右、左) で、骨体中央断面示数は 91.30 (右、左) となり、骨体は横径が矢状径よりも大きく、その断面形は丸い。骨体中央周は 69mm (右、左) で、骨体はきわめて細い。また、上骨体断面示数は 70.37 (右)、73.08 (左) となり、骨体上部は扁平である。

③ 脛骨

左右とも両端を欠損している。骨体は細いが、ヒラメ筋線の発達は良好で、また、骨体の断面形はヘリチカの II 型を呈している。

計測値は、中央最大径が 24mm (右、左)、中央横径は 17mm (右、左) で、中央断面示数は 70.83 (右、左) となり、骨体の扁平性は弱い。骨体周は 65mm (右)、67mm (左)、最小周は 58mm (右)、59mm (左) で、骨体は細い。

4. 性別・年令

性別は、大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と推定し、年令は、三主縫合が内外両板とも開離していることから壮年と推定した。

『6号墳』

6号墳1号人骨（女性、壮年）

天井が落ちていたため、軸幹骨の保存状態は悪いが、幸いなことに頭蓋の保存状態は良好であった。

1. 頭 蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨の一部と下頸骨の一部を欠損している以外は完全である。前頭鱗はやや膨隆している。外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起も小さい。外耳道は両側とも観察できたが、右側は前壁に、左側は前後両壁に骨腫が認められる。三主縫合はすべて内外両板ともほとんど開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が172mm、頭蓋最大幅は138mm、バジオン・ブレグマ高は135mmである。頭蓋長幅示数は80.23、頭蓋長高示数は78.49、頭蓋幅高示数は97.83となり、頭型は brachy-, hypsi-, metriokran (短、高、中頭) に属している。また頭蓋水平周は503mm、横弧長は307mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋はほぼ完全である。眉上弓の隆起は弱い。鼻骨の隆起は強く、鼻根部はやや扁平で、鼻根部は広い。頬骨は左右とも分裂頬骨である。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が98mm、頬骨弓幅は132mm、中顎幅は104mm、顎高は117mm、上顎高は70mmで、顎示数は88.64 (K)、112.50 (V)、上顎示数は53.03 (K)、67.31 (V) となり、顔面には高顎傾向が認められる。

眼窩幅は43mm (右、左)、眼窩高は32mm (右)、33mm (左)で、眼窩示数は74.42 (右)、76.74 (左) となり、右側は chamaekonch (低眼窩)、左側は mesokonch (中眼窩) に属している。鼻幅は29mm、鼻高は52mmで、鼻示数は55.77となり、chamaerrhin (低鼻) に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が21mm、鼻根横弧長は22mm、鼻根彎曲示数は95.45となり、鼻根部はさわめて扁平である。両眼窩幅は100mmで、眼窩間示数は21.00で、前頭突起水平傾斜角は103度となり、前頭突起は矢状方向である。鼻根角は149度、鼻根陥凹示数は11.43となり、鼻骨の隆起は弱い。

側面角は、全側面角が79度、鼻側面角が53度、歯槽側面角は68度で、歯槽性突顎の傾向が認められる。

下顎骨は高径がやや高く、下顎枝は幅広い。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

●	●	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	●
●	●	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	●

咬耗度は Broca の 2~3 度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

① 上腕骨

両側とも骨体が残存していたが、左側の方が保存状態は良い。骨体は細い。

計測値は、中央最大径が 18mm (右)、17mm (左)、中央最小径は 14mm (右、左) で、骨体断面示数は 77.78 (右)、82.35 (左) となり、骨体の扁平性は弱い。また骨体最小周は 51mm (左)、中央周は 52mm (左) で、骨体は細い。

② 構骨

両側とも残存していたが、右側の方が残存状態は良い。骨体は細いが、左側の方がより細い。

③ 尺骨

両側とも骨体が残存していた。尺骨体には左右で大きさの差が認められ、左側は右側よりも著しく細い。

(2) 下肢骨

① 宽骨

両側とも坐骨を欠損しているが、大坐骨切痕の角度は大きく、恥骨下角も大きな角度である。

② 大腿骨

両側とも大転子や外側頸を欠いている。長さは短く、骨体は細いが、粗線の発達は良好で、左側は骨体の両側面が後方へ発達しており、骨体上部も扁平である。

計測値は、最大長が 375mm (左)、骨体中央周は 74mm (右)、78mm (左) である。骨体中央矢状径は 23mm (右)、26mm (左)、横径は 23mm (右)、24mm (左) で、骨体中央断面示数は 100.00 (右)、108.33 (左) である。また、上骨体断面示数は 72.41 (右) となり、骨体上部は扁平である。

③ 腕骨

右側は両端を欠損しており、左側も外側頸の大部分を欠損している。長さはやや短く、骨体も細い。また、ヒラメ筋線の発達は悪く、骨体の断面形は両側ともヘリチカの II 型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が315mm（左）、骨体周は69mm（右）、72mm（左）、最小周は63mm（左）で、骨体は細い。中央最大径は25mm（右）、26mm（左）、中央横径は17mm（右）、18mm（左）で、中央断面示数は68.00（右）、69.23（左）となり、骨体は古墳人としては扁平である。

④ 腓骨

左側が残存していた。骨体は細い。

4. 推定身長値

左側大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ145.78cm（Pearson）、145.22cm（藤井）となり、左側脛骨からは148.86cm（Pearson）、147.46cm（藤井）となり、いずれも低身長である。

5. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱く、大坐骨切痕の角度や恥骨下角が大きいことから、女性と推定した。年令は、三主縫合の内外両板が開離していることから壮年と考えられる。

6号墳2号人骨（男性、熟年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。外後頭隆起の発達は良好で、外耳道は両側とも観察できたが、右側の後壁に弱い骨隆起が認められる。縫合は、三主縫合の内板はすべて癒合しているが、矢状縫合とラムダ縫合の外板はかなり癒合が進行している。

頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が176mm、頭蓋最大幅が144mm、バジオン・ブレグマ高は131mmである。頭蓋長幅示数は81.82、頭蓋長高示数は74.43、頭蓋幅高示数は90.97となり、頭型は brachy-, orth-, tapeinokran (短、中、平頭) に属している。また頭蓋水平周は517mm、横張長は310mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓は強く隆起し、鼻根部はやや狭い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が106mm、頬骨弓幅は140mm、中顎幅は110mm、顎高は122mm、上顎高は73mmで、顎示数は87.14（K）、110.91（V）、上顎示数は52.14（K）、66.36（V）となり、顎面には高顎傾向が認められる。

眼窩幅は47mm（右、左）、眼窩高は33mm（右）、35mm（左）で、眼窩示数は70.21（右）、74.47（左）となり、両側とも chamaekonch （低眼窩）に属している。

鼻幅は27mm、鼻高は54mmで、鼻示数は50.00となり、mesorrhini（中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が15mm、鼻根横弧長は20mm、鼻根彎曲示数は75.00となり、鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起は強い。両眼窓幅は105mmで、眼窓間示数は14.29となり、鼻根部は狭い。前頭突起水平傾斜角は63度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は143度、鼻根陥凹示数は13.89である。

側面角は、全側面角が83度、鼻側面角が84度、歯槽側面角は80度で、歯槽性突顎の傾向は全く認められない。

下頸枝は広く、下頸切痕は浅い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

● ● ● ● ● ●	I ₂ ○		● I ₂ ● ● ● ● ● ●	P ₂ ● ● ●	○ : 歯槽開存 ● : 歯槽閉鎖
-------------	------------------	--	------------------------------	----------------------	----------------------

咬耗度は Broca の 1 ~ 3 度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

① 上腕骨

両側とも残存していたが、右側の方が保存状態は良い。骨体は細長いが、三角筋粗面の発達は比較的良好である。

計測値は、中央最大径が21mm（右）、中央最小径は15mm（右）で、骨体断面示数は71.43（右）となり、骨体は扁平である。骨体最小周は59mm（右）、中央周は62mm（右）で、骨体は細い。

② 槌骨

両側の骨体が残存していた。長さはやや長そうで、骨体はやや細い。本例は左側前腕に貝輪を着装していたが、橈骨の左右間にはそれほど著しい差は認められない。

③ 尺骨

両側の骨体が残存していた。尺骨も長さがやや長く、骨体はやや細い。また、尺骨についても、左右間に差はほとんどない。

(2) 下肢骨

① 大腿骨

左右とも骨体が残存していた。また、粗線の発達はきわめて良好で、骨体両側面の後方への発達も良好であるが、骨体上部には扁平性は認められない。

計測値は、骨体中央矢状径が30mm（右、左）、横径は26mm（右、左）で、骨体中央断面示数は

115.38（右、左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて良好である。骨体中央周は89mm（右）、90mm（左）で、骨体は大きい。また、上骨体断面示数は93.10（右）となり、骨体上部には扁平性は認められない。

② 肩 骨

左右とも骨体が残存していたが、右側の方が残存状態は良い。長さはやや長そうで、ヒラメ筋線の発達は悪い。骨体の断面形は右側はヘリチカのV型を、左側はII型を呈している。

計測値は、中央最大径が30mm（右）、29mm（左）、中央横径は21mm（右）、20mm（左）で、中央断面示数は70.00（右）、68.97（左）となり、古墳人としては左側骨体はやや扁平である。骨体周は81mm（右）、79mm（左）、最小周は72mm（右）で骨体はやや細い。

③ 脱 骨

右側が残存していた。径は大きく、稜も良く発達している。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓が強く隆起し、四肢骨の径が大きいことやその形状から男性と推定した。年令は、三主縫合の内板がすべて癒合していることから熟年と考えられる。

『貝輪着装について』

6号墳2号人骨（男性）の左側上腕遠位部から前腕にかけて、8枚の貝輪が着装されていた。人骨の残存状態からこの貝輪は2号被葬者（男性）が、骨になってから着装されたものではなく、おそらく生前から着装していたものと考えられる。この貝輪の内径は最も狭いもので、約5cmほどしかないことから考えて、生前は左側前腕の運動がかなり制限されていたと予想されるが、2号人骨の前腕の左右には著しい差が認められない。詳しく観察すれば、左側の方がわずかに細いが、この程度の差は健全な場合でも認められる。ところが、この2号被葬者（男性）よりも以前に葬られた1号被葬者（女性）の前腕には左右で著しい差が認められるのである。左側桡骨はほとんど復元できなかったが、左側尺骨は右側に比較して著しく細く、その差は顕著である。これらのことから、この貝輪は本来は1号被葬者（女性）が生前着装していたもので、その死去後に、2号被葬者（男性）が着装し、それほど長い時間が経過しないうちに死亡し、貝輪を着装したまま、葬られたものと考えられる。すなわち、2号被葬者が着装していた貝輪は本来は1号被葬者が生前使用していたものと考えられるのである。

『7号墳』

7号墳1号人骨（女性、壮年末）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。前頭崎は膨隆している。外後頭隆起の状態は不明であるが、乳様突起は小さい。外耳道は両側とも観察できたが、右側の後壁には骨腫が認められる。縫合は、三主縫合のうち矢状縫合とラムダ縫合の内板は開離している。冠状縫合はその左側半の大部分はまだ開離しているが、右側半は密合閉鎖しており、外板は三主縫合の大部分が開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が168mm、頭蓋最大幅は141mm、バジオン・ブレグマ高は133mmである。頭蓋長幅示数は83.93、頭蓋長高示数は79.17、頭蓋幅高示数は94.33となり、頭型は brachy-, hypsi-, metriokran (短、高、中頭) に属している。また頭蓋水平周は495mm、横弧長は300mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓の隆起は弱い。鼻骨の隆起は強く、鼻根部は狭い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が99mm、頬骨弓幅は134mm、中顎幅は92mm、顎高は(106mm)、上顎高は58mmで、顎示数は(79.10)(K)、(115.22)(V)、上顎示数は43.28(K)、63.04(V)となり、顎面には著しい低・広顎傾向が認められる。

眼窩幅は41mm(右、左)、眼窩高は31mm(右、左)で、眼窩示数は75.61(右、左)となり、両側とも chamaekonch (低眼窩) に属している。

鼻幅は24mm、鼻高は43mmで、鼻示数は55.81となり、chamaerrhin (低鼻) に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が17mm、鼻根横弧長は20mm、鼻根弯曲示数は85.00となり、鼻骨の鼻骨間縫合への隆起は強い。両眼窓幅は97mmで、眼窓間示数は17.53となり、鼻根部は狭い。前頭突起水平傾斜角は82度となり、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は132度、鼻根陥凹示数は24.00である。

側面角は、全側面角が79度、鼻側面角が82度、歯槽側面角は70度で、歯槽性突顎の傾向は弱い。

下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

●	●	●	●	P1	C	I2	I1		I1	I2	C	●	●	●	●	●	〔●：歯槽閉鎖〕
●	●	M1	P2	P1	C	I2	I1		I1	I2	C	P1	P2	M1	●	●	

咬耗度は Broca の2度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

① 上腕骨

左側骨体が残存していたが、計測はできない。観察したところでは径は小さい。

② 様骨

左右とも遠位部が残存していた。諸径は小さい。

③ 尺骨

尺骨は右側のみ残存していた。骨体は細い。

(2) 下肢骨

① 骰骨

左右とも残存していたが、右側の方が保存状態は良好である。大坐骨切痕の角度は大きく、耳状面前溝はやや深い。

② 大腿骨

右側は大転子と外側頭を欠いているが、最大長の計測は可能で、左側は遠位部を欠損している。粗線の発達は良好で、骨体両側面もやや後方へ発達している。

計測値は、最大長が371mm（右）、骨体中央周は78mm（右）である。骨体中央矢状径は25mm（右）、横径は24mm（右）、22mm（左）で、骨体中央断面示数は104.14（右）となり、粗線や骨体両面の後方への発達はやや良好である。また、上骨体断面示数は82.14（右）、77.78（左）となり、骨体上部には扁平性は認められない。

③ 膝骨

右側は外側頭を、左側は近位部を欠損しているが、右側はかろうじて最大長を計測することができた。ヒラメ筋線の発達はやや良好で、骨体の断面形は両側ともヘリチカのII型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が302mm（右）、骨体周は70mm（右）、68mm（左）、最小周は63mm（右）、62mm（左）で、骨体は細い。中央最大径は23mm（右）、24mm（左）、中央横径は20mm（右）、19mm（左）で、中央断面示数は86.96（右）、79.17（左）となり、骨体には扁平性は全く認められない。

4. 推定身長値

右側大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ145.00cm（Pearson）、144.15cm（藤井）で、右側脛骨からの推定身長値は145.80cm（Pearson）、144.31cm（藤井）となり、いずれも低身長である。

5. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱く、大坐骨切痕の角度が大きいことから、女性と推定した。年令は、三主縫合のうち矢状縫合とラムダ縫合および冠状縫合の左側半の大部分はまだ開離しているが、右側半がすでに癒合閉鎖していることから壮年の終り頃と考えられる。

7号墳2号人骨（女性、壮年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨の大部分を欠損しているが、その他は保存良好である。前頭鱗は膨隆しており、乳様突起も小さい。外耳道は両側とも観察できたが、両側とも後壁と前壁に著明な骨腫が認められる。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の観察ができたが、両縫合とも内外両板が開離している。

頭頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が（164mm）、頭蓋最大幅は141mm、バジョン・ブレグマ高は134mmである。頭蓋長幅示数は（85.98）、頭蓋長高示数は（81.71）、頭蓋幅高示数は95.04となり、頭型は hyperbrachy-, hypsi-, metriokran（過短、高、中頭）に属している。また頭蓋水平周は（488mm）、横弧長は307mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓の隆起は弱い。鼻骨の隆起はそれほど強くなく、鼻根部は狭い。顔面頭蓋の計測値は、顎長が90mm、頬骨弓幅は133mm、中顎幅は88mm、顎高は102mm、上顎高は57mmで、顎示数は76.69（K）、115.91（V）、上顎示数は42.86（K）、64.77（V）となり、顔面には著しい低・広顎傾向が認められる。

眼窩幅は41mm（右、左）、眼窩高は32mm（右、左）で、眼窓示数は78.05（右、左）となり、両側とも mesokonch（中眼窓）に属している。

鼻幅は25mm、鼻高は46mmで、鼻示数は54.35となり、chamaerrhin（低鼻）に属している。鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が14mm、鼻根横弧長は17mm、鼻根弯曲示数は82.35となり、鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起はやや強い。両眼窓幅は91mmで、眼窓間示数は15.38となり、鼻根部は狭い。前頭突起水平傾斜角は106度となり、前頭突起の向きはどちらかといえば矢状方向である。鼻根角は149度、鼻根陥凹示数は16.67である。

側面角は、全側面角が81度、鼻側面角が83度、歯槽側面角は60度で、歯槽性突顎の傾向が強い。下頸枝幅広く、下頸切痕は浅い。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

◎ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁ I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ ◎	〔◎：未萌出〕
◎ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁ I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ ◎	

咬耗度は Broca の 1 度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は鉄状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

① 上腕骨

両側とも骨体が残存していた。長さは短く、三角筋粗面の発達はやや良好である。

計測値は、中央最大径が 21mm（右）、中央最小径は 16mm（右）で、骨体断面示数は 76.19（右）となり、骨体の扁平性は弱い。骨体最小周は 52mm（右、左）、中央周は 60mm（右）で、最小周は小さいが中央周はやや大きく、三角筋粗面の発達が良好なことがうかがえる。

② 槌骨

右側はほぼ完全であるが、左側は近位部を欠損している。長さは短く、骨体は細い。

③ 尺骨

左右とも骨体が残存していたが、左側の方が残存状態は良い。骨間縁の発達は良好である。

(2) 下肢骨

① 骰骨

両側とも坐骨を欠損している。大坐骨切痕の角度は大きく、耳状面前溝は深い。

② 大腿骨

右側は大転子と内側頸の一部を欠損しているが、保存状態は良好であり、左側は遠位部の大部分を欠損している。長さは短く、粗線の発達も悪いが、骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が 367mm（右）、骨体中央周は 70mm（右、左）で、長厚示数は 19.34（右）である。骨体中央矢状径は 22mm（右、左）、横径は 22mm（右、左）で、骨体中央断面示数は 100.00（右、左）となり、粗線や骨体両面の後方への発達は悪い。また、上骨体断面示数は 74.07（右、左）となり、骨体上部は扁平である。

③ 股骨

両側とも近位部を欠損している。前縁は S 字状のカーブを描いており、ヒラメ筋線の発達は悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカの V 型を呈している。

計測値は、中央最大径が 25mm（右）、24mm（左）、中央横径は 19mm（右、左）で、中央断面示数は 76.00（右）、79.17（左）となり、骨体には扁平性は全く認められない。骨体周は 69mm（右）、67mm（左）、最小周は 64mm（右）、63mm（左）で、骨体は細い。

4. 推定身長値

右側大腿骨最大長からPearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ144.23cm (Pearson)、143.25cm (藤井)、右側桡骨から算出すると、146.75cm (Pearson)、144.28cm (藤井) となり、いずれも低身長である。

5. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が弱く、大坐骨切痕の角度が大きいことから、女性と推定した。年令は、三主縫合のうち観察できた冠状縫合と矢状縫合の内外両板がともに開離していることから、壮年と考えられる。

『原村上古墳人骨群にみられた特殊所見』

本人骨群には外耳道骨腫が頻繁に認められた。その数は表4のとおりで、7体に存在した。また、6号墳1号人骨の両側の頬骨は非常に稀な分裂頬骨であった。

表4 外耳道骨腫

人骨番号	性別	年令	位置
2号墳1号人骨	男性	壮年	右側
2号墳3号人骨	女性	壮年	右側
5号墳1号人骨	女性	壮年	左側
6号墳1号人骨	女性	壮年	両側
6号墳2号人骨	男性	老年	右側
7号墳1号人骨	女性	壮年末	右側
7号墳2号人骨	女性	壮年	両側

要 約

宮崎県北諸県郡高崎町大字繩瀬字原村上にある地下式横穴から出土した古墳時代人骨に関して、人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. 今回報告した人骨は、昭和45年、46年、49年、57年および61年に出土した合計13体の成人骨である。
2. この人骨群はすべて地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨である。
3. 男性4体のうち、頭蓋長幅示数が算出できたのは2体のみで、1例は長頭に近い中頭で、もう1例は短頭型である。両者の平均値は79.40となりこれは中頭型に属している。また、バジオン・ブレグマ高の平均値は131.00mmで、頭の高さは低い。

4. 男性4体のうち、顔面の特徴を知ることができたのは3体で、このうちの2体の顔面には強い低・広顔傾向が認められたが、1例は高顔傾向を示していた。また、前頭突起の向きはいずれも矢状方向を向いている。歯槽側面角は3体が計測できたが、低・広顔傾向を示すものには歯槽性突顎の傾向が認められ、高顔傾向を示す頭蓋には歯槽性突顎の傾向は認められない。
5. 男性の四肢骨は、上腕骨は径があまり大きくないが、大腿骨体はやや大きく、骨体両側面はやや後方へ発達しており、骨体上部が扁平なものも認められた。また、脛骨はやや長く、骨体は著しく扁平である。
6. 左側脛骨から算出した男性の推定身長値は161.59cm (Pearson) となり、高身長である。
7. 女性の頭蓋長幅示数は2例算出することができ、その他に推定値を算出することができたものが3例あった。この5例のうち、短頭型に属するものが3例、中頭型と長頭型がそれぞれ1例ずつで、この5例の平均値は79.61となり、この値は短頭に近い中頭型を示している。また、バジオン・ブレグマ高の平均値は131.00mmで、頭の高さは低い。
8. 顔面頭蓋の特徴を明らかにできた女性は5体あった。このうちの4体は低・広顔傾向を示していたが、残りの1体はやや高顔傾向を示していた。なお、この例は、同じように高顔傾向を示していた男性と同じ墳墓に葬られていた。また、前頭突起の向きは矢状方向である。歯槽側面角は5体の計測が可能であり、歯槽性突顎の傾向が認められる。
9. 女性上腕骨は細い。大腿骨体も著しく細く、粗線の発達も悪く、骨体の断面形は横広ろの梢円形で、骨体上部は扁平である。脛骨も細いが、ヒラメ筋線の発達は良好で、なかには骨体が男性同様、扁平なものも認められた。
10. 右側大腿骨から算出した女性の推定身長値は144.42cm (Pearson) で、低身長である。
11. 外耳道骨腫が7体に認められた。
12. 分裂頸骨が認められた（6号墳1号人骨、女性）。
13. 6号墳2号人骨の左側前腕部に貝輪が着装してあったが、人骨の形態的特徴から、これは本来1号被葬者（6号墳1号人骨）が生前つけていたもので、1号被葬者の死後、2号被葬者が着装したものと考えられる。
14. 以上のように、原村上地下式横穴墓から出土した人骨には、宮崎県の山間部の古墳人と同じように「低・広顔傾向」が認められた。しかし、男女1体づつ高顔傾向を示すものが存在していたが、この2例は同じ墳墓に葬られており、しかも貝輪を持った人骨である。両人骨はよく似た形態を示しており、貝輪が継承されていた形跡があることを考えあわせると、この2体の人骨は原村上人骨群のなかでは特異な存在といえる。

参考文献

1. 岩永哲夫、1976：高崎町原村上地下式横穴調査報告。宮崎県文化財調査報告書、第18集：46—55。

2. 日高正晴、1977：横谷原村地下式墳調査（A・B号）。宮崎県文化財調査報告書、第19集：
59—71。

表5 腦頸蓋計測値 (mm)

	原村上 2-1 男 性	原村上 4-1 男 性	原村上 6-2 男 性	原 村 上	
				平 均	
				n	M
1.	頭蓋最大長	—	178	176	2 177.00
8.	頭蓋最大幅	148	137	144	3 143.00
17.	バジオン・ブレグマ高	129	133	131	3 131.00
8 / 1	頭蓋長幅示数	—	76.97	81.82	2 79.40
17 / 1	頭蓋長高示数	—	74.72	74.43	2 74.58
17 / 8	頭蓋幅高示数	87.16	97.08	90.97	3 91.74
	頭蓋モズルス	—	149.33	150.33	2 149.83
5.	頭蓋底長	101	99	103	3 101.00
9.	最小前頭幅	95	95	94	3 94.67
10.	最大前頭幅	126	112	115	3 117.67
11.	両耳幅	131	126	130	3 129.00
12.	最大後頭幅	—	—	113	1 113
7.	大後頭孔長	—	—	—	—
16.	大後頭孔幅	32	—	29	2 30.50
16 / 7	大後頭示数	—	—	—	—
23.	頭蓋水平周	—	506	517	2 155.50
24.	横弧長	320	297	310	3 309.00
25.	正中矢状弧長	—	—	—	—
26.	正中矢状前頭弧長	135	120	113	3 122.67
27.	正中矢状頭頂弧長	—	131	120	2 125.50
28.	正中矢状後頭弧長	—	—	—	—
29.	正中矢状前頭弦長	118	106	101	3 108.33
30.	正中矢状頭頂弦長	—	119	110	2 114.50
31.	正中矢状後頭弦長	—	—	—	—
29 / 26	矢状前頭示数	87.41	88.33	89.38	3 88.37
30 / 27	矢状頭頂示数	—	90.84	91.67	2 91.26
31 / 28	矢状後頭示数	—	—	—	—
	Vertex Rad.	122	119	121	3 120.67
	Nasion Rad.	96	91	95	3 94.00
	Subsp. Rad.	89	87	100	3 92.00
	Prosth. Rad.	94	—	106	2 100.00

表6 脳頭蓋計測値 (mm)

	原村上		原村上		原村上		原村上		原村上		原村上		原村上		
	46-1		4-2		5-1		6-1		7-1		7-2		平均		
	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	n	M	σ
1.	頭蓋最大長	179	—	186	172	168	(164)	4	176.25	7.93					
8.	頭蓋地大幅	[130]	—	[140]	138	141	141	3	140.00	1.73					
17.	バジオン・ブレグマ高	125	126	133	135	133	134	6	131.00	4.34					
8 / 1	頭蓋長幅示数	[72.63]	—	(75.27)	80.23	83.93	(85.98)	2	82.08						
17 / 1	頭蓋長高示数	69.83	—	71.51	78.49	79.17	(81.71)	4	74.75	4.77					
17 / 8	頭蓋幅高示数	(96.15)	—	(95.00)	97.83	94.33	95.04	3	95.73						
	頭蓋モズルス	(144.67)	—	(153.00)	148.33	147.33	(146.33)	2	147.83						
5.	頭蓋底長	96	—	101	99	97	94	5	97.40	2.70					
9.	最小前頭幅	89	—	—	92	92	91	4	91.00	1.41					
10.	最大前頭幅	—	—	—	119	115	115	3	116.33						
11.	両耳幅	—	—	—	125	125	127	3	125.67						
12.	最大後頭幅	—	—	—	118	—	—	1	118						
7.	大後頭孔長	34	—	32	—	—	—	2	33.00						
16.	大後頭孔幅	26	—	26	28	—	—	3	26.67						
16 / 7	大後頭示数	76.47	—	81.25	—	—	—	2	78.86						
23.	頭蓋水平間	—	—	—	503	495	(488)	2	499.00						
24.	横弧長	—	—	—	307	300	307	3	304.67						
25.	正中矢状頭長	362	—	387	—	—	—	2	374.50						
26.	正中矢状側頭長	122	—	138	125	122	127	5	126.80	6.61					
27.	正中矢状頸頭長	121	120	140	122	120	—	5	124.60	8.65					
28.	正中矢状顎頭長	119	—	109	—	—	—	2	114.00						
29.	正中矢状頸頭長	110	—	116	110	107	110	5	110.60	3.29					
30.	正中矢状顎頭長	110	109	124	110	107	—	5	112.00	6.82					
31.	正中矢状頸頭長	94	—	93	—	—	—	2	93.50						
29 / 26	矢状前頭示数	90.16	—	84.06	88.00	87.70	86.51	5	87.31	2.23					
30 / 27	矢状頭示数	90.91	—	88.57	90.16	89.17	—	4	89.70	0.98					
31 / 28	矢状顎頭示数	78.99	—	85.32	—	—	—	2	82.16						
	Vertex Rad.	—	—	—	118	117	121	3	118.67						
	Nasion Rad.	—	—	—	93	88	86	3	89.00						
	Subsp. Rad.	—	—	—	97	93	85	3	91.67						
	Prosth. Rad.	—	—	—	105	101	91	3	99.00						

表7 頭面頸蓋計測値(ミ、度)

	原村上 2-1 男 性	原村上 4-1 男 性	原村上 6-2 男 性	原村上 平均 男 性	
				n	M
40. 顎長	95	—	106	2	100.50
41. 側顎長	75	69(右)	73	2	74.00
42. 下顎長	—	—	114	1	114
43. 上顎幅	107	109	111	3	109.00
45. 鼻骨弓幅	[138]	—	140	1	140
46. 中顎幅	103	[100]	110	2	106.50
47. 顎高	117	—	122	2	119.50
48. 上顎高	64	(57)	73	2	68.50
47 / 45 顎示数(K)	[84.78]	—	87.14	1	87.14
48 / 45 上顎示数(K)	[46.38]	—	52.14	1	52.14
47 / 46 顎示数(V)	113.59	—	110.91	2	112.25
48 / 46 上顎示数(V)	62.14	(57.00)	66.36	2	64.25
顎面モザルス	—	—	122.67	1	122.67
50. 前眼窩間幅	19	21	15	3	18.33
44. 両眼窩幅	97	—	105	2	101.00
50 / 44 眼窩間示数	19.59	—	14.29	2	16.94
51. 眼窩幅(右)	42	42	47	3	43.67
(左)	42	—	47	2	44.50
52. 眼窩高(右)	33	30	33	3	32.00
(左)	33	—	35	2	34.00
52 / 51 眼窩示数(右)	78.57	71.43	70.21	3	73.40
(左)	78.57	—	74.47	2	76.52
54. 鼻幅	24	29	27	3	26.67
55. 鼻高	50	44	54	3	49.33
54 / 55 鼻示数	48.00	65.91	50.00	3	54.64
55 (1). 梨状口高	—	—	33	1	33
56. 鼻骨長	—	—	23	1	23
57. 鼻骨最小幅	10	—	9	2	9.50
57 (1). 鼻骨最大幅	—	—	—	—	—
60. 上顎歯槽長	—	—	57	1	57
61. 上顎歯槽幅	64	—	—	1	64
62. 口蓋長	—	—	49	1	49
63. 口蓋幅	—	—	—	—	—
64. 口蓋高	—	—	—	—	—
61 / 60 上顎歯槽示数	—	—	—	—	—
63 / 62 口蓋示数	—	—	—	—	—
64 / 63 口蓋高示数	—	—	—	—	—
72. 全側面角	90	87	83	3	86.67
73. 鼻側面角	93	93	84	3	90.00
74. 歯槽側面角	67	64	80	3	70.33

表 8 頭面頭蓋計測値 (mm, 度)

	原村上	原村上	原村上	原村上	原村上	原村上	原村上
	46-1 女性	5-1 女性	5-2 女性	6-1 女性	7-1 女性	7-2 女性	平均 女性
	n	M	σ				
40. 頭長	99	102	-	98	99	90	5 97.60 4.51
41. 側頭長	74	75	-	71	70	69	5 71.80 2.59
42. 下頷長	-	-	-	104	104	101	3 103.00
43. 上顎幅	100	-	-	106	101	100	4 101.75 2.87
45. 瞬門弓幅	[130]	[136]	-	132	134	133	3 133.00
46. 中顎幅	[100]	[102]	[86]	104	92	88	3 94.67
47. 頭高	104	-	-	117	(106)	102	3 107.67
48. 上顎高	64	66	-	70	58	57	5 63.00 5.48
47/45 上顎示数 (K)	[80.00]	-	-	88.64	(79.10)	76.69	2 82.67
48/45 上顎示数 (K)	[49.23]	[48.53]	-	53.03	43.28	42.86	3 46.39
47/46 頭示数 (V)	[104.00]	-	-	112.50	(115.22)	115.91	2 114.21
48/46 上顎示数 (V)	[64.00]	[64.71]	-	67.31	63.04	64.77	3 65.04
顎面モルス	[111.00]	-	-	115.67	(113.00)	108.33	2 112.00
50. 頭面窓間隔	19	16	17	21	17	14	6 17.33 2.43
44. 両側窓幅	95	-	-	100	97	91	4 95.75 3.78
50/44 眼窓間隔示数	20.00	-	-	21.00	17.53	15.38	4 18.48 2.52
51. 眼窓幅 (右)	40	-	-	43	41	41	4 41.25 1.26
(左)	40	44	39	43	41	41	6 41.33 1.87
52. 眼窓高 (右)	32	-	-	32	31	32	4 31.75 0.50
(左)	32	36	34	33	31	32	6 33.00 1.79
52/51 眼窓示数 (右)	80.00	-	-	74.42	75.61	78.05	4 77.02 2.50
(左)	80.00	81.82	87.18	76.74	75.61	78.05	6 79.90 4.21
54. 鼻幅	28	28	-	29	24	25	5 26.80 2.17
55. 鼻高	46	51	-	52	43	46	5 47.60 3.78
54/55 鼻示数	60.37	64.00	-	55.77	55.81	54.35	5 56.34 2.61
56/1. 鼻出口高	-	-	-	30	29	28	3 29.00
56. 鼻骨長	-	-	-	25	15	20	3 20.00
57. 鼻骨最小幅	9	8	11	10	9	7	6 9.00 1.41
57/1. 鼻骨最大幅	-	-	-	20	17	17	3 18.00
60. 上顎歛幅	-	-	-	54	55	49	3 52.67
61. 上顎側歛幅	-	-	-	63	60	61	3 61.33
62. 口蓋長	-	-	-	48	47	41	3 45.33
63. 口蓋幅	-	-	-	43	-	39	2 41.00
64. 口蓋高	-	-	-	16	-	12	2 14.00
61/60 上顎歛幅示数	-	-	-	116.67	109.09	124.49	3 115.75
63/62 口蓋示数	-	-	-	89.58	-	96.12	2 92.35
64/63 口蓋高示数	-	-	-	37.21	-	30.77	2 33.99
72. 全顎面角	81	80	-	79	79	81	5 80.00 1.00
73. 鼻側面角	89	86	-	83	82	83	5 84.60 2.88
74. 鼻摺側面角	52	61	-	68	70	60	5 62.20 7.16

※ [] = 推定値

表9 鼻根部計測値 (mm、度)

	原村上	原村上	原村上	原村上		
				2-1	4-1	
				男性	男性	
50.	前頭突起幅	19	21	15	3	18.33
	鼻根部弧長	22	-	20	2	21.00
	鼻根部曲示数	86.36	-	75.00	2	80.68
57.	鼻骨最小幅	19	-	9	1	14.00
44.	両頬窓幅	97	-	105	2	101.00
50/44	眼窓間示数	19.59	-	14.29	2	16.94
	前頭突起上縦(右)	11	10	8	3	9.67
	(左)	10	10	8	3	9.33
	前頭突起水平傾斜角	65	89	63	3	72.33
	G-N投影距離	2	3	1	3	2.00
	鼻根角	-	-	143	1	143
	G-R距離	-	-	36	1	36
	垂線高	-	-	5	1	5
	鼻根部凹示数	-	-	13.89	1	13.89

表10 鼻根部計測値 (mm、度)

	原村上	原村上	原村上	原村上	原村上	原村上	
						45-1	5-1
						女性	女性
50.	前頭突起幅	19	15	17	21	17	14
	鼻根部弧長	20	19	20	22	20	17
	鼻根部曲示数	95.00	84.21	85.00	95.45	85.00	82.35
57.	鼻骨最小幅	9	8	11	10	9	7
44.	両頬窓幅	95	-	-	100	97	91
50/44	眼窓間示数	20.00	-	-	21.00	17.53	15.38
	前頭突起上縦(右)	10	11	7	9	10	11
	(左)	11	10	7	9	10	9
	前頭突起水平傾斜角	-	-	-	103	82	106
	G-N投影距離	-	-	-	1	2	2
	鼻根角	-	-	-	149	132	149
	G-R距離	-	-	-	35	25	30
	垂線高	-	-	-	4	6	5
	鼻根部凹示数	-	-	-	11.43	24.00	16.67
						n	M
							σ

表11 下顎骨計測値 (mm、度)

		原村上	原村上	原村上	
		2-1	6-2	平均	
		男性	男性	男性	
				n	M
65.	下顎関節突起幅	-	136	1	136
65(1).	下顎筋突起幅	-	113	1	113
66.	下顎角幅	-	-	-	-
67.	前下顎幅	47	50	2	48.50
68.	下顎長	-	-	-	-
68(1).	下顎長	-	116	1	116
69.	オトガイ高	-	33	1	33
69(1).	下顎体高(右)	32	35	2	33.50
	(左)	31	-	1	31
69(2).	下顎体高(右)	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-
70.	枝 高(右)	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-
70(1).	前枝高(右)	-	65	1	65
	(左)	-	65	1	65
70(2).	最小枝高(右)	-	53	1	53
	(左)	-	54	1	54
70(3).	下顎切痕高(右)	-	12	1	12
	(左)	-	13	1	13
71.	枝 幅(右)	-	34	1	34
	(左)	-	-	-	-
71a.	最小枝幅(右)	-	34	1	34
	(左)	-	-	-	-
71(1).	下顎切痕幅(右)	-	34	1	34
	(左)	-	36	1	36
79.	下顎枝角(右)	-	131	1	131
	(左)	-	134	1	134
68(1)/65	幅長示数	-	85.29	1	85.29
69(2)/69	下顎高示数(右)	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-
71/70	下顎枝示数(右)	-	-	-	-
	(左)	-	-	-	-
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	-	64.15	1	64.15
	(左)	-	-	-	-
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	-	35.29	1	35.29
	(左)	-	36.11	1	36.11

表12 下顎骨計測値 (mm、度)

	原村上 46-1 女性	原村上 5-1 女性	原村上 5-2 女性	原村上 6-1 女性	原村上 7-1 女性	原村上 7-2 女性	原村上 平均 女性			
								n	M	σ
65.	下頸關節突起幅	-	-	-	-	-	-	-	-	-
65(1).	下頸筋突起幅	-	-	-	-	-	99	1	99	-
66.	下頸角幅	-	-	-	-	-	-	-	-	-
67.	前下頸幅	42	-	44	47	49	48	5	46.00	2.92
68.	下頸長	-	-	-	-	-	-	-	-	-
68(1).	下頸長	-	-	-	110	-	-	1	110	-
69.	オトガイ高	32	-	-	33	33	30	4	32.0	1.41
69(1).	下頸体高(右)	31	-	29	-	-	28	3	29.33	-
	(左)	-	-	28	35	34	29	4	31.50	3.51
69(2).	下頸体高(右)	-	-	24	-	-	26	2	25.00	-
	(左)	-	25	25	29	-	26	4	26.25	1.89
70.	枝 高(右)	-	-	-	60	-	55	2	57.50	-
	(左)	-	-	-	-	62	-	1	62	-
70(1).	前 枝 高(右)	-	-	-	-	-	57	1	57	-
	(左)	55	-	-	-	61	58	3	58.00	-
70(2).	最小枝高(右)	-	-	-	54	-	49	2	51.50	-
	(左)	45	-	-	-	50	-	2	47.50	-
70(3).	下頸切痕高(右)	-	-	-	-	-	12	1	12	-
	(左)	13	-	-	-	12	-	2	12.50	-
71.	枝 幅(右)	-	35	-	36	-	35	3	35.33	-
	(左)	-	-	-	-	36	-	1	36	-
71a.	最小枝幅(右)	-	35	-	36	-	34	3	35.00	-
	(左)	-	-	-	-	36	-	1	36	-
71(1).	下頸切痕幅(右)	-	-	-	-	-	34	1	34	-
	(左)	38	-	-	-	41	-	2	39.50	-
79.	下頸枝角(右)	-	-	-	125	-	121	2	123.00	-
	(左)	137	-	-	-	119	-	2	128.00	-
69(2)/69	下頸高示数(右)	-	-	-	-	-	86.67	1	86.67	-
	(左)	-	-	-	-	87.88	-	2	87.28	-
71/70	下頸枝示数(右)	-	-	-	60.00	-	63.64	2	61.82	-
	(左)	-	-	-	-	58.06	-	1	58.06	-
71a/70(2)	下頸枝示数(右)	-	-	-	66.67	-	69.39	2	68.03	-
	(左)	-	-	-	-	72.00	-	1	72.00	-
70(3)/71(1)	下頸切痕示数(右)	-	-	-	-	-	35.29	1	35.29	-
	(左)	34.21	-	-	-	29.27	-	2	31.74	-

表13 頸骨計測値 (mm)

	原村上 6 - 2 男 性	原村上 5 - 2 女 性	原村上 6 - 1 女 性	原村上 7 - 2 女 性	原村上	
					平均	
					n	M
2.	骨体彎曲高 (右) (左)	- -	- -	5 -	6 -	2 -
2a.	骨体彎曲高 (右) (左)	- -	- -	24 -	24 -	2 -
3.	骨体彎曲弦長 (右) (左)	- -	- -	81 -	77 -	2 -
4.	中央垂直径 (右) (左)	8 9	10 10	8 -	9 9	3 2
5.	中央矢状径 (右) (左)	10 9	7 8	11 -	9 12	3 2
6.	中央周 (右) (左)	31 30	30 30	32 -	33 32	3 2
4/5	鎖骨断面示数 (右) (左)	80.00 100.00	142.86 125.00	72.73 -	100.00 75.00	3 2
						105.20 100.00

表14 上腕骨計測値 (mm)

	原村上 2 - 1 男 性	原村上 4 - 1 男 性	原村上 6 - 1 男 性	原村上	
				平均	
				n	M
5.	中央最大径 (右) (左)	21 -	- 21	21 -	2 1
6.	中央最小径 (右) (左)	15 -	- 16	15 -	2 1
7.	骨体最小周 (右) (左)	- -	- 60	59 -	1 1
7 (a).	中央周 (右) (左)	58 -	- 63	62 -	2 1
12.	小頭幅 (右) (左)	- -	- -	- 17	- 1
12 (b).	小頭幅 (右) (左)	- -	- -	- 22	- 1
6/5	骨体断面示数 (右) (左)	71.43 -	- 76.19	71.43 -	2 1
					71.43 76.19

表15 上腕骨計測値 (mm)

	原村上 46-1	原村上 5-2	原村上 6-1	原村上 7-1	原村上 7-2	原村上 平均			
							女性	n	M
							女性		σ
5.	中央最大径(右) (左)	21 21	17 —	18 —	— —	21 —	4 2	19.25 19.00	2.06
6.	中央最小径(右) (左)	15 14	13 —	14 —	— —	16 —	4 2	14.50 14.00	1.29
7.	骨体最小幅(右) (左)	— —	50 51	— 52	— 52	52 52	2 3	51.00 51.67	
7(a).	中央周(右) (左)	60 59	52 —	— 52	— —	60 —	3 2	57.33 55.50	
12.	小頭幅(右) (左)	— —	— —	— —	— —	— —		— —	
12.	小頭幅(右) (左)	— —	— —	— —	— —	— —		— —	
6/5	骨体断面示数(右) (左)	71.43 66.67	76.47 —	77.78 82.35	— —	76.19 —	4 2	75.47 74.51	2.76

表16 槓骨計測値 (mm)

	原村上 6-2	原村上 5-2	原村上 6-1	原村上 7-1	原村上 7-1	原村上 平均			
							男性	n	M
							女性		σ
1.	最大長(右) (左)	— —	— —	— —	— —	196 —	1	196 —	
3.	最小周(右) (左)	— —	34 —	35 —	35 —	34 36	4 1	34.50 36	0.58
4.	骨体横径(右) (左)	16 15	14 —	16 —	— —	14 14	3 1	14.67 14	
4a.	骨体中央横径(右) (左)	15 14	14 —	15 —	15 —	13 13	4 1	14.25 13	0.96
4(2).	頸部径(右) (左)	10 10	10 —	— —	— —	— —	1	10 —	
5.	骨体矢状径(右) (左)	11 10	9 —	10 —	— —	10 10	3 1	9.67 10	
5a.	骨体中央矢状径(右) (左)	12 11	9 —	9 —	10 —	10 10	4 1	9.50 10	0.58
5(2).	頸矢状径(右) (左)	12 12	12 —	— —	— —	— —	1	12 —	
5(4).	頸周(右) (左)	36 37	36 —	— —	— —	— —	1	36 —	
5(5).	骨体中央周(右) (左)	42 40	36 —	40 —	40 —	37 37	4 1	38.25 37	2.06
5(6).	骨下端周(右) (左)	31 —	— —	— —	26 27	27 —	2 1	26.50 27	
5/4	骨体断面示数(右) (左)	68.75 66.67	64.29 —	62.50 —	— —	71.43 71.43	3 1	66.07 71.43	
5a/4a	中央断面示数(右) (左)	80.00 78.57	64.29 —	60.00 —	66.67 —	76.92 76.92	4 1	66.97 76.92	7.19

表17 尺骨計測値 (mm)

	原村上 6-2	原村上 5-2	原村上 6-1	原村上 7-1	原村上 7-8	原村上	
						男 性	女 性
						n	M
2.	橈橈長 (右)	230	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	189	1 189
2(1).	肘頭尺骨頭長 (右)	257	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—
3.	最小周 (右)	34	—	—	34	34	2 34.00
	(左)	31	—	—	—	34	1 34
6.	肘頭幅 (右)	24	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—
8.	肘頭高 (右)	16	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—
11.	尺骨矢状径 (右)	13	11	10	—	—	2 10.50
	(左)	—	—	8	—	10	2 9.00
12.	尺骨横径 (右)	17	13	17	—	—	2 15.00
	(左)	—	—	14	—	15	2 14.50
S	中央最小径 (右)	12	10	9	11	—	3 10.00
	(左)	—	—	7	—	10	2 8.50
L	中央最大径 (右)	17	14	17	—	—	2 15.50
	(左)	—	—	14	—	15	2 14.50
C	中 中 周 (右)	48	40	45	—	—	2 42.50
	(左)	—	—	36	—	41	2 38.50
3/2	長厚示数 (右)	14.78	—	—	—	—	—
	(左)	—	—	—	—	—	—
11/12	骨体断面示数 (右)	76.47	84.62	58.82	—	—	2 71.72
	(左)	—	—	57.14	—	66.67	2 61.91
S/L	中央断面示数 (右)	70.59	71.43	52.94	—	—	2 62.19
	(左)	—	—	50.00	—	66.67	2 58.34

表18 大腿骨計測値 (mm)

	原村上	原村上	原村上	原村上	
				2—1	4—1
				男 性	男 性
				n	M
6.	骨体中央矢状径 (右)	—	—	30	1 30
	(左)	—	29	30	2 29.50
7.	骨体中央横径 (右)	—	—	26	1 26
	(左)	—	27	26	2 26.50
8.	骨体中央周 (右)	—	—	89	1 89
	(左)	—	88	90	2 89.00
9.	骨体上横径 (右)	—	—	29	1 29
	(左)	—	33	—	1 33
10.	骨体上矢状径 (右)	—	—	27	1 27
	(左)	—	22	—	1 22
15.	頭垂直径 (右)	31	—	—	1 31
	(左)	—	—	—	—
16.	頭矢状径 (右)	23	—	—	1 23
	(左)	—	—	—	—
17.	頭 周 (右)	92	—	—	1 92
	(左)	—	—	—	—
18.	頭垂直径 (右)	44	—	—	1 44
	(左)	—	—	—	—
19.	頭 橫 径 (右)	43	—	—	1 43
	(左)	—	—	—	—
20.	頭 周 (右)	141	—	—	1 141
	(左)	—	—	—	—
6/7	骨体中央断面示数 (右)	—	—	115.38	1 115.38
	(左)	—	107.41	115.38	2 111.40
10/9	上骨体断面示数 (右)	—	—	93.10	1 93.10
	(左)	—	66.67	—	1 66.67

表19 大腿骨計測値 (mm)

	原村上							平均 女性		
	原村上		原村上		原村上		原村上			
	2-2	46-1	5-1	5-2	6-1	7-1	7-2			
	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	n M σ		
1. 最大長(右)	—	—	—	—	—	371	367	2 369.00		
(左)	—	—	—	—	375	—	—	1 375		
2. 自然位全長(右)	—	—	—	—	—	—	362	1 362		
(左)	—	—	—	—	—	—	—	—		
6. 骨体中央矢状径(右)	21	—	23	21	23	25	22	6 22.50 1.52		
(左)	—	26	23	21	26	—	22	5 23.60 2.30		
7. 骨体中央横径(右)	23	—	25	23	23	24	22	6 23.33 1.04		
(左)	—	25	24	23	24	22	22	6 23.33 1.22		
8. 骨体中央周(右)	68	—	76	69	74	78	70	6 72.50 4.09		
(左)	—	81	75	69	78	—	70	5 74.60 5.13		
9. 骨体上横径(右)	—	—	—	27	29	28	27	4 27.75 0.96		
(左)	—	29	28	26	—	27	27	5 27.40 1.14		
10. 骨体上矢状径(右)	—	—	—	19	21	23	20	4 20.75 1.71		
(左)	—	26	20	19	—	21	20	5 21.20 2.78		
15. 頸垂直径(右)	—	—	—	29	—	—	27	2 28.00		
(左)	—	—	—	—	—	—	28	1 28		
16. 頸矢状径(右)	—	—	—	19	—	—	21	2 20.00		
(左)	—	—	—	—	—	—	22	1 22		
17. 頸 周(右)	—	—	—	75	—	—	81	2 78.00		
(左)	—	—	—	—	—	—	82	1 82		
18. 頸垂直徑(右)	—	—	—	—	36	—	40	2 38.00		
(左)	—	—	—	—	—	36	39	2 37.50		
19. 頸 橫 徑(右)	—	—	—	—	37	—	40	2 38.50		
(左)	—	—	—	—	—	35	40	2 37.50		
20. 頸 周(右)	—	—	—	—	116	—	128	2 122.00		
(左)	—	—	—	—	—	114	128	2 121.00		
6/7 骨体中央断面示数(右)	91.30	—	92.00	91.30	100.00	104.17	100.00	6 96.46 5.61		
(左)	—	104.00	95.83	91.30	108.33	—	100.00	5 99.89 6.68		
10/9 上骨体断面示数(右)	—	—	—	70.37	72.41	82.14	74.07	4 74.75 5.15		
(左)	—	89.66	71.43	73.08	—	77.78	74.07	5 77.20 7.34		
8/2 長厚示数(右)	—	—	—	—	—	—	19.34	1 19.34		
(左)	—	—	—	—	—	—	—	—		

表20 脊骨計測値 (mm)

		原村上	原村上	原村上	平均 男 性
		4-1	6-2	平 均	
		男 性	男 性	n M	
1a.	脛骨最大長 (右)	—	—	—	
	(左)	349	—	1 349	
1b.	脛 骨 長 (右)	—	—	—	
	(左)	340	—	1 340	
2.	頸距間距離 (右)	—	—	—	
	(左)	324	—	1 324	
6.	最大下端幅 (右)	—	51	1 51	
	(左)	—	—	—	
7.	下端矢状径 (右)	—	34	1 34	
	(左)	—	—	—	
8.	中央最大径 (右)	32	30	2 31.00	
	(左)	33	29	2 31.00	
8a.	栄養孔位最大径 (右)	35	35	2 35.00	
	(左)	36	—	1 36	
9.	中 央 橫 径 (右)	18	21	2 19.50	
	(左)	19	20	2 19.50	
9a.	栄養孔位横径 (右)	20	23	2 21.50	
	(左)	21	—	1 21	
10.	骨 体 周 (右)	80	81	2 80.50	
	(左)	83	79	2 81.00	
10a.	栄養孔位周 (右)	—	92	1 92	
	(左)	92	—	1 92	
10b.	最 小 周 (右)	71	72	2 71.50	
	(左)	73	—	1 73	
9/8	中央断面示数 (右)	56.25	70.00	2 63.13	
	(左)	57.58	68.97	2 63.28	
9a/8a	栄養孔位断面示数 (右)	57.14	65.71	2 61.43	
	(左)	58.33	—	1 58.33	

表21 脊骨計測値 (mm)

	原村上		原村上		原村上		原村上		原村上		平均 女性
	4-2	5-1	5-2	6-1	7-1	7-2					
	女性	女性	女性	女性	女性	女性	n	M	σ		
1a.	腰骨最大長(右)	—	—	—	—	302	—	1	302		
	(左)	—	—	—	315	—	—	1	315		
1b.	腰骨長(右)	—	—	—	—	293	—	1	293		
	(左)	—	—	—	308	—	—	1	308		
2.	頸椎間距(右)	—	—	—	—	282	—	1	282		
	(左)	—	—	—	294	—	—	1	294		
7.	下端矢状径(右)	—	—	29	—	—	—	1	29		
	(左)	—	—	—	—	—	—	—	—		
8.	中央最大徑(右)	28	—	24	25	23	25	5	25.00	1.87	
	(左)	29	27	24	26	24	24	6	25.67	2.06	
8a.	榮養孔位最大徑(右)	34	—	27	27	27	28	5	28.60	3.05	
	(左)	31	—	27	30	27	28	5	28.60	1.82	
9.	中央横徑(右)	19	—	17	17	20	19	5	18.40	1.34	
	(左)	19	16	17	18	19	19	6	18.00	1.27	
9a.	榮養孔位横徑(右)	23	—	17	19	20	21	5	20.00	2.24	
	(左)	21	—	18	19	19	21	5	19.60	1.34	
10.	骨体周(右)	77	—	65	69	70	68	5	70.00	4.36	
	(左)	76	69	67	72	68	67	6	69.83	3.55	
10a.	榮養孔位周(右)	90	—	71	75	76	78	5	78.00	7.18	
	(左)	83	—	72	80	76	76	5	77.40	4.22	
10b.	最小周(右)	—	—	58	—	63	64	3	61.67		
	(左)	—	—	59	63	62	63	4	61.75	1.89	
9/8	中央断面示数(右)	67.86	—	70.83	68.00	86.96	76.00	5	73.93	8.00	
	(左)	65.52	59.26	70.83	69.23	79.17	79.17	6	70.53	7.79	
9a/8a	榮養孔位断面示数(右)	67.65	—	62.96	70.37	74.07	75.00	5	70.01	4.92	
	(左)	67.74	—	66.67	63.33	70.37	75.00	5	68.62	4.37	

表22 腓骨計測値 (mm)

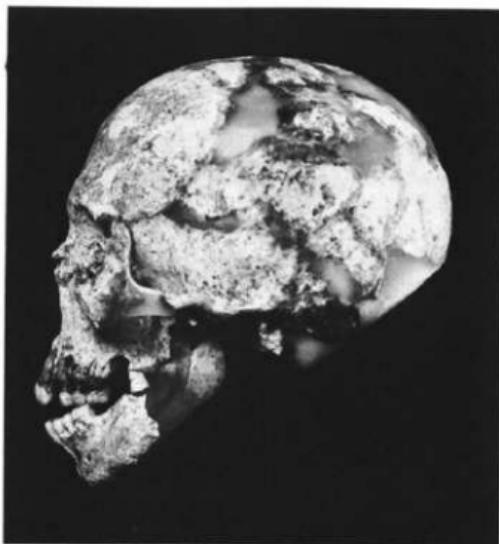
	原村上 6-2 男性	原村上 5-1 女性	原村上 5-2 女性	原村上 6-1 女性	原村上 7-2 女性	原村上 平均 n M
2. 中央最大径 (右)	—	14	—	—	13	2 13.50
(左)	16	—	12	13	13	3 12.67
3. 中央最小径 (右)	—	8	—	—	9	2 8.50
(左)	13	—	8	8	9	3 8.33
4. 中央周 (右)	—	37	—	—	39	2 38.00
(左)	49	—	34	37	37	3 36.00
4a. 最小周 (右)	—	—	—	—	—	—
(左)	—	—	—	—	—	—
4(2). 下端幅 (右)	—	—	—	—	—	—
(左)	18	—	—	—	—	—
4(2a). 下端矢状幅 (右)	—	—	—	—	—	—
(左)	25	—	—	—	—	—
3/2 中央断面示数 (右)	—	57.14	—	—	69.23	2 63.19
(左)	81.25	—	66.67	61.54	69.23	3 65.81

表23 膝蓋骨計測値 (mm)

	原村上 6-2 男性 右	原村上 6-1 女性 左	原村上 7-2 女性 右
1. 最高	—	—	34
2. 最大幅	—	35	38
3. 最大厚	20	17	16
4. 関節面高	—	—	—
5. 内関節面幅	18	16	20
6. 外関節面幅	24	22	22
1/2 膝蓋骨高幅示数	—	—	89.47

表24 推定身長値(cm)

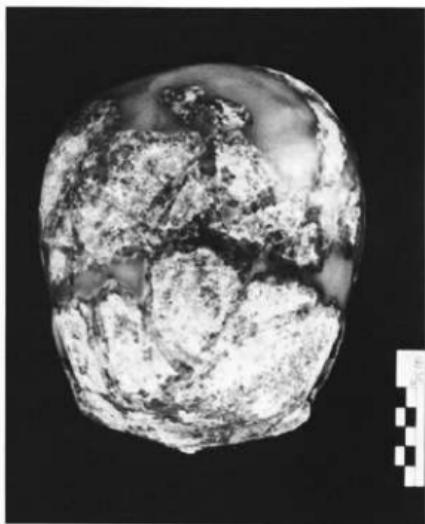
	原村上 4-1 男 性	原村上 6-1 女 性	原村上 7-1 女 性	原村上 7-2 女 性	原村上 平均 n M
Pearson の式機 骨(右)	—	—	—	146.75	1 146.75
(左)	—	—	—	—	—
大腿骨(右)	—	—	145.00	144.23	2 144.42
(左)	—	145.78	—	—	1 145.78
脛 骨(右)	—	—	145.80	—	1 145.80
(左)	161.59	148.86	—	—	1 148.86
藤井の式 機 骨(右)	—	—	—	144.28	1 144.28
(左)	—	—	—	—	—
大腿骨(右)	—	—	144.15	143.25	2 143.70
(左)	—	145.22	—	—	1 145.22
脛 骨(右)	—	—	144.31	—	1 144.31
(左)	159.91	147.46	—	—	1 147.46



頭蓋側面



頭蓋前面



頭蓋上面

原村上 2 号墳 1 号人骨（男性、壯年）



頭蓋側面



頭蓋前面



頭蓋上面

原村上46-1号墳人骨（女性、熟年）



頭蓋側面



頭蓋前面



頭蓋上面

原村上 4 号墳 1 号人骨（男性、壮年）



頭蓋側面



頭蓋前面



頭蓋上面

原村上 5 号填 1 号人骨（女性、壮年）



頭蓋前面



頭蓋側面

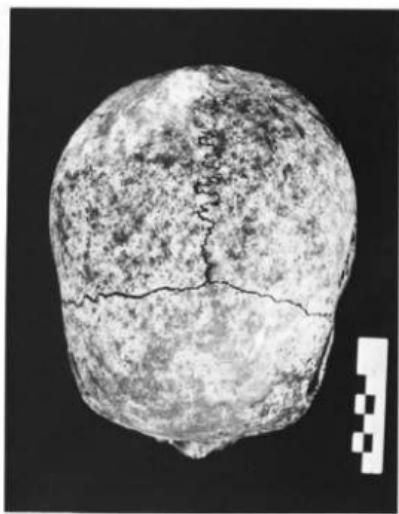
原村上 5 号墳 2 号人骨（女性、壮年）



頭蓋側面



頭蓋前面

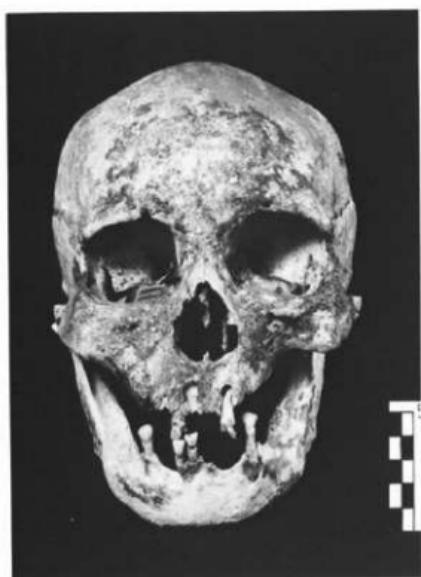


頭蓋上面

原村上 6 号填 1 号人骨 (女性、壮年)



頭蓋側面



頭蓋前面

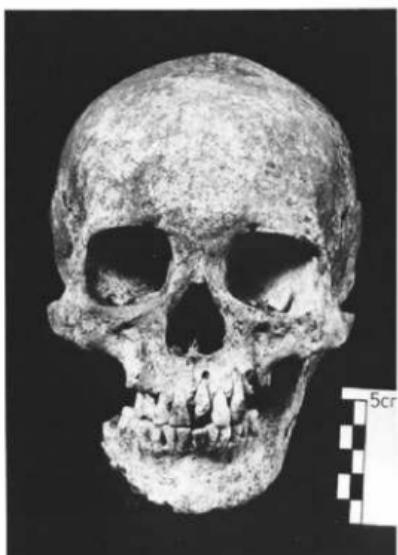


頭蓋上面

原村上 6 号墳 2 号人骨 (男性、熟年)



頭蓋側面



頭蓋前面

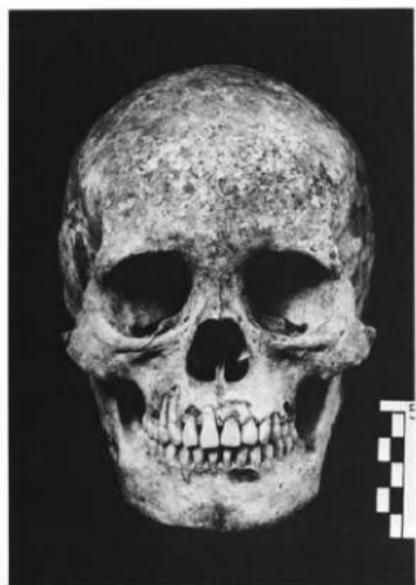


頭蓋上面

原村上7号墳1号人骨（女性、壮年）



頭蓋側面



頭蓋前面



頭蓋上面

原村上 7号墳 2号人骨（女性、壮年）



原村上46-1号墳人骨（女性、熟年）・四肢骨

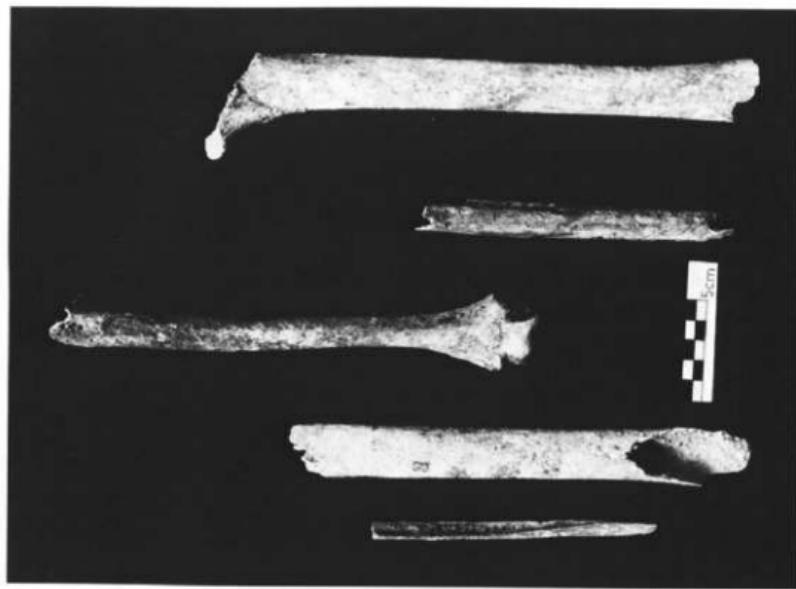
原村上 4 号墳 1 号人骨 (男性、壮年)・四肢骨



原村上 4 号墳 2 号人骨 (女性、壮年)・四肢骨



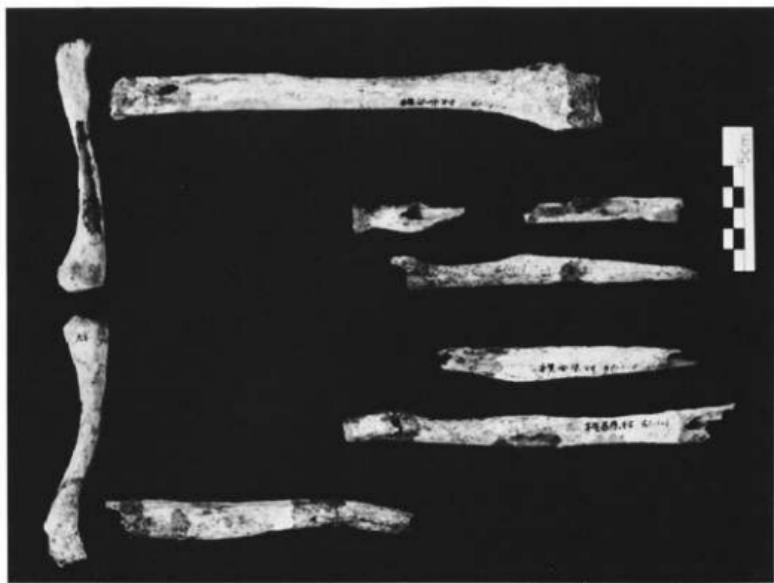
原村上5号墳1号人骨(女性、壮年)・四肢骨



原村上5号墳2号人骨(女性、壮年)・四肢骨



原村上6号填1号人骨(女性、壮年)・上肢骨



原村上6号填1号人骨(女性、壮年)・下肢骨



原村上 6 号墳 2 号人骨（男性、熟年）・上肢骨



原村上 6 号墳 2 号人骨（男性、熟年）・下肢骨



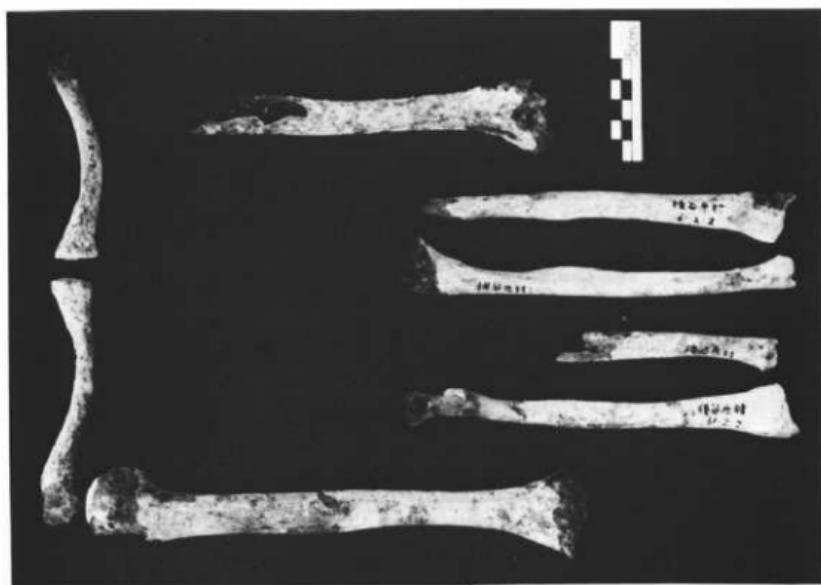


原村上 7 号墳 1 号人骨（女性、壯年）・上肢骨



原村上 7 号墳 1 号人骨（女性、壯年）・下肢骨

原村上7号墳2号人骨(女性、壮年)・上肢骨



原村上7号墳2号人骨(女性、壮年)・下肢骨



2. 縄瀬小学校地下式横穴墓出土の古墳時代人骨

資料

宮崎県北諸県郡高崎町大字縄瀬にある縄瀬小学校の校庭からは、黒木昭三氏によれば、昭和38年以降、昭和42年、46年、47年に地下式横穴墓が発見され、玄室から人骨が検出されている。昭和42年は栗原文蔵氏が調査を行ない、46年は石川恒太郎氏（石川、1972）が、47年には黒木昭三氏が調査を行なっている。この3回の発掘調査で、3基の地下式横穴墓が発見され、合計6体の人骨が出土している。

昭和42年の発掘調査で出土した人骨は、栗原文蔵氏（1971）によれば、「人骨は細片となり、原位置を離れているものが多く、総体に軟弱で、取り上げ得ないものであった。」とあり、そうすると、本町に保管されていた人骨がこの昭和42年出土の人骨かどうか問題になるが、この人骨の残存量はけっして多くはなく、頭蓋に朱が認められることなどから本人骨はこの昭和42年出土人骨と考えて大きな矛盾はないと考えられる。

昭和42年の発掘調査では、2体の人骨が、46年では1体の人骨が、さらに47年には3体の人骨が検出されている。各人骨の性別、年令などは表25に示すとおりで、また人骨の体数や男女の内訳は表26に示すとおりである。

表25 出土人骨一覧

発見年月日	人骨番号	性別	年令	備考
昭和42年7月27日	42-1	男性	壮年	頭蓋朱、少量
	42-2	男性	熟年	
昭和46年6月7日	46-1	女性	壮年	
昭和47年3月6日	47-1	男性	壮年	
	47-2	男性	壮年	
	47-3	-	小兒(II) 13~14才	

表26 出土人骨数

	男性	女性	幼児	合計
昭和42年出土人骨	2	0	0	2
昭和46年出土人骨	0	1	0	1
昭和47年出土人骨	2	0	1	3
合計	4	1	1	6

所 見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

42-1号人骨（男性、壮年）

1. 頭蓋

左側頭頂骨、左側側頭骨、後頭骨、左側頸骨および下顎骨の左側半が残存していた。外耳道は左側の観察ができたが、前壁、後壁とともに骨腫が認められる。三主縫合は、冠状縫合の左側半、矢状縫合およびラムダ縫合が観察可能で、いずれも内外両板とも開離している。計測是不可能で、また、頭型は観察によっても推測することができない。下顎骨の径は大きい。

2. 四肢骨

(1) 上肢骨

鎖骨、上腕骨が残存していた。

① 上腕骨

左側の骨体が残存していた。三角筋粗面の発達はあまり良くないが、骨体の大きさは、宮崎県の古墳人の平均値に近い。

計測値は、中央最大径が22mm（左）、中央最小径は17mm（左）で、骨体断面示数は77.27（左）となり、骨体の扁平性は強くない。また、中央周は66mm（左）である。

② 下肢骨

大腿骨および脛骨の骨体が残存していた。

① 大腿骨

左右の骨体が残存していた。粗線そのものの発達はあまり良くないが、骨体両側面は後方へ著しく発達している。

計測値は、骨体中央矢状径が30mm（左）、横径は26mm（左）で、骨体中央断面示数は115.38（左）となり、骨体両側面の後方への発達が著しい。骨体中央周は87mm（左）で、骨体は太い。

② 脛骨

両側とも骨体が残存していた。ヒラメ筋線の発達は悪いが、骨間縁は鋭く突出している。骨体の断面形は右側はヘリチカのⅡ型を、左側はV型を呈している。

計測値は、中央最大径が30mm（左）、中央横径は23mm（右）、21mm（左）で、中央断面示数は70.00（左）となり、骨体は扁平ではない。骨体周は80mm（左）、最小周は72mm（右）で、骨体はそれほど大きくはない。

3. 性別・年令

性別は、下顎骨や四肢骨の径が大きいことから男性と推定した。年令は、三主縫合が内外両板とも開離していることから壮年と考えられる。

42-2号人骨（男性、熟年）

1. 頭蓋

前頭骨、上顎骨、左右の頬骨、左右の側頭骨、下顎骨などの大片が残存していたが、復元はできなかった。右側の外耳道が観察できたが、骨腫は存在しない。また、縫合は、冠状縫合と矢状縫合の一部が観察できたが、内板はいずれも癒合していたものと考えられる。眉上弓の隆起は著しく強い。

2. 歯

上下両顎の歯槽が観察できた。その状態と残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

／／／／〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇●／／	／：不明（破損）
／／／／／〇〇／／〇〇〇〇	M1 ● ●	〇：歯槽開存 ●：歯槽閉鎖

咬耗度はBrocaの2度である。

3. 四肢骨

左側の大腿骨と脛骨が残存していた。大腿骨は左側の骨体近位部が残存していたが、計測はできない。また、脛骨は左側骨体が残存していたが、前縁が剥落しており、計測はほとんど不可能であるが、骨間縁は良く発達している。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が著しく強いことから男性と推定し、年令は縫合の内板が癒合していたと考えられることから、熟年と推定した。

46-1号人骨（女性、壮年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

右側側頭骨と後頭骨の大部分を欠損している。頭蓋の全体の径は小さい。縫合は三主縫合とも内外両板が開離している。外耳道は左側が観察できたが、骨腫は存在しない。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が162mmで、頭蓋最大幅、バジオン・ブレグマ高はともに計測できない。しかし、頭蓋最大幅は左側半を2倍することによって、その推定値を算出することができた。その推定頭蓋最大幅は $(63\text{mm} \times 2 = 126\text{mm})$ である。この推定値を用いて算出した頭蓋長幅示数は〔77.78〕となり、頭型は中頭型に属している。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は左側2/3が残存していた。眉上弓の隆起は著しく弱く、前頭鱗は膨隆している。

顔面頭蓋の計測値は、顎高が100mm、上顎高は(56mm)で、高径は著しく低い。顎骨弓幅は計

測できないが、中顎幅は左側半を2倍することによって、推定値を算出してみると、〔 $47\text{mm} \times 2 = 94\text{mm}$ 〕である。この推定値を用いて示数値を算出すると、顎示数は〔106.38（V）〕、上顎示数は〔59.57（V）〕となり、顎面には著しい低顎傾向が認められる。

眼窩の計測値は眼窩高が計測できたにすぎず、その計測値は〔30mm〕（左）である。鼻幅は25mm、鼻高は41mmで、鼻示数は60.98となり、hyperchamaerrhin（過低鼻）に属している。

側面角は、全側面角が（75）度、鼻側面角が84度、歯槽側面角は（54）度で、歯槽性突顎の傾向が強い。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

◎ M₂ M₁ P₂ P₁ C I₂ I₁ I₁ I₂ C P₁ P₂ M₁ M₂ ◎	〔／：不明（破損）〕
M₃ M₂ M₁ / / C / I₁ I₁ I₂ C P₁ P₂ M₃ M₂ M₃	〔◎：未萌出〕

上顎両側のMは未萌出で、歯槽には萌出可能なスペースは存在しない。

咬耗度はBrocaの1度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

左側鎖骨、左側腕骨が残存していたが、いずれも緻密質の剥落が著しく、計測はできない。観察したところでは、径はいずれも小さい。

(2) 下肢骨

左右の脛骨の骨体が残存していた。

① 腓骨

左右とも骨体の径は著しく小さく、骨体は扁平である。また、右側のヒラメ筋線は突出している。骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。なお、左側は緻密質が剥落しており、計測はできない。

計測値は、中央最大径が24mm（右）、中央横径は16mm（右）で、中央断面示数は66.67（右）となり、骨体はやや扁平である。骨体周は63mm（右）、最小周は60mm（右）で、骨体は著しく細い。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が著しく弱く、前頭鱗も膨隆していることから女性と推定し、年令は、三主縫合の内外両板が開離していることから、壮年と推定した。

47年出土人骨

合計2体分の人骨であるが、頭蓋と四肢骨を個体ごとに組合せることができないので、頭蓋と

四肢骨を別々に記載する。

I. 頭 蒜

47-1号人骨(男性、壮年)

1 而 著

脳頭蓋も頸面頭蓋も右側半が残存していた。乳様突起はあまり大きくはない。右側外耳道の観察ができたが、骨腫は存在しない。縫合は冠状縫合と矢状縫合の右側半が観察できたが、いずれも内外顎板とも開離している。

計測はほとんど不可能であるが、バジオン・ブレグマ高は134mmで、頭の高さはやや高い。また、右側の上顎骨前頭突起は矢状方向を向いており、歯槽突起には歯槽性の突顎傾向は認められない。

2 蘭

上顎骨には歯が釘植していた、これを歯式で示すと、次のとおりである。

咬耗度はBrocaの1~2度である。

3 性別・年令

性別は、四肢骨が2体分で、いずれも男性の四肢骨と考えられることから、本頭蓋も男性頭蓋と推定される。年齢は、縫合が内外画板とも開離していることから、壮年と推定した。

47=2号人骨（男性、壮年）

1 頭 著

前頭骨、右側頭頂骨の一部、右側頸骨、右側上顎骨の一部が残存していたにすぎない。縫合は冠状縫合と矢状縫合の一部が観察できたが、いずれも内外両板とも開離している。また、眉上弓は著しく隆起している。

計測はほとんど不可能であるが、観察したところでは、顔面は低顎傾向が強いようである。

2

左側上顎骨には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

咬耗度はBrocaの1度である。

3. 性別・年令

性別は、眉上弓が著しく隆起していることから、男性と推定し、年令は縫合が内外両板とも開離していることから、壮年と推定した。

II. 四肢骨

四肢骨は脛骨および大腿骨が2体分、腓骨が1体分残存していたが、いずれも男性四肢骨である。

1. 大腿骨1（男性）

右側の骨体が残存していた。骨体はそれほど太くはないが、骨体両側面は後方へ突出している。

計測値は、骨体中央矢状径が28mm（右）、横径は23mm（右）で、骨体中央断面示数は121.74（右）となり、骨体両側面の後方への発達が著しい。骨体中央周は81mm（右）である。

2. 大腿骨2（男性）

左側の遺位半が残存していた。径はそれほど大きいものではないが、骨体両側面は後方へ発達している。

3. 脛骨1（男性）

左側はほぼ完全である。ヒラメ筋線の発達はあまり良くない。また、骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が340mm（左）でやや短い。中央最大径は28mm（右）、27mm（左）、中央横径は20mm（右）、21mm（左）で、中央断面示数は71.43（右）、77.78（左）で、骨体は扁平ではない。骨体周は75mm（右、左）、最小周は68mm（右、左）で骨体はやや細い。

4. 脛骨2（男性）

右側骨体が残存していた。後面が剥落しており、計測はできないが、径は大きい。

5. 腓骨1（男性）

左側骨体が残存していた。径はやや大きく、骨体は扁平である。

III. 推定身長値

男性の左側脛骨最大長からPearsonと藤井の式を用いて推定身長値を算出してみると、それぞれ159.45cm、157.78cmとなり、いずれも低身長である。

要 約

宮崎県北諸県郡高崎町大字繩瀬にある繩瀬小学校の校庭から、昭和42年、46年、47年に地下式横穴墓が発見され、玄室から人骨が検出された。出土した人骨は合計6体で、そのうちの5体が成人骨であった。これら成人骨について、人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. この6体の人骨はすべて地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨である。
2. 出土人骨6体のうち4体が男性骨であるが、頭型を明らかにできたものは1例もない。バジオン・ブレグマ高を計測できるものが1体あり、その計測値は134mmで、この例は頭の高さがやや高い。

3. 男性の顔面頭蓋は1例も計測できなかったが、観察によれば、顔面の高径は低いようである。鼻根部の形態や上顎骨の歯槽突起の特徴は不明である。
4. 男性の四肢骨は、上腕骨はあまり大きくなはないが、大腿骨はやや太く、骨体両側面は著しく後方へ発達している。また、脛骨は短く、骨体には扁平性は認められない。
5. 脊骨から算出した男性の推定身長値は159.45cm (Pearsonの式) で、低身長である。
6. 女性は1体であったが、頭蓋の計測が可能で、頭型は中頭型である。また、頭蓋の径は小さい。
7. 女性の顔面頭蓋は高径が低く、低顎傾向が著しい。また、歯槽側面角は著しく小さく、歯槽性突頸の傾向が強い。
8. 四肢骨の径は小さく、脛骨は古墳時代女性としてはやや扁平である。

参考文献

1. 石川恒太郎、1972：高崎町繩瀬小学校校庭の地下式古墳調査報告。宮崎県文化財調査報告、第16集：109～113。
2. 栗原文藏、1971：宮崎県北諸県郡高崎町繩瀬小学校校庭の地下式横穴。九州考古学、41～44号：40～41。

表27 脳頭蓋計測値 (mm)

	繩瀬小学校			
	47-1		47-2	
	男 性	男 性	女 性	
1.	頭蓋最大長	—	—	162
8.	頭蓋最大幅	—	—	[126]
17.	バジオン・ブレグマ高	134	—	—
23.	頭蓋水平周	—	—	—
24.	横 弧 長	—	—	—
25.	正中矢状弧長	—	—	—
26.	正中矢状前頭弧長	—	118	117
27.	正中矢状頭頂弧長	—	—	125
29.	正中矢状前頭弦長	—	105	110
30.	正中矢状頭頂弦長	—	—	111
29/26	矢状前頭示数	—	88.98	94.02
30/27	矢状頭頂示数	—	—	88.80

表28 顎面頭蓋計測値 (mm)

		繩瀬小学校	
		47-2	46-1
		男 性	女 性
46.	中顎幅	-	(94)
47.	顎 高	-	100
48.	上顎高	-	(56)
47/46	顎示数 (V)	-	(106.38)
48/46	上顎示数 (V)	-	(59.57)
51.	眼窩幅 (右)	-	-
	(左)	-	-
52.	眼窩高 (右)	-	-
	(左)	29	(30)
52/51	眼窩示数 (右)	-	-
	(左)	-	-
54.	鼻 幅	-	25
55.	鼻 高	-	41
54/55	鼻示数	-	60.98
72.	全側面角	-	(75)
73.	鼻側面角	-	84
74.	齒槽側面角	-	(54)

表29 下顎骨計測値 (mm、度)

		繩瀬小学校		46-1 女 性
		42-1	42-2	
		男 性	男 性	
67.	前下顎幅	-	47	-
69.	オトガイ高	29	-	-
69(1).	下顎体高 (右)	-	-	-
	(左)	31	31	26
69(2).	下顎体高 (右)	-	-	-
	(左)	23	-	24
70(1).	前枝高	-	-	48
70(2).	最小枝高	-	-	47
70(3).	下顎切痕高	-	-	9
71.	枝 幅 (右)	-	-	-
	(左)	35	-	-
71(1).	下顎切痕幅	-	-	38
79.	下顎枝角	-	-	130
69(2)/69	下顎高示数 (右)	-	-	-
	(左)	79.31	-	-
70(3)/71(1)	下顎切痕示数 (右)	-	-	-
	(左)	-	-	23.68

表30 上腕骨計測値 (mm)

繩瀬小学校		
	42-1	
	男 性	
	左	
5.	中央最大径	22
6.	中央最小径	17
7.	骨体最小周	—
7(a).	中 央 周	66
6/5	骨体断面示数	77.27

表31 大腿骨計測値 (mm)

	繩瀬小学校 42-1 男 性	繩瀬小学校 47-1 男 性
6.	骨体中央矢状径 (右) (左)	— 30
7.	骨体中央横径 (右) (左)	— 26
8.	骨体中央周 (右) (左)	— 81 87
6/7	骨体中央断面示数 (右) (左)	— 121.74 115.38
10/9	上骨体断面示数 (右) (左)	— —

表32 脊骨計測値 (mm)

	繩瀬小学校 42-1 男 性	繩瀬小学校 42-2 男 性	繩瀬小学校 47-1 男 性	繩瀬小学校 46-1 女 性
1.	腰骨全長 (右) (左)	- -	- -	- -
1a.	腰骨最大長 (右) (左)	- -	- 340	- -
1b.	腰 骨 長 (右) (左)	- -	- 330	- -
2.	頸距間距離 (右) (左)	- -	- 318	- -
8.	中央最大径 (右) (左)	- 30	- -	28 27
8a.	栄養孔位最大径 (右) (左)	- -	- -	30 32
9.	中央横径 (右) (左)	23 21	- 20	20 21
9a.	栄養孔位横径 (右) (左)	25 -	- 22	21 21
10.	骨 体 周 (右) (左)	- 80	- -	75 75
10a.	栄養孔位周 (右) (左)	- -	- -	82 85
10b.	最 小 周 (右) (左)	72 -	- -	68 68
9/8	中央断面示数 (右) (左)	- 70.00	- -	71.43 77.78
9a / 8a	栄養孔位断面示数 (右) (左)	- -	- -	70.00 65.63
10b / 1	長厚示数 (右) (左)	- -	- -	- -

表33 胸骨計測値 (mm)

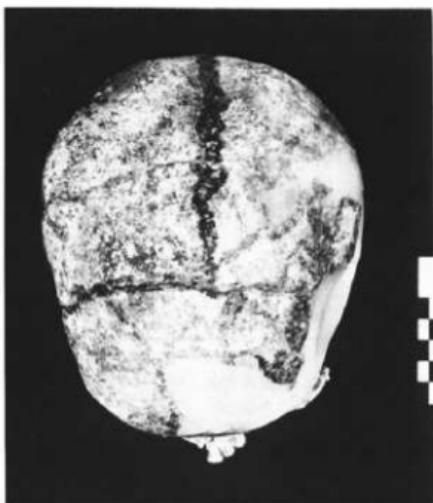
	繩瀬小学校 47-1 男 性 左
1.	最大長
2.	中央最大径
3.	中央最小径
4.	中央周
4a.	最小周
3/2	中央断面示数
4a / 1	長厚示数



頭蓋側面



頭蓋前面



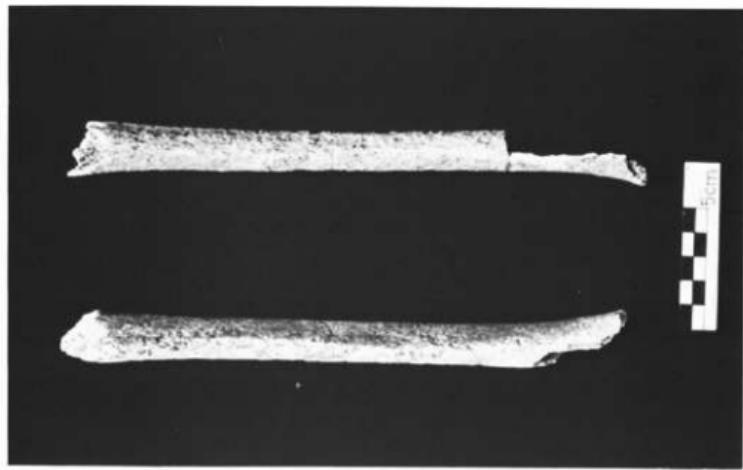
頭蓋上面

繩灘小46-1 (女性、壯年)

編號小42-1 (男性、壯年)・四肢骨



編號小46-1 (女性、壯年)・胫骨





繩頸小47年出土人骨
大腿骨 1、2 (兩方共男性)



繩頸小47年出土人骨
脛骨 1 (男性)

3. 横尾地下式横穴墓出土の古墳時代人骨

資料

宮崎県北諸県郡高崎町大字繩瀬字横尾にある横尾地下式横穴墓は石川恒太郎氏によって昭和45年9月26日に調査が行なわれている(石川、1972)。石川氏の報告書によれば、3基の地下式横穴墓から合計4体の人骨が検出されている。1号墳では2体、2号墳と3号墳からはそれぞれ1体ずつが検出されている。取り上げられた人骨には古墳の番号や人骨番号が記載されていなかつたが、報告書の記述や写真から人骨を特定することができた。

各人骨の性別、年令は表34のとおりである。4体の人骨はすべて成人骨で、表35のとおり、男性骨は2体で、残りの2体は女性骨である。

なお、この地下式横穴墓の年代は、石川氏によれば、古墳時代後期と推定されている。

人骨の保存状態はきわめて悪く、計測ができたのはごく一部のみであった。

表34 出土人骨一覧

遺構番号	人骨番号	性別	年令
1号墳	1号墳1号人骨	女性	熟年
	1号墳2号人骨	男性	不明
2号墳	2号墳人骨	女性	熟年
3号墳	3号墳人骨	男性	壮年

表35 資料数

男性	女性	合計
2	2	4

所見

各骨の計測値は文末に括して掲げた。

1号墳1号人骨(女性、熟年)

脳頭蓋や上顎骨、下顎骨などが残存していたが、復元できない。眉上弓の隆起はほとんど認められず、前頭鱗は豊かに膨隆している。縫合は三主縫合のうち、冠状縫合の右側半と矢状縫合が観察できた。冠状縫合は大部分が内外両板とも開離しているが、右側部は内外両板とも癒合しており、また矢状縫合は内板は癒合しているが、外板は開離している。外耳道は両側とも観察可能で、両側とともに骨腫が認められる。

計測はほとんど不可能で、頭型も顔面の特徴も明らかにできない。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

● ● ● ○ ○ ○ ● /	● ● ○ ○ ○ M ₁ ○ ○	／: 不明（破損）
● ● M ₁ ○ ○ ○ ○	／ / ○ ○ ○ ○ ● ●	○: 歯槽開存 ●: 歯槽閉鎖

咬耗度はBrocaの3度である。下顎の大臼歯部は両側とも閉鎖しており、歯槽は稜を形成している。また、上顎切歯の歯槽は閉鎖しているが、これがいわゆる風習的抜歯の痕跡かどうかは歯槽の状態が必ずしも健康的ではないので、明確にできない。

性別は、眉上弓の隆起が認められず、前頭鱗が膨隆していることから女性と推定し、年令は、縫合の閉鎖状態から熟年と推定した。

1号墳2号人骨（男性、年令不明）

前頭骨と左側上顎骨の一部が残存していたにすぎない。眉上弓は著しく隆起している。

性別は、眉上弓の隆起が著しく強いことから男性と推定した。年令は不明である。

2号墳人骨（女性、熟年）

前頭骨、左側上顎骨および左側側頭骨が残存していたにすぎない。眉上弓の隆起は認められない。また、左側外耳道の観察が可能であったが、骨腫は存在しない。左側上顎骨の歯槽はすべて閉鎖吸収されている。

性別は、眉上弓の隆起が認められないことから女性と推定し、年令は、上顎の左側歯槽がすべて閉鎖していることから熟年と推定した。

3号墳人骨（男性、壮年）

この一群の人骨のなかでは最も保存状態が良かった人骨である。

1. 頭蓋

右側半が残存していた。眉上弓の隆起は強く、乳様突起もわずかに大きい。外耳道は右側が観察できたが、骨腫は存在しない。縫合は冠状縫合と矢状縫合の観察ができた。冠状縫合の左側半と矢状縫合は内外両板とも開離しているが、冠状縫合の右側の1/2は内板が癒合している。

下顎骨の径は大きく、下顎切痕は浅い。

2. 歯

歯が残存していた。その残存歯と歯槽の状態を歯式で示せば、次のとおりである。

M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ / P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃	／: 不明（破損）
M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ / /	

咬耗度はBrocaの1～2度である。

3. 四肢骨

大腿骨と脛骨が残存していた。

① 大腿骨

右側が残存していた。計測はできないが、骨体はやや細く、骨頭は大きい。

② 脛骨

右側骨体が残存していた。径はそれほど大きいものではない。骨体の断面形はヘリチカのV型を呈している。

計測値は、中央最大径が28mm（右）、中央横径は20mm（右）で、中央断面示数は71.43（右）となり、骨体は扁平ではない。また、骨体周は76mm（右）である。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が強く、下顎骨や大謫骨頭の径が大きいことから男性と推定し、年令は、縫合の状態から壮年と推定した。

要約

宮崎県北諸県郡高崎町大字繩瀬字横尾にある横尾地下式横穴墓の昭和45年の発掘調査で、3基の地下式構穴墓から合計4体の人骨が出土した。保存状態は悪かったが、残存していた人骨の人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. 出土した人骨は成人骨4体で、男女各2体ずつである。
2. この人骨は古墳時代後期に属する人骨である。
3. 男女とも保存状態が悪く、頭型や顔面の特徴を明らかにすることはできなかった。
4. 男性の大謫骨体はやや細い。また、脛骨もあまり大きいものではなく、骨体には扁平性は認められない。
5. 女性四肢骨は残存していなかった。
6. 女性人骨1例に外耳道骨腫が認められた（両側）。

参考文献

1. 石川恒太郎、1972：高崎町大字繩瀬字横尾地下式古墳調査報告。宮崎県文化財調査報告書、第16集：91-97。

表36 脳頭蓋計測値 (mm)

		横尾 3号墳人骨 男 性	横尾 1号墳1号人骨 女 性
7.	大後頭孔長	35	-
16.	大後頭孔幅	30	-
16/7	大後頭示數	85.71	-
26.	正中矢状前頭弧長	125	-
29.	正中矢状前頭弦長	107	-
29/26	矢状前頭示數	85.60	-
46.	中頸幅	-	[94]
61.	上頸齒槽幅	-	59

表37 下顎骨計測値 (mm、度)

		横尾 3号墳人骨 男 性	横尾 1号墳1号人骨 女 性
65(1).	下顎筋突起幅	-	90
67.	前下顎幅	-	48
69.	オトガイ高	-	28
69(1).	下顎体高 (右)	30	26
	(左)	-	27
69(2).	下顎体高 (右)	27	-
70.	枝 高 (右)	-	-
70(1).	前枝高 (右)	64	54
70(2).	最小枝高 (右)	55	-
70(3).	下顎切痕高 (右)	12	12
71.	枝 幅 (右)	34	-
71a.	最小枝幅 (右)	34	-
71(1).	下顎切痕幅 (右)	35	36
79.	下顎枝角 (右)	124	-
71a / 70(2)	下顎枝示數 (右)	61.82	-
70(3) / 71(1)	下顎切痕示數 (右)	34.29	33.33

表38 經骨計測値 (mm)

		横尾 3号墳人骨 男 性 右
8.	中央最大徑	28
8a.	栄養孔位最大徑	31
9.	中央横徑	20
9a.	栄養孔位横徑	20
10.	骨 体 周	76
10a.	栄養孔位周	83
10b.	最 小 周	-
9/8	中央断面示數	71.43
9a / 8a	栄養孔位断面示數	64.52



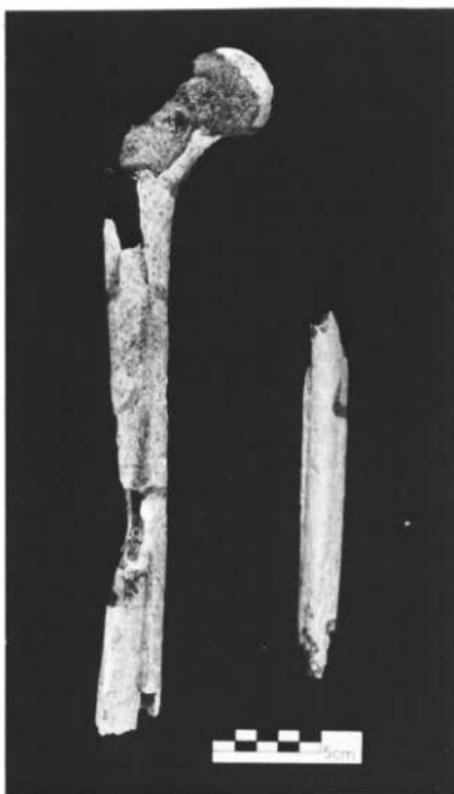
横尾 1 号墳 2 号人骨（男性）・頭蓋



横尾 3 号墳人骨（男性、壮年）・頭蓋上面



横尾 3 号填人骨（男性、壮年）・下顎骨



横尾 3 号填人骨（男性、壮年）・下肢骨

4. 宇野原地下式横穴墓出土の古墳時代人骨

資料および所見

宮崎県北諸県郡高崎町大字江平字宇野原にある宇野原地下式横穴墓は、黒木昭三氏によって昭和46年7月1日に調査が行なわれた。この横穴墓1基から検出された人骨は1体分の人骨である。人骨の残存量は少ないが、性別や年令を推測することができ、また大腿骨の最大長が計測できたので、推定身長も算出できた貴重な1体である。

昭和46年に宇野原地下式横穴墓から出土した人骨は後述しているように、壮年の女性骨1体である。

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1. 頭蓋

ラムダを中心とする前頭骨、頭頂骨が残存していたにすぎない。

縫合は、冠状縫合とラムダ縫合が観察できたが、いずれも内外両板とも開離している。

2. 四肢骨

(1) 上肢骨

橈骨と尺骨が残存していた。右側橈骨は骨体が残存していたが、その径は小さい。左側橈骨は頸部が残存していた。また、尺骨は左側の遠位部のみである。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨が残存していた。

① 寛骨

恥骨は両側とも完全である。恥骨下角は大きい。

② 大腿骨

右側は骨体が残存していたが、破損部分が多く、計測はできない。左側も骨体は不完全で、骨体中央部での計測は不可能であるが、骨体の径は小さい。しかし、左側は内側頸と骨頭が完全であるので、最大長を計測することができた。最大長は370mm(左)で、長さはかなり短い。

③ 脛骨

左側の近位半の一部が残存していたにすぎない。

3. 推定身長値

左側大腿骨最大長から、Pearsonと藤井の式を用いて推定身長値を算出してみると、それぞれ144.81cm、144.05cmとなり、いずれも低身長である。

要約

宮崎県北諸県郡高崎町大字江平字宇野原にある宇野原地下式横穴墓の昭和46年に行なわれた発掘調査で人骨が出土した。残存量は少なかったが、性別、年令が推定できたばかりでなく、推定

身長値も算出できた。本人骨の特徴を要約すると次のとおりである。

1. 残存していたのは1体分の人骨で、壮年の女性骨である。
2. この人骨は地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨である。
3. 頭型や顔面の形態は全く不明である。
4. 桡骨の径は小さい。
5. 大腿骨は短く、骨体も小さい。
6. 本女性の推定身長値は144.81cm (Pearsonの式) となり、低身長である。

表39 橫骨計測値 (mm)

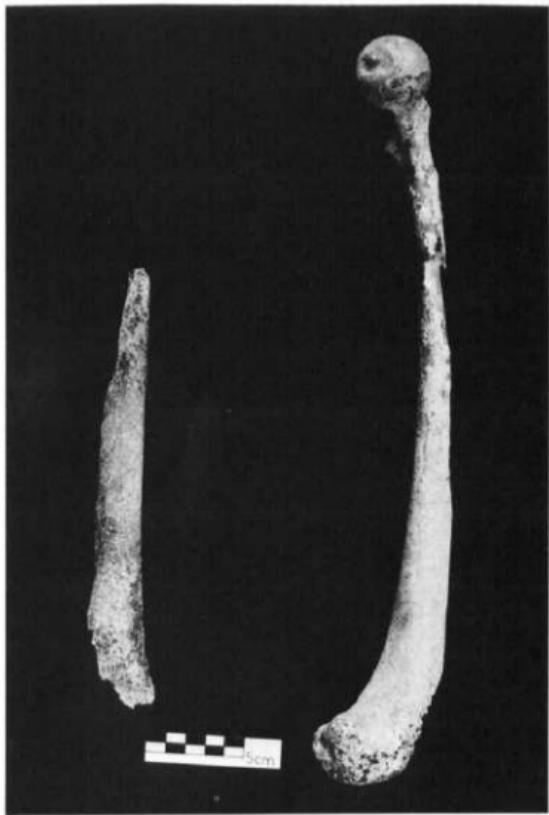
宇野原 女 性 右		
4.	骨 体 横 径	14
4a.	骨体中央横径	14
5.	骨 体 矢 状 径	9
5a.	骨体中央矢状径	9
5 (5).	骨 体 中 心 周	37
5 / 4	骨体断面示数	64.29
5a / 4a	中央断面示数	64.29

表40 大腿骨計測値 (mm)

宇野原 女 性 左		
1.	最 大 長	370
18.	頭 垂 直 径	37
19.	頭 横 径	37
20.	頭 周	117
19 / 18	頭断面示数	100.00

表41 推定身長値 (cm)

宇野原 女 性		
	Pearsonの式	藤井の式
左侧大腿骨	144.81	144.05



宇野原地下式横穴出土人骨（女性、壮年）・大腿骨

5. 仮屋尾地下式横穴墓出土の古墳時代人骨

資料

宮崎県北諸県郡高崎町大字前田字仮屋尾では、黒木昭三氏によれば、昭和38年以降、昭和44年12月15日と翌45年3月に地下式横穴墓が発見されている。高崎町には「仮屋尾出土人骨」として、少量の人骨が保管されていたが、この人骨は先の調査のどの人骨なのかは定かではない。人骨の保存状態は著しく悪く、計測ができたのは、大腿骨のみであった。

残存人骨を精査した結果、歯は2体分あった。また、四肢骨は上腕骨、桡骨、大腿骨が残存していたが、桡骨は後述しているとおり、径が大きいことから男性桡骨と推測され、大腿骨は骨体が細いことから女性大腿骨の可能性が強いので、四肢骨も2体分の可能性がある。従って、残存人骨は男女2体の可能性が考えられる。

なお、仮屋尾地下式横穴墓は隣町の高原町の日守地下式横穴墓群とともに一群の横穴墓群を形成している。

表42 資料

人骨の部位	性別など
歯	2体分
上腕骨	性別不明
桡骨	男 性
大腿骨	女 性

所見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1. 頭蓋

頭蓋の小片が存在していた。この小片には赤色顔料が付着していた。

2. 歯

歯は2体分存在した。1体分は咬耗が著しく弱く、他の1体はこれよりも強いものである。いずれの歯にも赤色顔料が付着していた。

① 歯 1

遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	/	/	/	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	〔/ : 不明 (破損)〕
/	/	/	/	/	/	/	/		/	/	/	P ₂	M ₁	M ₂	/		

咬耗度はBrocaの1度である。

② 齒 2

遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

/	/	/	P ₂	/	/	/	/	/	/	I ₂	/	/	/	/	M ₂	/
/	/	/	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	I ₁	I ₂	/	/	/	/	/	/

咬耗度はBrocaの2度である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

① 上腕骨

右側骨体の遠位端が残存していた。径はあまり大きくはない。

② 構骨

右側骨体の近位半が残存していた。径はやや大きい。径が大きいことから男性構骨の可能性が強い。

(2) 下肢骨

① 大腿骨

右側骨体の中央部が残存していた。径はやや小さく、粗線の発達も良くない。

また、骨体の断面形はほとんど円に近い。

計測値は、骨体中央矢状径が24mm(右)、骨体中央横径は23mm(右)で、骨体中央断面示数は104.35(右)である。また、中央周は75mm(右)で、骨体はやや細く、平均値的な見方をすれば、この大腿骨は女性大腿骨の可能性が強い。

要 約

宮崎県北諸県郡高崎町大字前田字仮屋尾にある地下式横穴から出土した人骨について人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. 残存量は少なかったが、頭蓋や歯には赤色顔料が付着していた。
2. 遊離歯は2体分存在し、1体は咬耗が弱く、他の1体はやや強いものであった。
3. 四肢骨は上腕骨、構骨、大腿骨が残存していた。構骨の径はやや大きく、男性構骨の可能性が強い。また、大腿骨の骨体は小さく、この大腿骨は女性の可能性が強い。
4. 以上のように、残存人骨は歯から2体分、四肢骨からも2体分の可能性が推測され、男女2体分の可能性が考えられる。

参考文献

1. 石川恒太郎、1970：高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告。宮崎県文化財調査報告書、第15集：93—100。

2. 松下孝幸、1981：日守地下式古墳出土の人骨。宮崎県文化財調査報告書、第23集：169—178。
3. 茂山 稔、他、1980：日守地下式機穴54—1～4号。宮崎県文化財調査報告書、第22集：61—87。
4. 分部哲秋、1981：日守地下式古墳出土の幼小児骨。宮崎県文化財調査報告書、第23集：179—184。

表43 大腿骨計測値 (mm)

	仮屋尾
	大腿骨 1
	女性
	右
6. 骨体中央矢状径	24
7. 骨体中央横径	23
8. 骨体中央周	75
6/7 骨体中央断面示数	104.35



板屋尾地下式横穴出土人骨・大腿骨、桡骨、上腕骨

6. 塚原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨

資料

高崎町大字繩瀬字塚原では昭和43年5月16日に地下式横穴墓が発見され、発掘調査が行なわれており（石川、1969）、また、この場所とは至近距離にある字千原の地からも昭和44年4月22日に4基の地下式横穴墓が発見、調査されている（石川、1970）。これら2回の発掘調査ではいずれも人骨が出土しているが、高崎町に保管されていた人骨は上記のうち、昭和43年の分と昭和44年の1号墳出土の人骨であった。従って、本稿ではこれらについてのみ報告したい。昭和43年に発見、調査された地下式横穴墓（43-1号墳）から検出された人骨は3体で、昭和44年に調査された地下式横穴墓（44-1号墳）からは1体の人骨が出土している。出土人骨の性別、年令は表44のとおりである。

人骨の保存状態は比較的良好で、推定身長値が算出できるなど本人骨の特徴をある程度明らかにすることができた。

表44 資料

人骨番号	性別	年令	備考
43-1-1号人骨	男性	熟年	頭蓋赤色顔料
43-1-2号人骨	女性	壮年	頭蓋赤色顔料
43-1-3号人骨	-	幼児	3才（赤色顔料なし）
44-1-1号人骨	男性	壮年	顔面赤色顔料（部分的）

石川氏によれば、この地下式横穴墓の所属時代は古墳時代の後期初頭頃と推定されている。

所見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

43-1-1号人骨（男性、熟年）

1. 頭蓋

頭蓋冠、上顎骨、左側頸骨および下顎骨が残存していた。計測は不可能で、また、観察によても頭型は推測することもできない。縫合は冠状縫合、矢状縫合およびラムダ縫合の右側部が観察できた。これらはいずれも内板は癒合しており、矢状縫合は外板も癒合閉鎖しているが、冠状縫合とラムダ縫合では一部に癒合が認められる。外耳道は右側が観察できたが、骨腫は存在しない。

下顎骨の径は大きく、下顎切痕は浅い。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/	●	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	/	M ₂	/	/ : 不明（破損）
●		M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	● : 歯槽閉鎖

咬合純度はBrocaの1～2度である。また、風習的抜歯は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

左側鎖骨、上腕骨、桡骨および尺骨が残存していた。

① 上腕骨

骨体の径はやや大きく、三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は、中央最大径が25mm（左）、中央最小径は17mm（左）で、骨体断面示数は68.00（左）となり、骨体は扁平である。骨体最小周は63mm（左）、中央周は71mm（左）で、骨体はやや大きい。

② 桡骨

左右ともほぼ完全である。長さはやや長く、骨間縁は骨体近位1/3あたりで鋭く突出している。

③ 尺骨

左側の尺骨が残存していた。骨体はやや大きく、骨間縁の発達は良好である。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および膝蓋骨が残存していた。

① 審骨

左側の恥骨などが残存していた。恥骨下角は小さいようである。

② 大腿骨

左側は最大長が計測できた。長さは長く、骨体も太い。粗線は明瞭で、骨体の両側面はやや後方へ発達している。

計測値は、最大長が436mm（左）、骨体中央周は87mm（右）、89mm（左）で、長厚示数は20.60（左）である。骨体中央矢状径は29mm（右）、30mm（左）、横径は26mm（右）、28mm（左）で、骨体中央断面示数は111.54（右）、107.14（左）となり、骨体両面は後方へやや突出しており、その程度は右側の方が強い。また、上骨体断面示数は72.74（左）となり、骨体上部は扁平である。

③ 脛骨

両側とも遠位端を欠いている。ヒラメ筋線の発達は良好で、骨体は著しく扁平である。また、骨体の断面形は両側ともヘリチカのIV型を呈している。

計測値は、中央最大径が33mm（右）、32mm（左）、中央横径は19mm（右）、20mm（左）で、中央断面示数は57.58（右）、62.50（左）となり、骨体は著しく扁平である。骨体周は83mm（右）、82mm（左）、最小周は71mm（右）で、骨体は大きい。

4. 推定身長値

左侧大腿骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ163.27cm（Pearson）、162.56cm（藤井）である。また、桡骨最大長から推定してみると、163.45cm（Pearson、右）、163.77cm（Pearson、左）、160.85cm（藤井、右）、161.94cm（藤井、左）となり、本例は高身長である。

5. 性別・年令

性別は、恥骨下角が小さいことや四肢骨の径が大きいことから男性と推定した。年令は三主縫合の内板がすべて癒合閉鎖していることから熟年と考えられる。

43-1-2号人骨（女性、熟年）

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭部と左側側頭部を欠損している、乳様突起は小さい。外耳道は右側の観察が可能であるが、骨腫は認められない。縫合は、冠状縫合、矢状縫合およびラムダ縫合の右側半が観察できたが、いずれも内外両板とも開離している。

頭蓋の計測値は、頭蓋最大幅が134mm、バジオン・ブレグマ高は131mmで、示数値は、頭蓋幅高示数が97.76である。頭蓋最大長が計測できないので、頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を推測することが可能で、頭型は中頭型である。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は左側の頬骨弓を欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓の隆起は著しく弱い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が95cm、中顎幅は99mm、顎高は108mm、上顎高は64mmである。頬骨弓幅は計測できないが、右側半が完全であるので、これを2倍することによって、推定値を算出してみると、 $[64\text{mm} \times 2 = 128\text{mm}]$ となり、この推定値も用いて示数値を算出してみると、顎示数は[84.38（K）]、109.09（V）、上顎示数は[50.00（K）]、64.65（V）となり、顔面には低顎傾向が認められる。

眼窩幅は41mm（右）、眼窩高は34mm（右）、36mm（左）で、眼窩示数は82.93（右）となり、右側はmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は25mm、鼻高は52mmで、鼻示数は48.08となり、mesorrhin（中鼻）に属している。鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が17mm、鼻根横弧長は20mm、鼻根彎曲示数は85.00である。両眼窩幅は98mmで、眼窓間示数は17.35となり、鼻根部はあまり広くない。前頭突起水平傾斜角は計測できないが、観察したところでは、前頭突起の向きは矢状方向である。

側面角は、全側面角が84度、鼻側面角が87度、歯槽側面角は70度で、歯槽性の突顎傾向は弱い。

下頸骨は径が小さく、下頸切痕は浅い。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M ₃	M ₂	M ₁	P	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂
M ₃	M ₂	M ₁	P	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂

なお、上顎左側M₁は萌出していない。咬耗度はBrocaの1～2度である。また、風習的抜歯の痕跡は認められず、歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

右側の桡骨と尺骨が残存していた。

① 桡骨

完全な右側が残存していた。長さは短く、骨体は細い。

② 尺骨

尺骨も細く、小さい。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨が残存していた。

① 審骨

左右とも恥骨、腸骨が残存していた。恥骨下角は大きく、左側には耳状面前溝が認められる。

② 大腿骨

左右とも骨頭は完全であるが、骨体の保存状態はきわめて悪く、計測はできない。骨頭は小さい。

③ 脣骨

左側の骨体遠位部が残存していたにすぎない。骨体は細いようである。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が著しく弱いことや恥骨下角が大きいことから、女性と推定した。年令は三主縫合がいずれも内外両板とも開離していることから壮年と考えられる。

44-1-1号人骨（男性、壮年）

1. 頭蓋

(1) 腦頭蓋

後頭骨を欠損している以外は保存良好である。縫合は冠状縫合と矢状縫合が観察可能であるが、これらはいずれも内外両板とも開離している。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は両側と

も存在しない。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大幅が146mm、バジオン・ブルグマ高は139mmである。示数値は頭蓋幅示数のみが算出可能で、その値は95.21である。頭蓋最大長が計測できないので、頭蓋長幅示数は算出できないが、観察したところでは、頭型は中頭型と考えられる。また、横張長は322mmである。

(2) 顔面頭蓋

左右の頬骨弓を欠損している以外は完全である、眉上弓は強く隆起し、鼻根部はやや陥凹している。また、頬骨は外側へ強く張り出している。

顔面頭蓋の計測値は、頭長が114mm、中顎幅は115mm、顎高は114mm、上顎高は64mmで、高径は低く、幅径は広い。頬骨弓幅は計測できないが、この幅もかなり広そうである。顎示数は99.13 (V)、上顎示数は55.65 (V)と著しく小さな値となり、顔面には著しい低・広顎傾向が認められる。

このような高径が低く、幅径が広い傾向は眼窩部にも認められ、眼窩幅は44mm (右)、45mm (左)、眼窩高は30mm (右)、31mm (左)で、眼窩示数は68.18 (右)、68.89 (左)となり、両側ともchamaekonch (低眼窩)に属している。

鼻幅は29mm、鼻高は47mmで、鼻示数は61.70となり、hyperchamaerrhin (過低鼻)に属しております、鼻部も高径が低く、幅径が広い傾向がかなり強い。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が19mm、鼻根横弧長は22mm、鼻根弯曲示数は86.36である。両眼窩幅は103mmで、眼窩間示数は18.45となり、鼻根部は顎の幅に比べると、狭い。鼻骨最小幅は10mm、前頭突起上幅は10mm (右、左)である。前頭突起水平傾斜角は88度で、前頭突起は矢状方向を向いている。また、鼻根角は(121)度、鼻根陥凹示数は(25.00)である。

側面角は、全側面角が76度、鼻側面角が81度、歯槽側面角は60度で、歯槽性突顎の傾向が強い。

下顎骨の径はやや大きい。下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

2. 齒

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

M ₃	M ₂	M ₁	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	M ₁	M ₂	M ₃
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	○	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	(○:歯槽開存)

咬耗度はBrocaの1度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

右側の鎖骨中部と左側の肩甲骨の関節窩の部分が残存していた。

(2) 下肢骨

大腿骨と脛骨が残存していた。

① 大腿骨

右側は骨体が、左側は遺位半が残存していた。粗線そのものの発達は良くはないが、骨体は太く、また骨体両側面は後方へ発達している。

計測値は、骨体中央矢状径が31mm（右）、30mm（左）、横径は27mm（右、左）で、骨体中央断面示数は114.81（右）、111.11（左）となり、骨体両面の後方への発達はきわめて良好である。骨体中央周は91mm（右）、90mm（左）で、骨体の径は大きい。また、上骨体断面示数は78.79（右）となり、骨体上部は扁平である。

② 脛骨

左側が残存していたが、緻密質が剥落しており、計測はできない。観察したところでは、骨体の径は大きく、また扁平性は認められず、ヒラメ筋線の発達も悪い。骨体の断面形はヘリチカのII型を呈している。

4. 性別・年令

性別は、眉上弓が強く隆起し、四肢骨の径が大きいことから、男性と推定した。年令は冠状結合と矢状縫合がともに内外両板とも開離していることから、壮年と考えられる。

要 約

宮崎県北諸県郡高崎町大字繩瀬字塚原と字千原から昭和43年と昭和44年に地下式横穴墓が発見され、調査が行なわれた結果、人骨が検出された。保存状態は比較的良好であったので、人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. 検出された人骨は、43-1号墳で3体分、44-1号墳では1体分の人骨であった。
2. この人骨は古墳時代後期に属する人骨群である。
3. 観察や計測ができた男性頭蓋は1例（44-1-1号人骨）のみで、脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大幅が146mm、バジオン・ブレグマ高は139mm、頭蓋長幅示数は算出できないが、観察したところでは、頭型は中頭と考えられる。
4. 男性は眉上弓の隆起が強く、鼻根部はやや陥凹しており、頬骨は外側へ強く張り出している。顔面頭蓋の計測値は、中額幅が115mm、額高は114mm、上額高は64mmで、顔示数は99.13（V）、上顔示数は55.65（V）となり、顔面には著しい低・広顎傾向が認められる。

また、眼窩は両側ともchamaekonch（低眼窩）に、鼻部はhyperchamaerrhin（過低鼻）に属している。なお、歯槽側面角は60度で、歯槽性の突顎の傾向が強い。

5. 男性の四肢骨はやや大きく、上腕骨と脛骨は扁平であり、また大腿骨上部も扁平である。

大腿骨は長く、骨体の両側面は後方へ突出している。

6. 男性の左側大腿骨からの推定身長値は163.27cmとなり、高身長である。
7. 女性は、中頭型で、顔面には低頬傾向が認められる。また、齒槽性突顎の傾向は弱い。
8. 女性の四肢骨は細くて、小さい。

参考文献

1. 石川恒太郎、1969：高崎町塚原地下式古墳調査報告。宮崎県文化財調査報告書、第14集：31-39.
2. 石川恒太郎、1970：北諸県郡高崎町地下式古墳調査報告。宮崎県文化財調査報告書、第15集：29-32.

表45 脳頭蓋計測値 (mm)

	塙 原		塙 原		塙 原	
	43-1-1		44-1-1		43-1-2	
	男 性	男 性	男 性	女 性		
1. 頭蓋最大長	—	—	—	—	—	—
8. 頭蓋最大幅	141	146	134	—	—	—
17. バジオン・ブレグマ高	—	139	131	—	—	—
8 / 1 頭蓋長幅示数	—	—	—	—	—	—
17 / 1 頭蓋長高示数	—	—	—	—	—	—
17 / 8 頭蓋幅高示数	—	95.21	97.76	—	—	—
頭蓋モズルス	—	—	—	—	—	—
5. 頭蓋底長	—	107	98	—	—	—
9. 最小前頭幅	—	105	91	—	—	—
10. 最大前頭幅	—	124	120	—	—	—
11. 兩耳幅	—	140	—	—	—	—
12. 最大後頭幅	—	—	—	—	—	—
13. 乳突幅	—	—	—	—	—	—
7. 大後頸孔長	—	—	—	—	—	—
16. 大後頸孔幅	—	—	—	—	—	—
16 / 7 大後頭示數	—	—	—	—	—	—
23. 頭蓋水平周	—	—	—	—	—	—
24. 橫弧長	—	322	—	—	—	—
25. 正中矢状弧長	—	—	—	—	—	—
26. 正中矢狀前頭弧長	—	129	120	—	—	—
27. 正中矢狀頭頂弧長	—	—	—	—	—	—
28. 正中矢狀後頭弧長	—	—	—	—	—	—
29. 正中矢狀前頭弦長	—	112	107	—	—	—
30. 正中矢狀頭頂弦長	—	—	—	—	—	—
31. 正中矢狀後頭弦長	—	—	—	—	—	—
29 / 26 矢狀前頭示數	—	86.82	89.17	—	—	—
30 / 27 矢狀頭頂示數	—	—	—	—	—	—
31 / 28 矢狀後頭示數	—	—	—	—	—	—
Vertex Rad.	—	128	—	—	—	—
Nasion Rad.	—	96	—	—	—	—
Subsp. Rad.	—	101	—	—	—	—
Prosth. Rad.	—	112	—	—	—	—

表46 頭面頸蓋計測値 (mm、度)

	塙 原 43-1-1 男 性	塙 原 44-1-1 男 性	塙 原 43-1-2 女 性	
40.	顎長	-	114	95
41.	側顎長	-	77	72(右)
42.	下顎長	-	123	101
43.	上顎幅	-	112	104
45.	頬骨弓幅	(150)	-	(128)
46.	中顎幅	(104)	115	99
47.	顎高	-	114	108
48.	上顎高	-	64	64
47/45	顎示数(K)	-	-	[84.38]
48/45	上顎示数(K)	-	-	[50.00]
47/46	顎示数(V)	-	99.13	109.09
48/46	上顎示数(V)	-	55.65	64.65
	顎面モズルス	-	-	[110.33]
51.	眼窩幅(右)	-	44	41
	(左)	-	45	-
52.	眼窩高(右)	-	30	34
	(左)	-	31	36
52/51	眼窩示数(右)	-	68.18	82.93
	(左)	-	68.89	-
54.	鼻幅	-	29	25
55.	鼻高	-	47	52
54/55	鼻示数	-	61.70	48.08
57.	鼻骨最小幅	-	10	9
57(1).	鼻骨最大幅	-	-	-
60.	上顎齒槽長	-	-	49
61.	上顎齒槽幅	-	70	62
62.	口蓋長	-	52	43
63.	口蓋幅	-	42	40
64.	口蓋高	-	12	10
61/60	上顎齒槽示数	-	-	126.53
63/62	口蓋示数	-	80.77	93.02
64/63	口蓋高示数	-	28.57	25.00
72.	全側面角	-	76	84
73.	鼻側面角	-	81	87
74.	齒槽側面角	-	60	70

表47 鼻根部計測値 (mm、度)

		塙原	塙原
		44-1-1	43-1-2
		男性	女性
50.	前眼窩間幅	19	17
	鼻根横弧長	22	20
	鼻根彎曲示數	86.36	85.00
57.	鼻骨最小幅	10	9
44.	両眼窩幅	103	98
50/44	眼窩間示數	18.45	17.35
	前頭突起上幅(右)	10	10
	(左)	10	-
	前頭突起水平傾斜角	88	-
	G-N投影距離	4	-
	鼻根角	(121)	-
	G-R距離	(20)	-
	垂棘高	(5)	-
	鼻根陷凹示數	(25.00)	-

表48 下顎骨計測値 (mm、度)

		塙原	塙原	塙原
		43-1-1	44-1-1	43-1-2
		男性	男性	女性
65.	下顎関節突起幅	-	-	-
65 (1).	下顎筋突起幅	-	-	-
66.	下顎角幅	-	-	-
67.	前下顎幅	-	50	-
68.	下顎長	-	-	-
68 (1).	下顎長	-	-	-
69.	オトガイ高	29	37	28
69 (1).	下顎体高(右)	32	33	-
	(左)	-	32	-
69 (2).	下顎体高(右)	23	31	26
	(左)	-	31	-
70.	枝高(右)	60	-	-
70 (1).	前枝高(右)	61	66	-
	(左)	-	65	-
70 (2).	最小枝高(右)	54	-	50
	(左)	-	52	-

70 (3).	下顎切痕高 (右)	13	-	12
71.	枝 幅 (右)	34	-	33
71a.	最小枝幅 (右)	33	-	33
71 (1).	下顎切痕幅 (右)	43	-	33
79.	下顎枝角 (右)	127	-	127
69 (2)/69	下顎高示数 (右)	79.31	83.78	92.86
	(左)	-	83.78	-
71 / 70	下顎枝示数 (右)	56.67	-	-
71a/70(2)	下顎枝示数 (右)	61.11	-	66.00
70 (3)/71(1)	下顎切痕示数 (右)	30.23	-	36.36

表49 鎖骨計測値 (mm)

塙 原 43-1-1		
男 性		
左		
4.	中央垂直径	10
5.	中央矢状径	13
6.	中央周	38
4/5	鎖骨断面示数	76.92

表50 上腕骨計測値 (mm)

塙 原 43-1-1		
男 性		
左		
4.	下 端 幅	56
5.	中央 最大 径	25
6.	中央 最小 径	17
7.	骨体 最小 周	63
7(a).	中 央 周	71
11.	滑 車 幅	19
12.	小 頭 幅	17
12(a).	滑車幅 オ ピ ビ 小頭幅	41
12(b).	小 頭 幅	22
13.	滑 車 深	23
14.	肘 頭 高 幅	23
15.	肘 頭 高 深	13
6/5	骨体断面示数	68.00

表51 楊骨計測値 (mm)

		塙原	
		43-1-1	
		男性	女性
		右	左
1.	最大長	237	238
1b.	平行長	237	237
2.	機能長	223	222
3.	最小周	41	40
4.	骨体横径	19	17
4a.	骨体中央横径	16	16
4(1).	小頭横径	—	23
4(2).	頸横径	13	13
5.	骨体矢状径	13	13
5a.	骨体中央矢状径	13	13
5(1).	小頭矢状径	—	—
5(2).	頸矢状径	13	15
5(3).	小頭周	—	—
5(4).	頸周	43	44
5(5).	骨体中央周	46	47
5(6).	骨下端幅	31	31
3/2	長厚示数	18.39	18.02
5/4	骨体断面示数	68.42	76.47
5a/4a	中央断面示数	81.25	71.43

表52 尺骨計測値 (mm)

		塙原	
		43-1-1	
		男性	女性
		右	右
3.	最小周	34	30
11.	尺骨矢状径	14	10
12.	尺骨横径	16	14
S	中央最小径	11	10
L	中央最大径	17	14
C	中央周	46	41
11/12	骨体断面示数	87.50	71.43
S/L	中央断面示数	64.71	71.43

表53 大腿骨計測値 (mm)

	塙原		塙原		塙原	
	43-1-1		44-1-1		43-1-2	
	男 性	右 左	男 性	右 左	女 性	右 左
1.	最大長	-	436	-	-	-
2.	自然位全長	-	432	-	-	-
6.	骨体中央矢状径	29	30	31	30	-
7.	骨体中央横径	26	28	27	27	-
8.	骨体中央周	87	89	91	90	-
9.	骨体上横径	-	33	33	-	-
10.	骨体上矢状径	-	24	26	-	-
15.	頸垂直径	-	29	-	-	26
16.	頸矢状径	-	-	-	-	20
17.	頸 周	-	-	-	-	80
18.	頭垂直径	-	44	-	-	-
19.	頭横径	-	44	-	-	38
20.	頭 周	-	142	-	-	-
8/2	長厚示数	-	20.60	-	-	-
6/7	骨体中央断面示数	111.54	107.14	114.81	111.11	-
10/9	上骨体断面示数	-	72.73	78.79	-	-

表54 股骨計測値 (mm)

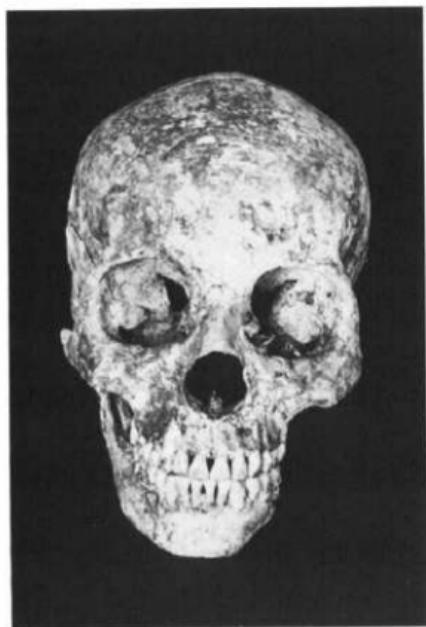
	塙原					
	43-1-1					
	男 性	右 左				
8.	中央最大径	33	32	1.	最大高	38
8a.	栄養孔位最大径	34	35	2.	最大幅	43
9.	中央横径	19	20	3.	最大厚	19
9a.	栄養孔位横径	22	20	4.	関節面高	29
10.	骨体周	83	82	5.	内関節面幅	21
10a.	栄養孔位周	91	88	6.	外関節面幅	26
10b.	最小周	71	-	1 / 2	膝蓋骨高幅示数	88.37
9/8	中央断面示数	57.58	62.50			
9a/8a	栄養孔位断面示数	64.71	57.14			

表55 膝蓋骨計測値 (mm)

	塙原		
	43-1-1		
	男 性	左	
1.	最大高	38	
2.	最大幅	43	
3.	最大厚	19	
4.	関節面高	29	
5.	内関節面幅	21	
6.	外関節面幅	26	
1 / 2	膝蓋骨高幅示数	88.37	



頭蓋側面



頭蓋前面



頭蓋上面

塚原43-1-2号人骨(女性、壯年)



頭蓋側面



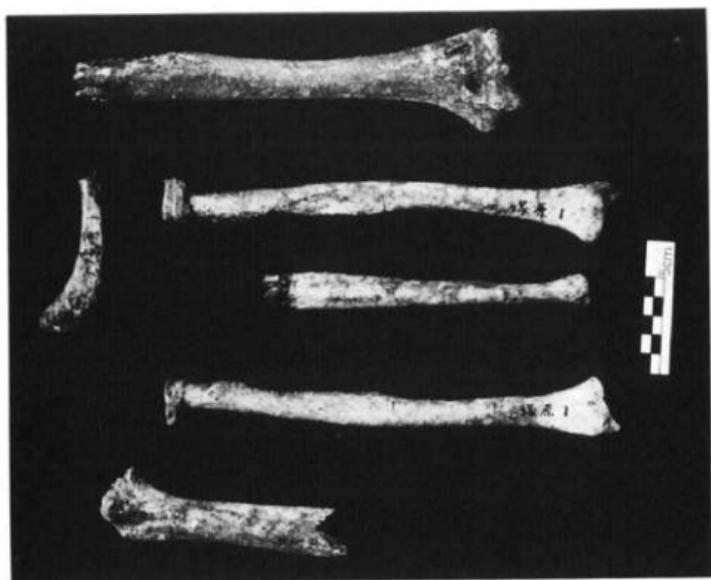
頭蓋前面



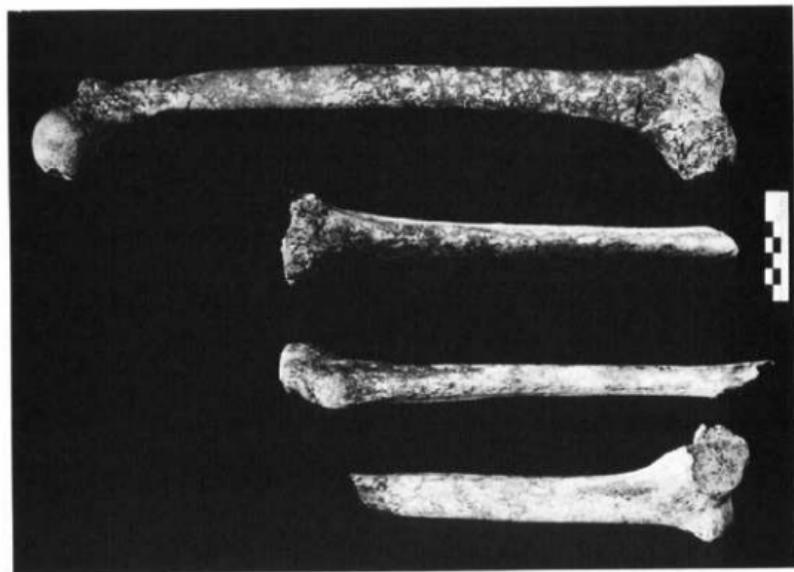
頭蓋上面

塙原44-1-1号人骨（男性、壮年）

塚原43-1-1号人骨(男性、老年)・上肢骨



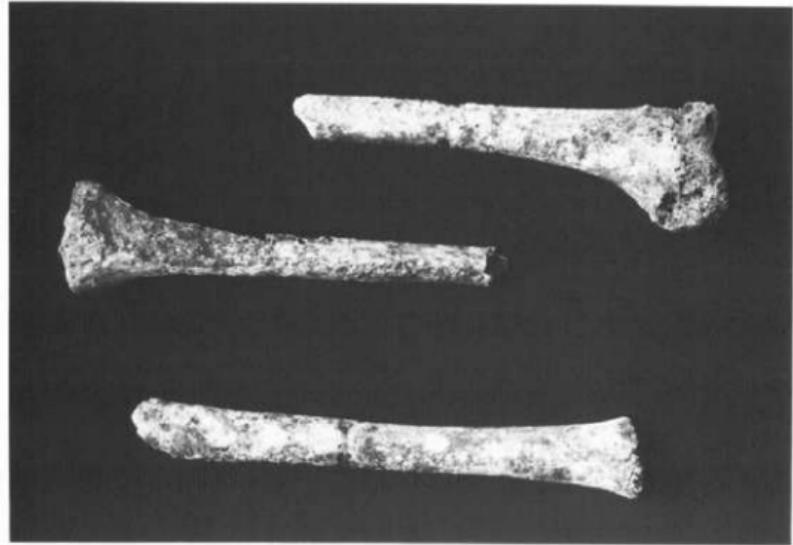
塚原43-1-1号人骨(男性、老年)・下肢骨



壕原43-1-2号人骨(女性、壮年)·下肢骨



壕原44-1-1号人骨(男性、壮年)·下肢骨



2. 宮崎県高崎町出土の古墳時代幼小児骨

分部 哲秋*

遺跡の発掘調査によって見出される人骨の中には、かなり高い割合で幼小児骨が含まれたり、中には50%を越える遺跡もある。筆者は、縄文時代から弥生時代、古墳時代を経て現代に至るまでの幼小児骨を対象として、骨の大きさ、化骨および歯の萌出などを調査し、その時代ごとの幼小児骨の形態的特徴について研究を行っているが、古墳時代の資料は今のところ出土数が少ないのが現状である。

ここで報告しようとする宮崎県北諸県郡高崎町に所在する地下式横穴墓3遺跡から出土した幼小児骨は、比較的顔面部の保存状態が良く、今後の幼小児骨の研究にとって貴重な資料の一つとなると考えられることから、詳細な人類学的観察および計測を行った。その結果について報告しておきたい。

1. 原村上地下式横穴墓群出土の古墳時代小児骨

資料および方法

高崎町大字繩巣字原村上からは、別稿で松下が詳述しているような経過のもとに、昭和45年以降昭和61年までに合計15体の人骨が出土している。このうち2体は小児骨で、表56に示しているように、昭和45年に発掘調査がなされた2基のうち1基から出土したものである。年令および年令区分は、表57に示しているとおりである。なお、これらの人骨の所属時代は、考古学的所見から古墳時代である。

小児骨の年令、年令区分は後記しているように、年令は藤田（1965）による現代人の歯の萌出時期および金田（1957）による現代人の歯根の形成時期を用いて、現代と古墳時代のそれらが大差ないと仮定したうえで推定した。年令区分は、佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨（分部、1981）の報告と同様の区分とした。なお、幼小児骨の性差については種々の研究がなされているが、同定を行うことは難しいのが現状で、本例についても性別は不明である。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によった。

所見

骨の計測値は、文末に一括して掲げた。

* Tetsuaki WAKEBE

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）〕

表56 資料数

遺構番号	出土年	成 人 骨		幼 小 児 骨			合 計
		男性	女性	幼児	小児(I)	小児(II)	
2号墳	昭和45年	1	2	0	2	0	5
3号墳	昭和45年	1	0	0	0	0	1
46-1号墳	昭和46年	0	1	0	0	0	1
4号墳	昭和49年	1	1	0	0	0	2
5号墳	昭和57年	0	2	0	0	0	2
6号墳	昭和61年	1	1	0	0	0	2
7号墳	昭和61年	0	2	0	0	0	2
合 計		4	9	0	2	0	15

表57 資 料

人骨番号	年令	年令区分	性別
2号墳4号人骨	6才	小児(I期)	不明
2号墳5号人骨	10才	小児(I期)	不明

2号墳4号人骨（6才、小児I期）

(1) 頭蓋

1) 脳頭蓋

脳頭蓋は前頭骨の左半、左側頭頂骨の一部および左側側頭骨が残っている。骨壁は薄く、前頭部はよく膨隆している。また、眉間に弱い突出が認められる。頭型は欠損部が多くて不明である。

2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は、右側の眼窩部と下顎の下頬枝を欠く他は比較的よく残存している。計測値は表59に示しているとおりであるが、上顎幅および中顎幅は右側の計測点が欠損しているので、正中面から左側までの距離を2倍することにより求め、それぞれ ($41\text{mm} \times 2 = 82\text{mm}$)、($40\text{mm} \times 2 = 80\text{mm}$) となる。高径は顎高は計測できないが、上顎高は51mmである。したがって、ウイルヒヨーの上顎示数は(63.75)となり、顔面型は過低上顎(hyperchamaeprosop)に属しており、低顎の傾向が強く認められる。

眼窩は、眼窩幅が35mm(左)、眼窩高は31mm(左)で、幅径に比べて高径が大きい。したがって、眼窩示数は88.57(左)となり、眼窩型は高眼窩(hypsikonch)(左)に属している。また、

鼻部は鼻幅が20mm、鼻高は37mmで、鼻指数は54.05となり、広鼻(chamaerrhin)に属している。

下顎は下顎体が残存している。しかし、左側のMの位置での下顎体高のみが計測可能で、17mm(左)と下顎体は低い。

残存した歯を歯式で示すと、次のとおりである。

(M ₂)	M ₁	m ₂	m ₁	c	i ₂	i ₁	/	/	/	m ₁	m ₂	M ₁	(M ₂)	* 萌出途中 () 歯槽内埋伏 / 不明
(M ₂)	M ₁	m ₂	m ₁	c	i ₂	I ₁	I ₁	i ₂	c	m ₁	m ₂	M ₁	(M ₂)	
	*	*												

歯の萌出状態は、永久歯が上下両顎の第一大臼歯まで萌出しており、下顎の乳中切歯は脱落し中切歯が萌出を開始している。咬耗度は乳歯がBrocaの1から2度、第一大臼歯は1度の咬耗が局部的に認められる。歯根の形成程度は、上顎中切歯が現代人の歯根の約25%、下顎中切歯は約40%、下顎側切歯は約30%ほどである。

(2) 化骨

化骨の進行程度は、頭蓋の蝶後頭軟骨結合部のみが観察でき、未癒合である。

(3) 特殊所見

左側眼窓の上面には、幼小児骨によく見られるcribra orbitaliaが認められる。しかし、これは軽度である。右側は欠損により不明である。また、外耳道は左側のみが観察可能で、骨腫は認められない。

(4) 年令

この人骨の年令を歯の萌出状態および歯根の形成程度から推測してみると、先ず萌出状態は、上下両顎の第一大臼歯が萌出を完了し、下顎の中切歯が萌出の途中である。藤田(1965)によれば、現代人の上顎第一大臼歯の萌出年令は男性平均で6才8ヶ月、女性平均で6才4ヶ月である。また、下顎の中切歯は男性平均6才6ヶ月、女性平均6才2ヶ月である。金田(1957)の歯根形成時期によれば、この人骨の上顎中切歯の形成程度は現代人の6才、下顎中切歯は5才後半、下顎側切歯は6才に相当する。以上のことから、仮りに古墳時代と現代における歯の萌出年令および歯根の形成時期が大差ないと仮定すれば、この人骨の年令は6才の小児と推定される。

2号墳5号人骨(10才、小児Ⅰ期)

(1) 頭蓋

1) 頭頂蓋

頭頂蓋は、右側頭頂骨の下半、後頭骨の右半および右側側頭骨を欠いている。骨壁は成人骨女性の厚さよりもやや薄い。前頭部は、前頭結節は発達しているが、後ろへや傾いている。また、眉間はやや突出しているものの眉上弓の発達はまったく認められない。計測値は表58に示しているように、頭蓋最大長が(176)mm、頭蓋最大幅は(130)mm、バジオン・ブレグマ高は128mmで

ある。頭蓋最大幅は右側の計測点が欠損しているために、左側のエウリオンから正中面までの垂直距離を2倍(65mm×2=130mm)することにより求めた。したがって頭蓋長幅示数は(73.86)、頭蓋長高示数は(72.73)、頭蓋幅高示数は(98.46)となり、頭型はそれぞれ長頭、正頭、高頭(dolicho-, ortho-, akrokrana)に属しており、頭型はこの年令にしては長頭に傾いている。

その他の計測値は、最小前頭幅が92mm、最大前頭幅は109mm、頭蓋底長は93mmである。

2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は右側の頬骨の外側部を欠いているが、その他は完全である。顔面の計測値は、表59に示しているとおりである。頬骨弓幅および中顎幅は右側の計測点を欠損しているので、左側から正中面までの垂直距離を計り2倍することにより求めると、それぞれ(116)mm、(98)mmである。頬骨弓の外側への張りだしが弱いために頬骨弓幅は普通であるが、中顎幅はこの年令にしては大きい。顎高および上顎高は112mm、67mmで、顔面の高径はこの年令にしては大きい。コルマンとウイルヒーの顔示数および上顎示数は、(96.55)(K)、(57.76)(K)、(114.29)(V)、(68.37)(V)となり、顔面型は、それぞれ過狭顎(hyperleptoprosop)、狭上顎(leptognathia)、低顎(chamaeprosop)、低下顎(chamaeprosop)に属している。ウイルヒーの分類では低顎となるが、顔面は他の小児骨に比べて高い。

次に、鼻根部は上顎骨の前頭突起が前後方向に立っておらず、また鼻骨も水平に近くて鼻根は扁平である。前眼高間幅は19mm、両眼窩幅は97mmで、眼窩間示数は19.59となり示数値は大きい。両幅径とも大きいが、特に前眼高間幅は大きくて、鼻根部は広い。眼窩は、眼窩幅が43mm(右、左)、眼窩高は32mm(右、左)で、眼窩示数は74.42(右、左)となり、眼窩型は低眼窩(chamaekonchion)(右、左)に属している。眼窩は高径の割に幅径が大きく、低眼窩の傾向が強い。

鼻部は鼻幅が27mm、鼻高は45mmで、鼻示数は60.00となり、鼻型は過広鼻(chamaerrhin)に属している。鼻高はそれほどほどでもないが、鼻幅は大きく、広鼻の傾向が強い。また、鼻骨最小幅は10mm、鼻骨最大幅は20mmで、鼻骨も横に広い。

下顎骨は、右側の下顎枝から下顎角、左側の下顎底を欠いている。そのため計測はオトガイのみが行え32mmである。観察によれば、下顎体は高く、また頑丈である。

歯について残存したものを歯式で示すと、次のとおりである。

(M ₃) ○ M ₁ (P ₂) ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ m ₂ M ₁ ○ ○	* 明出途中 () 齒槽内埋伏 ・ 遊離歯 ○ 齒槽開存 / 不明
/ M ₂ / m ₂ P ₁ C I ₂ I ₁ I ₁ I ₂ C P ₁ (P ₂) M ₁ M ₂ (M ₃)	

歯の萌出状態は、上下両顎の第一小白歯までは萌出し、下顎の第二大臼歯が萌出途中、上下両顎の第二小白歯は歯槽内に埋伏している。咬耗の程度は第二乳臼歯がBrocaの2度、萌出している永久歯は1度である。歯根の形成程度は下顎のみが計測可能で、中および側切歯が完成しており、犬歯および第一小白歯は約75%、第二小白歯は約40%形成している。

(2) 化骨

化骨の進行状態は、前および後頭内軟骨結合部はすでに骨癒合を完了し、蝶後頭軟骨結合部は未癒合である。

(3) 特殊所見

眼窩の上壁中央部にはかなり強いcribra orbitaliaが認められ、また、左側の頭頂骨には頭頂結節と矢状縫合の間に $2.5 \times 2\text{cm}$ 、ラムダ縫合よりに $1.5 \times 1.5\text{cm}$ 、右側側頭骨の側頭崎前半部全体にcribra craiiが認められる。

外耳道は左側が残っているが、骨腫は認められない。上顎骨の切歯部には、歯根を下に向かって過剰歯が1対存在している。

(4) 年令

歯の萌出状態から年令を推定してみると、藤田（1965）によればすでに萌出している下顎第一小臼歯は男性平均9才10ヶ月、女性平均9才7ヶ月で、萌出途中の下顎第二大臼歯は男性平均11才3ヶ月、女性平均11才1ヶ月で、歯槽内埋伏の下顎第二小臼歯は男性平均10才4ヶ月、女性平均10才2ヶ月でそれぞれ萌出する。したがって萌出状態からは9才の終りから10才と推定される。また、金田（1957）による歯根の形成時期からは、下顎の側切歯は完成しているので9才以上、犬歯は10才の後半、第一小臼歯は10才後半に相当し、歯根の形成程度からは約10才と推定される。

以上のことから、仮りに古墳時代と現代との歯の萌出時期および歯根の形成時期が大差ないと仮定すれば、この人骨の年令は約10才の小児と推定される。

まとめ

宮崎県北諸県郡高崎町大字柳瀬に所在する原村上地下式横穴墓群は、昭和45年（1970年）から昭和61年（1986年）までの発掘調査により、古墳時代に属する人骨が合計15体出土している。これらのうち昭和45年に出土した人骨の中には、2体の小児骨が含まれている。

この小児骨2体に関する人類学的観察および計測の結果について要約すると、次のとおりである。

1. 歯の萌出状態および歯根の形成程度による小児骨の年令と年令区分は、2号墳4号人骨が6才で小児Ⅰ期、2号墳5号人骨は10才で小児Ⅰ期と推定される。
2. 脳頭蓋は、前頭骨が2号墳4号はよく立っているのに対して、2号墳5号はやや後方に倒れている。計測は2号墳5号のみが可能で、頭蓋最大長が(176)mm、頭蓋最大幅は(130)mm、バジオン・ブレグマ高は128mmで、頭蓋長幅示数は(73.86)、頭蓋長高示数は(72.73)、頭蓋幅高示数は(98.46)となる。頭型はそぞれ長頭、正頭、高頭(dolicho-、ortho-、akrokrana)に属しており、この年令にしては長頭の傾向が著しい。
3. 顔面頭蓋は、2号墳4号は中顎幅が(80)mm、上顎高は51mmで、ウイルヒヨーの上顎示数

は(63.75)となり、顔面型は過低上顎に属している。上顎部には低顎の傾向が強く認められる。鼻型は広鼻に属しているが、眼窓型は高眼窓(左)に属している。

2号墳5号は頬骨弓幅が(116)mm、中顎幅は(98)mm、顎高は112mm、上顎高は67mmで、顯示数および上顎顯示数は(96.55)(K)、(114.29)(V)、(57.76)(K)、(68.37)

(V)となり、顔面型は過狭顎、低顎、狭上顎、低下顎となる。ウイルヒョーの分類では低顎ないし低下顎となるが、顔面の高径は他の同年例のものに比べるとむしろ高い方である。しかしながら、眼窓と鼻部は低眼窓(右、左)、過広鼻に属している。

4. 鼻根部の形態は、2号墳5号については広くて、全く扁平である。
5. 特殊所見として、cribra orbitaliaが両者に、cribra craniiが2号墳5号の脳頭蓋の3ヶ所に認められる。

宮崎県の地下式横穴墓から出土した幼小児骨は、現在までのところ短頭傾向を示す、鼻根部が広くて扁平である、顔面には低顎傾向が強く認められるなどを特徴としていた。しかしながら、原村上地下式出土小児骨2体のうち2号墳5号(10才)は、鼻根部、眼窓、鼻部の形態は今までのものとよく似ているが、頭型が長頭傾向を示し、顔面が高い点では、従来のものとは異なる特徴を備えたものと言える。このような形質の由来が単なる個体差なのか別の要因によるのかについては、成人骨での結果を踏まえて、今後考察して行きたい。

表58 脳頭蓋計測値 (mm)

2号墳5号 (10才)	
1.	頭蓋最大長
8.	頭蓋最大幅
17.	バジオン・ブレグマ高
8/1	頭蓋長幅示数
17/1	頭蓋長高示数
17/8	頭蓋幅高示数
9.	最小前頭幅
10.	最大前頭幅
5.	頭蓋底長
26.	正中矢状前頭弧長
29.	正中矢状前頭弦長
29/26	矢状前頭示数
	90.83

表59 顔面頭蓋計測値

(mm)

		2号填4号 (6才)	2号填5号 (10才)
40.	顔長	—	96
41.	側顔長	62	67
43.	上顎幅	(82)	98
45.	頬骨弓幅	—	(116)
46.	中顎幅	(80)	(98)
47.	顎高	—	112
48.	上顎高	51	67
47/45	顎示数(K)	—	(96.55)
48/45	上顎示数(K)	—	(57.76)
47/46	顎示数(V)	—	(114.29)
48/46	上顎示数(V)	(63.75)	(68.37)
50.	前眼窩間幅	17	19
44.	両眼窩幅	—	97
50/44	眼窩間示数	—	19.59
51.	眼窩幅(左)	35	43
	(右)	—	43
52.	眼窩高(左)	31	32
	(右)	—	32
52/51	眼窩示数(左)	88.57	74.42
	(右)	—	74.42
54.	鼻幅	20	27
55.	鼻高	37	45
54/55	鼻示数	54.05	60.00
55(1).	梨状口高	—	24
56.	鼻骨長	—	21
57.	鼻骨最小幅	9	10
57(1).	鼻骨最大幅	—	20
57/57(1)	模鼻骨示数	—	50.00
60.	上顎齒槽長	—	52
61.	上顎齒槽幅	56	66
61/60	上顎齒槽示数	—	126.92
62.	口蓋長	30(M)	46
63.	口蓋幅	30(M)	35
64.	口蓋高	5(M)	6
63/62	口蓋示数	100.00 (M)	76.09
64/63	口蓋高示数	16.67 (M)	17.14

2. 繩瀬小学校地下式横穴墓出土の古墳時代小児骨

資料および方法

高崎町大字繩瀬にある繩瀬小学校の校庭からは、表60で示しているように昭和42年以降昭和47年までの3回の発掘調査で、3基の地下式横穴墓が発見され、合計6体の人骨が出土している。このうち1体が小児骨（47-3号人骨）で、昭和47年に男性人骨2体といっしょに出土したものである。なお、所属時代は考古学的所見から古墳時代である。

小児骨の年令は13才から14才と推定されるが、これは後記しているように歯が残存していないために、大腿骨の大きさを近代（明治）の小児骨と比べ推定したものである。また、計測はMartin-Saller（1957）の方法に従った。

表60 資料数

	成 人		小 児	合 計
	男 性	女 性		
昭和42年出土人骨	2	0	0	2
昭和46年出土人骨	0	1	0	1
昭和47年出土人骨	2	0	1	3
合 計	4	1	1	6

所 見

47-3号人骨（13-14才、小児II期）

(1) 頭蓋

脛頭蓋の一部が残っているのみである。残存部は左右の頭頂骨で、矢状縫合に沿う部分のしかも後半である。骨壁の厚さは成人骨よりも薄く、成人骨の2/3程度である。他の小児骨と比べてみると、小児I期の後半から小児II期、およそ10才から15才にかけてのものと推測される。

(2) 四肢骨

上肢骨は残存しておらず、下肢骨のうち大腿骨と脛骨が残っている。大腿骨は左側で、骨体の両端を欠いているために、最大長は計測不可能である。見たかぎりでは長さは太さの割に短いものと思われる。骨体上部は腐朽しており計測できないが、観察によれば筋の付着部が外側方向によく発達し、骨体上部はやや扁平である。骨体中央部の計測値を表61においてみてみると、骨体中央矢状径は23.0mm（左）、骨体中央横径は19.8mm（左）、骨体中央周は66.0mm（左）である。後面の粗線は良く発達し、後方に張り出しているため、骨体中央断面示数は116.16（左）となり、示数値は大きい値を示している。

次いで、脛骨も左側が残っており、骨体の中央部のみである。前縁近くの緻密質が剝離しており計測は不可能である。しかしながら、観察によれば前後径が小さく、骨体に扁平性は認められない。

(3) 年令

歯が残存していないので、頭蓋の骨壁の厚さと大腿骨の骨体の太さから、おおまかな年令を推定してみた。先ず、頭蓋壁の厚さからは10才から15才の範囲のものと推測される。また、大腿骨の骨体中央周は、近代（明治）小児骨の13才および14才の平均値に最も近い。したがって、この人骨の年令は13から14才の小児（II期）と推測される。

まとめ

宮崎県北諸県郡高崎町大字繩瀬に所在する繩瀬小学校の校庭からは、昭和42年、昭和46年および昭和47年に合わせて3基の地下式横穴墓が発見され、古墳時代に属する人骨が合計6体出土している。昭和47年に出土した人骨3体のうち1体が小児骨で、この小児骨に関する人類学的観察および計測の結果を要約すると、次のとおりである。

1. 大腿骨の大きさから推定した47-3号人骨の年令は、13才から14才の小児である。
2. 大腿骨は、観察によれば骨体の太さの割に短い。骨体中央周は66.0mm（左）、骨体中央矢状径は23.0mm（左）、骨体中央横径は19.8mm（左）で、骨体中央断面示数は116.16（左）となる。粗線の発達は良好で後方に張り出している。また、骨体上部も扁平である。脛骨（左）の骨体には、観察した限りでは扁平性は認められない。

表61 大腿骨骨体計測値

47-3号 (13-14才)		
	(右)	(左)
6. 骨体中央矢状径	--	23.0
7. 骨体中央横径	--	19.8
8. 骨体中央周	--	66.0
6 / 7 骨体中央断面示数	--	116.16

3. 塚原地下式横穴墓出土の古墳時代幼児骨

資料および方法

高崎町大字繩瀬字塚原に所在する塚原地下式横穴墓は、松下が別稿で詳しく述べているように昭和43年5月に発掘調査が行われ、表62に示しているように合計3体の人骨が出土し、うち1体は幼児骨であった。なお、この人骨の所属年代は、考古学的所見から古墳時代後期と推定されている。

この幼児骨の年令は、藤田（1965）による現代人の歯の萌出時期と金田（1957）による現代人の歯根形成時期を用いて、古墳時代と現代のそれらが大差ないと仮定したうえで推定した。年令区分は佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨（分部、1981）と同様の区分とした。また、幼小児骨の性差については種々の研究がなされているが、なお同定は難しいのが現状で、本例についても不明である。

計測はMartin-Saller（1957）の方法に従った。

表62 資 料

人骨番号	性別	年令区分	年令
43-1-1号人骨	男性	熟年	
43-1-2号人骨	女性	壮年	
43-1-3号人骨	-	幼児	3才

所 見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

43-1-3号人骨（3才、幼児）

① 頭蓋

1) 脳頭蓋

脳頭蓋は前半部が残っている、骨壁は薄く、厚さは成人骨の約1/2である。前頭骨は前頭結節が発達し、前頭部は立ち、幼児骨の特徴をよく表している。また、眉間と眉上弓の隆起は認められない。計測が可能であった項目は限られ、表63に示しているとおりである。

2) 顎面頭蓋

顎面頭蓋は、右側の頬骨と上顎骨の一部および下顎骨を欠いているほかは、ほぼ完全である。顎面の計測値は表64に示しているとおりである。幅径では頬骨弓幅は計測できないが、中顎幅は右側の計測点を欠損しているために左側の計測点から正中面までの垂直距離を計測し、それを2倍することにより求め、(76)mmである。高径は顎高は得られないが、上顎高は45mmである。し

たがって、ウイルヒョーの上顎示数は、(59.21)となり、顔面型は過低上顎(hyperchamaeoprosop)に属しており、低上顎の傾向が非常に強く認められる。

次いで、鼻根部は上顎骨の前頭突起が前後方向に立っておらず、鼻骨も水平に近い。計測値は前眼窓間幅が16mm、両眼窓幅は80mmで、眼窓間示数は20.00となり、鼻根の幅および示数值はこの年令にしては大きい。つまり鼻根部は広くて、扁平である。

眼窓は、眼窓幅が34mm(右、左)、眼窓高は29mm(右)、30mm(左)で、眼窓示数は85.29(右)、88.24(左)となり、眼窓型は高眼窓(hypsiknoch)(右、左)に属しており、幼児骨の特徴を表している。

鼻部は鼻幅が21mm、鼻高は33mmで、鼻高は平均的であるが鼻幅がやや広いために、鼻示数は63.64と示数值は大きくなり、鼻型は過広鼻(hyperchamaerrhin)に属している。歯は上下両顎のものが残存しているが、歯式で示すと次のとおりとなる。

(M ₁) m ₂ m ₁ ○ ○ ○	○ i ₂ ○ m ₁ m ₂ (M ₁)	() 齒槽内埋伏 ○ 齒槽開存 • 遊離歯 / 不明
/ / / (C) / (I ₁)	(I ₁) (I ₂) (C) m ₁ / (M ₁)	
• • • • • •	• • • • • •	

歯の萌出状態は乳歯がすべて萌出し、永久歯は歯槽内に埋伏している。咬耗度は上顎の第二乳臼歯はBrocaの1度、その他は2度である。歯冠および歯根の形成程度は、永久歯では歯冠の完成したものはない。

(2) 四肢骨

四肢骨で残っていたのは左側の大脛骨のみで、骨体下端の内側部を欠いているほかは完全である、計測値は表65に示しているように、骨体の最大長は172mm(左)、骨体中央周は39.0mm(左)で、長厚示数は22.67(左)となり、骨体は長さの割にやや細い。

骨体中央部は骨体中央矢状径が12.6mm(左)、骨体横径は12.0mm(左)で、骨体中央断面示数は105.00(左)となり、粗線がこの年令としてはやや発達し、後外側に張りだしている。

骨体の上部は骨体上横径が15.2mm(左)、骨体上矢状径が11.6mm(左)で、上骨体断面示数は76.32(左)となり、示数值はこの年令にしては小さくて、骨体上部は扁平である。

(3) 特殊所見

この幼児骨の外耳道は両側とも欠損しており、骨腫の有無は不明である。また、眼窓の上壁にはcribra orbitaliaは認められず、残存部は少ないが、脳頭蓋にもcribra craniiは見られない。

(4) 年令

歯の萌出状態から年令を推定してみると、先ずこの人骨の歯は乳歯がすべて萌出している。藤田(1965)の現代人の歯の萌出時期によれば、乳歯のうちで一番遅く萌出するのは上顎の第二乳臼歯で、男性平均2才3ヶ月、女性平均2才4ヶ月である。咬耗の程度も合せると3才以上であ

る。また、この人骨の永久歯では歯冠の完成した歯はない。金田（1957）の現代人の歯根の形成時期によれば、上顎第一大臼歯は4才においてはすでに歯冠が完成し、歯根の形成が始まっていることから、歯冠および歯根の形成程度からは3才以下である。

以上のことから、仮りに現代と古墳時代における歯の萌出と歯根形成時期が大差ないと仮定すれば、この人骨の年令は3才の幼児と推定される。

まとめ

宮崎県北諸県郡高崎町大字繩瀬字塚原に所在する塚原地下式横穴墓から、昭和43年の発掘調査において古墳時代後期に属す人骨3体が出土し、うち1体が幼児骨であった。この幼児骨に関する人類学的観察および計測の結果を要約すると、次のとおりである。

1. 43-1-3号人骨の年令は、歯の萌出状態および歯根の形成程度から、3才の幼児と推定される。
2. 顔面頭蓋の計測値は、中額幅が76mm、上顎高は45mmで、ウイルヒューの上顎示数は(59.21)となる。顔面型は過上顎に属し、低上顎の傾向が非常に強く認められる。鼻部は鼻型が過広鼻に属しているが、眼窩は高眼窩（右、左）に属している。
3. 鼻根部は広くて、扁平である。
4. 大腿骨は骨体の最大長が172mm（左）、骨体中央周は39.0mm（左）で、長厚示数は22.67（左）となり、骨体は長さの割にやや細い。また、骨体中央断面示数は105.00（左）、上骨体断面示数は76.32（左）で、この年令にしては粗線の発達はよく、骨体上部も扁平である。
5. 頭蓋には、cribra orbitaliaおよびcraniiは認められない。

以上のように、この幼児骨に認められる特徴の一つとして眼窩がやや高いことがあるが、これは年令が低いものほど高眼窩であることから、幼児的特徴を表していると考えられる。鼻根部が広くて扁平である、上顎部には低顎傾向が強く認められるなどは、従来の地下式横穴墓出土の幼小児骨と共通した形質を示したものと言える。

表63 脳頭蓋計測値 (mm)

43-1-3号 (3才)	
9.	最小前頭幅
10.	最大前頭幅
26.	正中矢状前頭弧長
29.	正中矢状前頭弦長

表64 顎面頭蓋計測値 (mm)

		43-1-3号 (3才)
43.	上顎幅	83
46.	中顎幅	(76)
48.	上顎高	45
48/46	上顎示数(V)	(59.21)
50.	前眼窩間幅	16
44.	両眼窩幅	80
50/44	眼窩間示数	20.00
51.	眼窩幅(左)	34
	(右)	34
52.	眼窩高(左)	30
	(右)	29
52/51	眼窩示数(左)	88.24
	(右)	85.29
54.	鼻幅	21
55.	鼻高	33
54/55	鼻示数	63.64
57.	鼻骨最小幅	8
60.	上顎歯槽長	37
61.	上顎歯槽幅	50
62.	口蓋長	20
63.	口蓋幅	29
64.	口蓋高	7

表65 大腿骨骨体計測値 (mm)

		43-1-3号 (3才)
	(右)	(左)
1.	最大長	- 172
6.	骨体中央矢状径	- 12.6
7.	骨体中央横径	- 12.0
8.	骨体中央周	- 39.0
9.	骨体上横径	- 15.2
10.	骨体上矢状径	- 11.6
8/1	*長厚示数	- 22.67
6/7	骨体中央面示数	- 105.00
10/9	上骨体断面示数	- 76.32

* Martin法では8/2(自然位全長)
であるが、8/1で算出した。

<掲筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた高崎町教育委員会の黒木昭三先生ならびに宮崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。>

参考文献

1. 金田義夫, 1957 : 日本人の永久歯における齒根完成時期の研究。歯科月報、30：165-172.
2. 藤田恒太郎, 1965 : 歯の話。岩波書店。東京 : 57-98.
3. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-504.

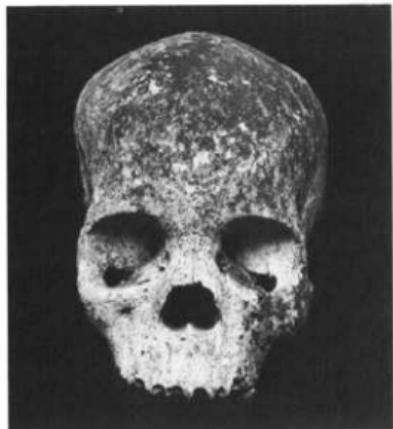
4. 分部哲秋、1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：254-264。
5. 分部哲秋、1983：宮崎県高岡町旭台地下式横穴出土の古墳時代小兒・成年骨。宮崎県文化財調査報告書、26：112-128。
6. 分部哲秋、1984：宮崎県野尻町大荻地下式横穴出土の古墳時代小兒・成年骨。宮崎県文化財調査報告書、27：113-131。



原村上 2 号墳 4 号人骨（6 才、小児 I 期）



原村上 2 号墳 5 号人骨（10 才、小児 I 期）



原村上 2 号墳 5 号人骨（10 才、小児 I 期）



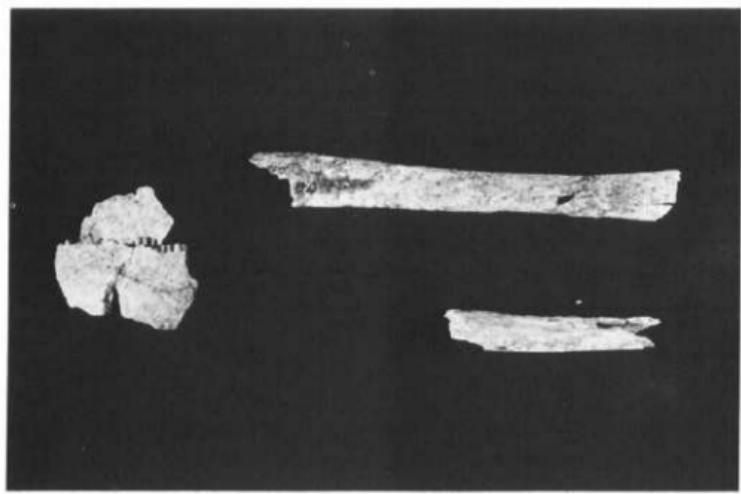
原村上 2 号墳 5 号人骨（10 才、小児 I 期）



塚原43-1-3号人骨（3才、幼児）



塚原43-1-3号人骨（3才、幼児）



蘿蔔小学校47-3号人骨（13-14才、小兒Ⅱ期）

高崎町文化財調査報告書

第 1 集

原村上地下式横穴墓群

高崎町出土の古墳時代人骨

発行年月日 昭和63年3月31日

発 行 宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会

印 刷 ㈱宮崎南印刷

TEL (0985)51-2745